

種類によりて大小あり、色も同じからず、種類甚多し、皆力強し好みて糖分を食ふ、動物植物の汚穢せざるものを取り食ふを以て、大に土地を清潔にするの効ありと云ふ、

あつむかひ(鸚鵡貝)

軟體動物にして、四腮類なり、色白く紫を帯びたる模様ありて、其形も鸚鵡の頭に似たる貝の名なり、此貝は其色うるはしく、其數多かられば、酒杯、又は、釣り花いけ、などに造りて玩賞せり、此の貝の肉は殻を去れば形たこに似て、其味美なり、

あつむ(鸚鵡)

鸚鵡は攀木類に屬する鳥にして熱帯地方に産す、羽色多くは白し、頭にささかもあり、爪、及び嘴の力は大に強く、舌は肥厚肉質にして、人の舌に似たり、故に巧みに人の言語を直似ぶ、頗る、美麗の鳥にて、足長くして體

の太さにははりの三倍程もあり、其體頗る肥豐せり、翼尾共にして、羽毛は甚だ美麗なり、肉の味佳美なり、種類尤も多くして四百餘種もあり、常に雌雄双棲し、果實を食す、其羽毛の美麗なるを以て裝飾として種々に利用するものなり、

あかあり(赤蟻)

節足動物、昆蟲類の一種にて、多くは人家近くに居るものなり、長さ一分に足らざる小きものにて、其色は赤砂糖の色に似たり、又、家ありともいふ、後體に毒腺を具へて、常に蟻酸を分泌し以て自身を護るの備へさなす、蟻の體より排泄する、液汁を極めて好む、故に常に之を愛護す、又頗る甘味のもの嗜食す、家中如何なる所にも甘味類を置くときは忽ち行き之を喰ふ、

あかかけ(赤唐毛)

奇蹄類、馬屬の一

なり、其種類多きが如しと雖ども、只僅に一種の變性せるに過ぎざるなり、毛色赤みを帯びたる鹿毛をいへり、同産地にても黒毛の色を帯びたる馬にひしては力強くして又きしやうも強し、

あかか(赤蟹)

硬殼蟲、十脚類に屬す、體は短く腹は風曲して、體の内側に着く、眼は蝦と同く、他は通常のかにと同一なり、小川、又は川に住むものなり、大き二寸ばかりにて、甲は方形なり、いしかに、又は、あかかにともいふ、土地によりては、之を食する所あり、奥羽の地方にては、つきつぶしてかにかまぼことなして食ふ、

あかがへる(赤蛙)

有索動物、兩棲類、無尾族にして蟲類を食す、山野の草中、小池、小川、沼等の附近に棲息し、甚だ軽く跳ね、形やせて、肌はうす赤色なり、

或は藥となり、或は灸りて食ふ、小兒の五疳を治するには極めて妙なりといふ、頭骨扁潤、皮膚は滑濕なり、大小數多の腺疣を具ふ、一種の粘液を分泌す、二個の顆状突起を有し、以て脊柱と關節をなす、雌雄其形色等を異にす、卵生にして、卵は透明なる、蛋白様の物質に因て、包被せらる、

交尾期に至れば、雄の體色鮮美を加へ、又は其外形上に、多少の變化を現す、

あかかひ(赤貝)

軟體動物、薄腮類の一種なり、殼の表に縦凸起あり、ほのかに毛を生じたり、貝の表は濃き鼠色にして、中は紫色を帯ぶ、肉の色は赤し、よりに此名あり、酢づけさなし、又はうま煮として賞美す、古くはきさといへり、此の液中に、絲蟲の仔蟲存する事あり、

あかこ(赤子)

溝に生ずる蟲の名なり、

色赤く、形小なる蛆蟲にして、取りて金魚の餌とすべし、異名をあかほうふら、又はあかほうふり、といへり、

あかうなぎ(赤鰻)

鱈魚族の一種なり、全身の色赤く、又極めて粘滑なり、其形圓くして、ごちやうに似たるうなぎをいふ、目甚だ小なるより、又の名をめぐらうなぎともいへり、鱗は、細微にして皮中に潜没す、鱗は皆黒色にして腹黯なし、肉は極めて多脂、

あかぢみ(赤蟬)

節足動物、昆蟲類、其形大きくして、濃き茶色の翅あり、八月頃多く出づ、異名をあぶらぢみ、あきぢみ、なごいへり、皆美音を出す小兒等多く玩賞す、口部は吻となりて、物を刺し液體を吸ふに適す、二雙の翅は薄膜同形なるあり、又前翅のみ基部分のやや厚きものあり、

あかだい(赤鯛)

有脊動物、魚類中の、硬鱗類なり、頭、胴、及び尾、の三部は他の脊椎動物の如く、判然せず、頸部は全くなし、脊鱗、臀鱗、及び尾鱗の三種あり、潮をたなるれば、色あざやかに、赤くなるものをいふ、味こそは春季に於てすくれたり、故に一名さくらだいなとも呼ぶ、四時ともに、祝賀の儀式の料理に、主として用ゐる、大きさ尺前後のものなり、静岡興津より産出するものを最も賞美す、昔はあかめといへり、全身硬き鱗あり、消化管は口を以て始まり口腔を経て肛門に終る

あかさんぼ(赤蜻蛉)

昆蟲類、羽翅族の一種なり、身、翅、皆赤く、形小なり、春秋二季の中にて、殊に秋多し、古言に、あかさんぼといへり、朝夕と晝間は、翅の働き余程異なるものにて、晝間は、

よく翅をのほしてとび、夕は、ちみみてとばす、雄は青色、雌は褐色なり、其交尾せんさするときは、雄は其腹端に鉤を以て、雌の頸にさしはさみ、雌は腹部を屈曲して、其端を雄の腹部に在る處の生殖器に附着せしめ以て其の精液を受く、雌は卵を水中に落とし夏の中ば頃に至りて孵化す、

あかなまづ(赤鯰)

喉鰓類の一族なり、頭扁大なり、齒は小にして多くは鱗なし、大きき三四寸にして、捕ふれば、よく人を齧す、湍流などに接みて、形鯰に似て味ひ美なり、口邊に鬚多し、概子淡水魚なり、

あかにし(赤螺)

軟体動物、雙貝類の一種にして其形さうえに似て尖りたり、殻の内部の色赤く味ひ美ならざるも、食用には供すべし、殻を焼きて細末とし、

最上の齒磨とす、又薬料に供すべし、

あかぢち(赤蜂)

節足動物、膜翅類にして、身に黒き襟茶の斑文あり、翅も襟茶の花より密をすい取る、口にてよく、固形物を咬み、又は流動物を吸収するに適す、四翅は同形にして膜状なり、左右の複眼の間に常に三個の單眼を具有す、雌は腸部に産卵管を有するものあり、本能の能く發達するものにして、其産卵の有様仔蟲を養ふの様子、又社會的の生活を營む風の習慣は實に吾人を驚かしむ、

あかはら(赤腹)

有髓動物にして有胸類なり、形つぐみに似て胸と腹とは赤く、よく群飛す、嘴は其基部柔軟なり、翼尖れり、又後肢短く歩行の際、後趾地上に到らず、ぬもりの異名にもいへり、又うぐひの一名にもいふ、皆腹の赤きより此

名あり、

あかます(赤鱒)

喉鰓類の一族なり、頭部のみ裸出す、脊鰭の後部に、脂鰭を具ふ、べにますをいふ、又、はたじろの類の魚にて、赤き斑文なるものをいへり、其肉はしまりて食用に供す、形ち鮭に似て小なり、本邦にては殆んど各海に産す、産卵期には河川に浜上す、卵巢には輸卵管なく、卵熱すれば、腹腔に遊出して肛門の後にある一孔より体外に出づ、之を推積する時は藍汁垂る、煮て藍汁を醬油の代品とすべし、鱒に比しては、産出するこま少なり、

あかめ(赤女)

有脊動物、硬鱗類なり、全身鱗を以て蔽はる、縦扁にして紡錘形なり、骨格極めて堅硬、古くは、たひのこまをいへり、又めなだの一名をもいふ、多くは南海に産出す、産出甚だ多からざ

るも食料に供す、

あかめだひ(赤目鯛)

有脊動物、魚類網に屬す、めばる、に似たる小魚の名なり、目、口、共に大きく身に紅と緑との斑文あり、口は体の前端にあり、鼻孔は頭の前部の背面にありて、左右相對せり、鱗を有す、鱗は光澤ありて頗る堅硬なり、頭の後部の側部には背腹の方向に巨れる開口あり、且つ之を覆へる板ありて、其生ける時には終始之を開閉し以て水を流通せしむ、呼吸に尤も必要なるものにして、之を鯛蓋と云ふ、此の魚は外観頗る美麗なり、

あかめふ(赤目河豚)

有脊動物、魚類、因頸類なり、骨格硬く、尾は正等なり、鱗は圓滑又は櫛齒状をなし、體面に覆列す、目赤く秋季に多し、其毒、劇甚にして食ふべからず、腮孔は腮蓋を以て

之を蓋ふ、

あかぞ(赤魚)

有脊動物中の内脊動物網の中魚目に族す、頭も、口も、共に大にして、全身うすあかく、形や、鯛に似たり、大きさも亦大方同じ、尾はわれめなく細鱗なり、肉の色白くして其味淡泊なり、一名をうまぬすびと、さもいへり三四寸の小魚にして、其肉やわらかにして味美なり、

ありくひ(食蟻獸)

哺乳動物中の貧齒類なり、齒を有する事なし、稀に有する事あるも、甚だ不完全にして、珞瑯質は必ず缺如し、指趾の末端にある、鋭爪は鉤状をなす、南アメリカに最も多く産す、三四種あり、毛、皮、共に用途あり、蟻を食し、形状栗鼠に類す、

あほうどり(信天翁)

脊植動物中の鳥類に屬す、水禽類の一種なり、背は灰色、

又は褐色にして翼黒く、人を怯れず、クロアホードリ、多く小笠原島に見る、羽毛は用途多し、肉は鹽漬として食用に供す、性群居を好む、齒は裝飾の用を爲す、糞は肥料に供す、

あひる(鶯)

有脊動物、鳥類の内なる、水禽類の一種にして、生長極めて速なる家禽なり、肉は食料に供して、味最も美なり、産卵數も亦多し、體は肥大なり、脚短く趾間に蹼あり、羽毛は密生して柔軟なり、用途極めて多し、游泳すること最も巧に、飛翔は成し難し、終始水上にあり嘴は扁平、性群居を好む、

あさり(蛤仔)

軟體動物、薄頭類の一種にして、其大さ一寸餘あり、東京灣に産すること多し、殻の形は橢圓なり、殻に數種の斑文あり、常に淺海に多く産す、肉味

尤も美なり、
あじび(鮑) 軟體動物、腹脚類にして、鮮食し、煮乾し、鹽漬、粕漬、罐詰等種々あり、熨斗を製し、腹は鹽辛とし、殻は用あり、眞珠を得ること往々あり、鹹水に産す、食料に供して滋養あり、各海に産す、殻は橢圓扁形なり、其左縁に沿ふて一列の小孔あり、以て水を頭に通ず、殻の内面は光澤を帯ぶるを以て、種々の器具に嵌め、粧飾を爲す、

あらがひ(霰貝) 軟體動物、腹足綱有板類に屬す、あられのやうなるぼつ、が貝の外面に并列してあるを以て名く、諸海に産出するにあらずして、多くは海底岩石のある所に産出するものなり、
ありすひ(蟻吸) 有脊動物、攀禽類なり、きつゝきの小さきものなり、常に森林の中に棲み、専ら昆蟲類を食す、四趾あり、

二趾は前に向ひ、二趾は後に向ふ、樹幹を上下する事極めて巧なり、目の端に白き輪あり、咽より腹は玉子色にて、毛も又同じ色にて長し、頭と脊は茶色なり、名の如くに蟻を好みて喰ふ、又よく小蟲を喰ふ、其形雀の位にて全身何れも黒みを有つ、

あげはのてふ(揚羽蝶) 鱗翅類に屬す、さんせう虫の羽化せるものにして、表面の大部分、蠶蛾の如く、毛を以て蔽はれ、體の形も亦蠶蛾に等し、頭、胸、胴の三部より成る、眼は頭の頂上なる左右にあり、胸部の兩側には各三個の足あり、又前後二對の翅あり、翅は茶色、又白茶色にして、黒き筋又は斑點あり、其形すこぶる大なり、名の如くに翅は體より上に立ち、其色は實に美事なり、
あげまき(海燕) 軟體動物、薄頭類の

一種にして、諸海に産せず、多くは紀伊の海邊に産す、其形は圓く平く、外面には花形の文あり、味すこぶる美なり、大さ三寸許にして、内海の泥土中に蟄す、
あざがひ(阿座貝) 軟體動物、薄頭類の一にして、はまぐりの類をいふ、其形大なるは二三尺に至る、赤き色あり、又は、紫色を帯びたるものもあり、肉の色は白くして味すこぶる佳なり、東京近海に産す、其面滑澤にして光澤あり、其殼甚だ厚く以て碁石となす事を得、

あさかほがひ(朝顔貝) 軟體動物、薄頭類の一にして、堅硬の貝殻を具ふ、多くは紀州和歌の浦に産す、其形圓く平たくして、かたつむりに似たり、色青し、
あぢ(鮫) 青花魚族の一種なり、温帯の海中に産す、其形狀青花魚に似たり、種類最も多し、二三寸位より一尺に近きも

のあり、稀には三尺位のものもあり、るこなければも鱗に似たる刺、腮の下より尾に至るまで、全身を貫きたり、初夏より秋に至るまで捕獲せらる、其肉は食用に供すべし、鹽乾又煮乾として賞食せらる、冬期は深海にあれば春より出で、淺海に移り、六七月の頃水面に産卵す、
あかえび(赤蝦) 硬殼類中十脚目長尾類の一にして、本邦諸々の海中に産す、形圓平にして圓く、大なるは一丈に達す、ひれあれども鱗なし、目は大にして、口は、あごの下にあり、區は細長くして尖り、其本に刺ありて能く人を刺す、鮮食し又罐詰酢漬魚醬等ともすべし、瀬戸内海に多し、廣島愛知大阪岡山等を主とす、種類多し、体は濃赤褐色、肌膚粗雜なり、頭胸部の全面には刺を生じ、体側には五對の脚を具ふ、

あまづみ(海鰻) 石鱈科に屬し

て其肉は食用に供して(ヨーロッパ)にて賞味せらる。甲は鱗龜の如く鱗甲の模造に用ふ、多く産出せず、價貴し。

あざげら 有索動物中、有脊動攀木類の一種なり、總ての點に於てあかげらに同じ其項を見よ。

あかげら 攀木類の一種にして四趾を有し、二趾は前方に、他は後方に向ひ、真く木を攀づ、昆蟲を食とす。

あふむるゐ(鵝鵝類) 頭圓く上嘴釣状をなし、舌は肉質なり、羽毛美にして人語を模擬す、鳥類に屬す。

あじか(海驢) 食肉類の中齧脚類の一種なり、海棲哺乳獸にして、毛は長からずさいへども、能く水濕を凌ぐを以て、用多し、齒は彫刻材とし、胃は油袋とす、

紐伊の國(アシカ)島邊に甚だ多く産出す

るものなり、耳に小なる外殻を有し、海豹よりも大なり、吻鬚粗長なり、体毛は茶色なり、性溫柔にして、群を爲して常に海中にあれども、睡眠するが又其兒を哺乳するに當りては、岩礁上若くは海岸に上れり、脂肪は燈油を製す、肉は食料に供す、皮は濕氣を透さざるを以て火藥袋を製す。

あざらし(海豹) 食肉類中の、齧脚類中の一種にして、(あじか)科の海獸なり、

前肢は後肢より短小なり、大さ五六尺、毛は灰白色、又は黒色短かけれども極めて密生し、美なる黒褐色の豹斑あり、能く水濕を凌ぐが故に、敷皮、帽子、皮篋等とし、肉は食料に供し、臟腑は精製して羊皮紙の代りとす、効用頗る多きが爲めに我國にては捕獲を勉め居れり、多く北海道の海に産出す。

あまがひ(甘貝) 軟體動物、薄鰓類の一種なり、色白くして、其形あはびに似て、

黒斑を有せり、味ひこあじにして美味なり、總てあはびに似たるを以て國によりてはあはびをあまがひと稱ぶ、其國の方言なり。

あなざぎ(青鷺) 有索動物中、涉禽類に屬し、其形常のさぎよりも稍小さくして、

色は名の如くにして青く、頭及び頸の周圍に長き青き毛ありて、所々にうす黒きまだらあなり、一名みとさぎとも云ふ、足長くして水中を歩行するに適す、嘴は長くして水中の小魚を捕へて之を食ふ、肉の味尤も佳なりと云ふ。

あなせきれい(青鵝鴿) 鳴禽類の内、

齒齧類の一種にして、其體細瘦嘴形錐に似て、其尖少く扁平なり、みそさいいに似たる小さき鳥にして、毛色頗る美なり。

り、鵝鴿の一種にして藥品に供す、背部は黒色なり、腹部は白色なり、胸部は青黄にして、眼上に白斑あり。

あなほと(青鳩) 有索動物門中、鳥類にして、鳩鴿類に屬す、山鳩、しま鳩、

も云ふ、多くは山に棲むものなり、常の鳩よりも稍多きくして、毛色脊は總べて青く、胸は玉子色にして、腹は白く、足は赤きものなり、羽力強くして遠方にとぶ、さばと、に比して毛色頗る美麗なり、嘴は基部柔軟にして、鼻孔の周圍厚く膨脹せり、樹上に棲み、果實穀物を食とす、足は小なり。

あなはんめう(青斑猫) 昆蟲類中、双翅類の一種なり、一名まだら蟲とも云ふ、小

さき蟲の名にして、はんめうよりは稍小さく、綠色を含める黄金色のものなり、**あなかう(鮫鱈)** 有脊動物中魚類のふぐ

屬にして、其形は平たくして丸く、尾は長し、腹は頗る大なり、口は極めて大きく、口の上に二本の長きひげあり、鱗なくして背は黒く、腹は白し、多く海の底にありて、魚を呑むと云ふ、肉は至てやわらかにして、骨と共に煮て食用に供すべし、多く南海に産す、味は香ばしくして美なり、

あなだいしやう(黃領蛇)

無毒蛇類の一種にして、本邦各地に産す、體は青色にして褐色の斑紋あり、長さ一二尺より五六尺に至る、脊は青くして薄黒く、腹は白し、五穀又は蟲類を食す、人家の周圍穀倉の椽の下又は屋根等に栖む、鳥の卵又は小鳥の雛を食ふ、野れずみの子を食ふが爲に、時には田畑等にも潜むことあり、年に一度表皮を脱す之れを藥品に供す、

あふむるお(鸚鵡類)

有脊類の鳥類中攀木類に屬す、種類頗る多し、樹洞又は巖洞に營巢す、我國には産出多からず、濠洲及び亞米利加に産出すること最も多し、毛色美麗にして頭は圓く、鈎曲せる上嘴は頭骨と緩接し、爲めに可動的なり、下嘴は甚だ短小にして、舌は肥厚肉質なり、巧に人の語話を模擬するものなり、好みて果實を食す、又五穀類を食す、足は體の割合に短く攀縁に巧にして又物を握取するに適せり、其肉は食用に供するも美味ならず、世人の飼養する鸚鵡、鸚哥の類是なり價高し、

あかげらるお(啄木鳥類)

有索動物中、有脊動物、攀木類の一種なり、こげら、めをげら、ありすひ、等の種類あり森林に栖みて樹洞の中に産卵す、皆漂鳥なり、嘴は直にして堅し、鼻孔は額に密接し

て、四趾の中二趾は前に向ひ二趾は後に向ふ、鈎爪極めて銳利にして樹木に攀つるに便に、又よく尾翼を以て攀縁を助く、舌は細長くして出沒甚だ自在なり、而して其尖頭に逆鈎を具ふ、嘴にて樹幹を敲き、中に蟲あるを察して、孔を穿ち舌を以て之を鈎出し食用す、嘴の堅硬なること、羽軸の剛直なることは小鳥なれども他鳥の及ぶ所にあらず、然れどもたかの如く他鳥に害を加ふることなし

あふむがひるお(鸚鵡貝類)

軟體動物中頭足類の管足類の四腕類なり、其形通常螺旋狀にして、内腔は多くの隔壁あるを以て、數房に區分せらる、最終の六房のみ軀幹を收容す、而して其中に氣體を充實せしむるものなり、口の周圍には伸縮自在なる絲狀觸手數多あり、外套腔中二對の顎を具ふ、吸盤及び黒汁袋は之を

あゆ(鮎)

有索動物中の硬骨魚類にして、春の初めより、河と、海との間に生じて上流に遡る、八九月の頃に至れば其大なるものは一尺に近く、腹白く背は青黒くして、鱗極めて細し、味は淡泊にて最も賞美せらる、よく荒川に住游するも特に極めて瀨のつよき所を好み、はらはたは鹽につけて、世に鮎の鹽からとして賞味せらる、北海道の石狩川、武蔵の玉

關如し漏斗は縦裂し體前に介殼を生ず、食用に供して味美なり大なる螺旋狀介殼は外面に赤褐色の斑紋あり、裡面には美麗なる眞珠質を以て之を覆ふ、大西洋印度洋等に多く産す、此類は現今其數少なければも前世界に於ては甚だ多く、生活せしものにして其化石甚だ多し、本邦にも多く之れを凝り出す處ありと云ふ、

川、信濃の筑摩川、奥羽の阿武隈川に多く産出す、一年毎に子を産みて死す故に年魚の稱あり、

あさぢ(鱚) 有脊動物中硬骨類にして、小魚の族なり、多くは江湖中に生じ、夏月は多く石の穴又は水の底に栖む、形扁形にして、口大きく、鱗細し、全身に黒斑あり、背に斑ありて人を刺す、小なるものは味尤も美にして、大なるものは美ならず、

あさなきどり(朝鳴鳥) 攀木類、吐鵒族の一なり、山鳥にて、かけすほどの大きさの者なり、尾は短くて頭に青き毛冠あり、朝よくなく鳥なり、夏は來り冬は去るさいふ、小鳥にして尤も美麗なり其聲うるわし、攀足を具へ、樹木を攀縁すること頗る巧なり、嘴は扁平にして昆蟲類を嗜食す、

あさひがに(朝日蟹) 硬殻蟲、十脚類の内短尾類に屬するものにして、海産のものにして、甲は横四寸にてたて六寸ばかりなり、色極めて赤く、全身に疣多くあり、あさあしは杓子がたのものなり、又べにがに、しやうじやうがになごさもいふ、諸海に産出せず味ひ淡泊なり、

あしがひ(葦貝) 軟體動物、腹足類の一種なり、はまぐりの類にして、其色赤くきばみて、殻のおもてに葦に似たるあやのあるものなり、形小にして味淡泊なり各海に産出せず、

あじさし 有脊動物、鳥類の中、燕雀族なり、鳥の名なり、此鳥はつばめに似て稍太く、美麗の鳥なり常に海水の上を飛びかふ種類は大小の二種あるのみ、

あしだかくも(足高蜘蛛) 節足動物の蜘蛛類中長足族に屬す、足細く且つ長く

して高々に見ゆ故に此名あり、主にちさの葉に住めり、足長くもこも云ふ、小鳥は好みて飼とす、

あかさんど(赤珊瑚) 腔腸動物の珊瑚類中八射類に屬し、暖海中に棲む、小蟲にして珊瑚を造る其色赤し、

あしながたこ(足長蛸) 軟體動物の頭足類土管足類の二鰓類に屬す、足の長さ蛸なり、肉は毒ありて食へば酔ふ、故に食すべからず、尤調理法によりては食することを得、各海にも其産極めて少し、

あしのはかれひ(葦葉鰈) 有索動物の有脊動物中魚類に屬す、魚の名にして、かれひの一種なり、食用に供すへし、多くは乾物として食す、

あしはらがに(葦原蟹) 節足動物の甲殼類中軟甲類に屬し其胸甲の如くなり、はさみに毛あり足には毛なし、

あぢがも(味鳧) 有索動物の有脊動物中鳥類の部水禽類に屬す、水鳥の一種なり、其形は鳧に似て鳧より少しくちいさく小鴨より大なり、頸の色青けれども稍々かば色を帯びて羽色まことに美麗なり、口ばしと足とは黒く翹は薄れづみにして胸はかば茶色の黒斑あり、性質群飛を好み、食料に供して賞美せらる、

あめふらし あめふらしは、軟體動物中腹足類の一種にして、體の外面に殻を有せず、其形なめくじの肥れたるもの、如し頭には二對の扁平なる觸角を有し、其間に眼あり、物之に觸るれば脊より唐紅色の液を噴き出たして、其身をかくす、

あぶ(蝨) 節足動物の昆蟲類中二翅族に屬す、少蟲の名にて、草花を尋ね又牛馬等の腹足などに集りて其血をすふ、又人血も好む、盛夏の候最多く現はる、見

馴れぬ人は蜂と誤ることあれど、其飛ぶ音峰より大なり。

あぶしがひ(扇貝) 軟體動物の腹足類に屬す、あげまきとも稱する貝の名にして、ほたてがひとも云ふ、食すべく味淡白なり、

あぶみがひ(笠貝) 軟體動物に屬す、貝の一種にして其形笠に似たり、肉の色白くして食すべく、殻は極めて厚く鼠白色を帯ぶ、

あみしむるね あみしむるねは、體部を自由に伸縮し、運動をなし、食物を體内に收容するものなり、其種類によりては體面に骨格を生ず、

あまがへる(雨蛙) 有索動物の有脊動物中兩棲類の無尾類に屬す、蛙の一種にして茶褐色又は淡青色なり、形小く指端空氣をふくめる薄黒き小き吸子ありて、

能く體を支へ、木石其他のものにさび上る、雨のふる前には必ず鳴くを以て、山間にてはこの聲をきき、雨兆となす、好みて羽蟲を食ふ、

あまつめ(雨燕) 有脊動物の鳥類中燕雀類に屬す、形雀より稍小くして毛羽黒く、翼は赤くして足少さし、尾と羽とは長くして空中をさぶこと早く、雨のふる前には好みて空中をさび、蟲を捕りて食す、故にこの名あり、

あまのじやく(天邪鬼) 節足動物中昆蟲のみに屬す、又あまのじやくとも云ふ、地面に小さき穴をほりて栖む、一寸位の小蟲にして紙より燈心なさに油をつけて差入るれば、つり出すことを得、體白色なり、

あまのじやく(釣臺駝) あまのじやくに同じ解前に出づ、

あみ(蟹) 節足動物中甲殻類に屬す、又あみじやくとも云ふ、蝦の一種にして極めて少さし、食用に供すべし、

あめ(鯨) 有脊動物中の魚類に屬す、魚の名にして深山の小河に棲む、二三寸より七八寸に至る、其色青白く肉はしまりて味は頗る美なり、一名あめぐこ云ふ、

あゆなめ(鮎並) 有脊動物中魚類に屬す、小なる海魚の名なり、身細長くして鱗細く、全身茶色にして黒斑あり、頬は黄色を帯びて尾は稍赤く、其肉は白くして柔く味美なり、あいなめ、ねうを、べろ、あぶらこ等の異名あり、多くは南海に産す、

あゆもぎ(鮎擬) 有脊動物中の魚類硬骨類に屬す、魚名にして太き二三寸より一尺位に至る、山城の國桂川より多く産す、其味も形も色も能く鮎に似たれど

も、口にひげあるは異なれり、荒瀬を好みて游泳せり、

あら(阿羅) 有脊動物中魚類の硬骨類に屬す、北海に産する所の魚にして、大いなるものは三四尺に達す、たらに似て頭赤く、鱗は細かなり、黄色に墨色を帯びて且斑點あり、其肉は柔かにして香味を帯ぶれども賞味せられず、

あらひくま(洗熊) 有脊動物中哺乳類の有腕類に屬し食肉類たり、熊の一種にして其形通常の熊に似たり、深山に棲み食を得るときは何たるを問はず必ず洗いて食ふ、故にこの名あり、

ありぢやく(蟻地獄) 節足動物の蜘蛛類中擬蠍類に屬す、椽下などに棲む小蟲にして、乾きたる地にすりばち形の穴をほりて他蟲の陥るを待ち捕へ食ふ、蟻の能く捕へらる、より此名あり、頭に鋭き

缺を有す、後退するも前進せざる故、後退、あまびさりの名あり、

あまびさり(後退) 「ありぢこく」の異名なり、

あなごま(穴熊) 有脊動物哺乳類中食肉類に屬し、穴に棲む熊なり、常の熊より形小さく走るこぼやし、又あなごりとも云ふ、肉は美味なるも皮はむじなに及ばず、

あなご(穴子) 有脊類中魚類の硬骨類の喉鰓類に屬す、鰻に似て形小なり、黒がば色にして側腹に白き斑點あり、骨は少さく肉は柔なり、つけ焼き、天ぷら等として味佳なり、

あなぢ(穴蜂) 節足動物中昆虫類の膜翅類に屬す、蜂の種類にして、田畑のあぜ又は野原の土中に巢をつくる、形小にして群居す、尾に刺あり人をさす、つち

ばち又ゆるるばちをいふ、

あめんぼ(水鼈) 水鼈は節足動物中昆虫類に屬す、兩棲動物にして、其成蟲には二様の形状あり、一は翅を有し、一は翅を有せず、されば之れを採集するには各々有翅無翅の二形を發見して區別すべし、

甲は翅によりて、一池より、他池に移り一河より他河に飛行すべしと雖も、如何なる事情によりて、翅を有する成蟲の生ずるに至りしかば、充分明ならず、又時として、短期を有する成蟲の生ずることもあり、是短翅を有する幼蟲に類するものなれば、之れを判別せんことを要す、水鼈には、親近の關係ある二科あり、其生活法同じきが故に、一般に水鼈の名を附し得べし、其の科にありては脚は極めて長く、水鼈の特長たる滑歩運動に適

す、之れを水鼈と呼ぶ、他の一科に至りては後脚は短くして、前者よりは奔走に適し、體は前胸部の邊、最も廣きを以て、「かたびるあめんぼ」の名あり、

あぶらむし(名ありまき(蚜蟲)) 蚜蟲は節足動物の中、昆虫綱の中、蚜蟲類の科に屬す、林檎、梨、櫻の葉等を巻きて筒を作り、その内に住む、種類は有翅のものも、無翅のものも二種あり、性質暖處に群集するを好む、體形一見蜂に酷肖すといへども、蜂の如く尾針を有せず、蜂よりも溫柔なり、繁殖は甚だ速なるを以て、食餌に缺乏を來し、従つて、群隊の餓死を生ずる危険あり、されど有翅のものは、この危険を避けん爲めに、諸所に飛び歩いて、新殖民地を設け、新群隊を組成す、尾部に小突起ありて、是れより甘味透明の液汁を分泌す、彼の甘を尋

れる蟻が多く蚜蟲の生ずる所に居るは、或は是れによるならん、

いの部

いちづるゐ(異柱類) 辨腮類の一類にして後部は介殻を閉さず、肉柱不同なり、又水管大に退化す、あこやがひ之れなり、

いそくるゐ(異足類) 螺線狀若しくは鳥帽子狀にして、薄き殻を被るものもあり、體は透明なり、雌雄異體にして常に足を上にして海洋を游泳す、而して往々吸盤を具ふるものあり、かりなり此類なり、軟體動物中腹足類に屬す、

いひだこ(飯蛸) 蛸の一種にして、其形小さし春の初め腹の中に飯つぶの如き白き肉を生ず、故に此名あり

いすか 有脊動物中鳥類の鳴禽類にして、雌雄其の羽毛色異なりて松林に棲み松果

を食とす、嘴は上下相交叉して甚だ奇なり、

いんこ 有脊類の鳥類中鸚鵡類にして、羽毛美しく、四趾ありて二趾は前方に、他は後方に向ひ、上嘴大にして曲り、其舌は肉質なり、亞米利加及濠洲に産す、

いつけつるね(一穴類) 哺乳類なれども卵生をなすものあり、かものはしは其の一種にして南洋地方に産し、猫大の小獸なり、現時は此類は僅々二三種あるのみ、はりもぐらも亦この種類に屬す、

いぬ(犬) 食肉類中、犬族の一種にして家に飼養す、其性伶俐にて、極めて人に馴れ易く、主に忠實なり、種類甚だ多し、かりいぬ、むくいぬ、かめ、ちん、なさいふ、體に大小あり毛色も亦變種多し、獵用をなさしめ、夜を守り物を挽くの補助をなさしむる事あり、毛皮は帽子とす

べく、革は靴手袋などとなし、毛は褥に入れ種々用途多し、筋骨は膠を製し脂油は器械に注ぐに最も宜し、ある種類は好で水中に跳入す故に水禽を捕ふる時に用ゆ、五管中嗅感最も鋭く、馳走頗る輕快なり、種類により愛らしくよく人に愛育せらるゝ容貌のものあり、又其容貌勇偉にして容易に他人に馴れざるものあり、之等は主家を守るに最も適す、牧畜者の貴重する種類は、尖りたる耳及び鼻を具ふ、此種は群羊等を指揮監督するを以て、其効用犬中第一に尊重せらる、

いせじ(鰯) 鯉魚族の一種にして最も有益の海魚なり、其群集するや波濤も爲に變更す云ふ、本邦、支那、朝鮮海に多く産す、我國にては東北の海に多く産し、銚子港に産するものを第一とす、其形あぢに似て、小さく且圓し、背は青く薄黒

み細鱗ありて腹は銀色なり、脂多く其脂は燈油となす、干して、ほしかさなして肥料に用ふ、のみならず鹽漬、鹽乾、罐詰、等とし食用に用ふべし、伊豫の宇和島、丹後の金太郎鰯、越中の姬鰯等殊に名あり、銚子に亞ぐものは、三重、愛知、青森とす、鯨に追はれて海濱に群集す、此時漁獲尤も多し、

いかひ(淡菜) 軟体動物薄鰓類の一にして、其の大き三四寸より五六寸余に至る、外殻は極めて厚くして且つ堅し、形ち長卵形なり、殻色は淡紫色なり、此肉を生食する時は中毒様の不快を感じる事あり、其毒性を帶ふるものは肉甘く一種の臭氣あり、之にアルコールを注ぐ時は黄金色の液を出し、又之れに二三滴の硝酸を注ぐ時は忽ち綠色となる、之れに中毒する時は先づ胸部の筋に麻痺を起し、

次で窒息す、大海中に産する者は決して此毒なし、灣内等流動悪しき水中に産するものには此毒を爲する者往々あり、

いがひ(貽貝) 軟体動物中の貝の一種なり、鹹水の産、外部は黒くして内は赤し、口には黒き毛多くあり、煮乾さして食す、殻は酒盞舎匙等とし、粉末は薬用に供す、眞珠を含むことあり、よしほらかひ、ひめかひ、いのかひ、からすかひ等の別名あり、

いか(烏賊) 軟体動物頭歩類、の中十脚類に屬し、軀幹長卵形なり、體の兩脇に肉鰭を具へ、口の周圍に二脚を有す、其八脚は最短にして、四行に吸盤を具へ、其二脚は細長にして末端に吸盤を具ふ、二種あり、まいか、するめいか、まいか、は長崎、神奈川、山口等に、するめいかは新潟、岩手、島根等に産出尤も多し、

多くは生鮮の儘食すれども、又は乾脯として腸を製し遠隔の地に輸送す、又甲附腸を作る、所謂いかの鹽からきて珍味せらる、足八本あり、又別に鬚の如きもの二本を備ふ、口は身體と足との間にあり、目は口の上にある、其形袋に似て白色に稍鼠色を帯びたるものなり、腹中には常に墨汁の如き液を貯へ、他物來りて、害を加へんとする時は、其黒液をふきかけて、跡をくらます、祝の時に多く用ふるを舊習とす、背部の皮肉中に海黒蝸と稱する長橢圓の硬殻ありて多量の炭酸石灰より成る、體內にある黒汁は畫家の顔料として最も有益なるものなり、

いりこ(海參) なまこの腸を去り、薰製又は煮乾して製し、食用とす、清國人は好みて食するを以て、古來支那貿易貨物輸出中の三品の一なり、各海に産するを

以て各地に製すれども、北海道の産殊に有名なり、北海道につぐものは、宮城、矢賀、長崎等の産尤も名あり、

いさぎり(寵馬) 小蟲の名にて、長さ六七分なり、鬚甚だ長くして、其長さ六七寸若しくは尺餘に至るものあり、秋の項に至て厨の壁の間に出で、多く食物の殘物など食とするを常とするものなり、其色茶褐色にして黒き斑あり、がまごむし、かまご、こぼろ、ざはだかこぼろぎ等の別名あり、

いかるか(斑鳩) 鳴禽類雀科の一にして小鳥の名なり、其形鶉に似たり、全身帯白褐色にて、頭上深黒色なり、尾は茶色なり、足は赤く嘴は黄色にて、太く短かし、頭と翼とは共に黒く、飛ぶこと極めて早し、まめまわし、まめどり、まめわり等の別名あり、畑の附近又は、里

山に在りて深山に栖ます、之を籠養して穀物を與ふれば、嘴中にて轉回す、故に此の鳥の名をまめまわしとも云ふなり、

いさごむし(砂蟲) 小き蟲の名なり、形ちかひこに似て、體の長さは五六分より尺に至るものあり、常に小河の石の上に附着して、體にこまかき砂を負へり、薄蒲色にして、釣魚の際にとりて餌とす、成長するに従ひ羽化して飛ぶと云ふ、せむし、けらむし、さむし等の別名あり、

いさご(鱒) 有脊椎の中魚類の硬骨類に屬す、小き魚の名なり、冬生る、春夏の間に捕へ食ふ、體の大きさは五六分より一寸位のものなり、全身鼠色にして、其形沙魚に似たり、乾してしらすぼしに製す、食用に供して美味なり、又多く鰯に用ゆ、とるあん、しらす、じやみ等の別

名あり近江の琵琶湖邊に生ずるもの殊に美味なり、越前兵庫等にも産す、

いしがに(石蟹) 硬殻蟲中十脚類の内、別短尾類に屬するものにして、體は短く體の内側に着く眼は、普通の蝦と同じく莖上に着き、第一脚の脚に錐を具ふ、多くは谷川などに居る、身小さく、殻堅くして赤し、賤民は之を捕へて、多く秋又は冬に於て食ふといふ、一名山蟹とも云ふ、山蟹の化石したる物を石がにと名づく種類によりて産所異なり、従て生活又異れり、其有様種々にして一定せず、總て蟹の幼兒は成長したる者は大に異なりて幼者は腹部長くして蝦類に類す、其皮膚を數回更脱の後漸く本形に達するものなり、

いしかめ(石龜) 兩棲龜類にして頭骨扁潤なり、皮膚は滑濕にして、大小數多の

腺を具へ、之れより一種の粘液を分泌す、二個の體狀突起を有し脊柱と關節をなす、心臟は幼兒の時は、一心耳、一心室より成りて魚類に似たりと雖も、全成の後には、二心耳、一心室よりなる、體形の大さは、八九寸なり、身にかたき殻を持てり、普通の龜は、殻の間より頭と足を出す、足は四本なり、腹は平にして脊の中心稍高く、黒鼠色をなし、食用に供して養分あり、小さきは「ゼ」がめとも云ふ、殻にゼにの形に似たる模様あるを以てなり、

いしだみがい(石疊貝) 軟体動物に屬す、八九分なる小さき貝なり、其色青鼠にして、黒又は赤の模様あり、形ちいしだたみに似たるを以てこの名を附せり、食用に供して香味なり、

いしだい(石鯛) 有脊動物中硬骨類の硬

鱗類に屬す、鯛の一種にして、くる鯛に似たり、脊腹共に縦に細き黛色の筋多くあり、口は大きくして、鱗はあなぐるし、肉やわらかなれども、味美ならず、

いすか(交喙) 鳴禽類の内別、厚喙類の一種にして體は大に豊肥す、嘴は扁平なり、形鳥に似て小なり、此鳥は嘴の交叉せるを以て名あり、頭青くして脊は赤し、胸と腹とは、赤く紫なり、嘴はあなみを帯びて大にさがれり、世人事の齟齬するを、いすかのはしのくひ違ふなご嘴の交叉せるより稱せるなり、性質は痴頑にして、多くは松林中に棲息して、松果の鱗片を揆起して以て、松子を吸食する事極めて巧妙なり、其毛色雄は黄色にして雌は蒼赤色なり、頗る美麗の鳥なり、

いせえび(伊勢海老) 硬殼蟲十脚類節足動物の二種にして、蝦中の最大なるも

のなり、體軀は數環節より構成す、目は高く出で、口の邊に四本のひげあり、甲殻は堅くしてまばらに毛を生ず、体は濃赤褐色なり、煮又は焼く時は、赤色に變ず、しまえび又はかまくらび、なごいへり、本邦の沿海に多く産し、其肉佳味なり、肌膚粗雜なり、頭部胸部の全面には刺を生じ其前端には皆紫黛色の眼及び大小二對の觸鬚を具ふ、体の側面には五對の脚を具へ、尾端には紫褐色の五瓣あり、此肉は上饌に供す、又龍鱗は多く慶事に用ひて最も貴重せらる、

いぬぞく(犬族) 猫の族類に比し、鉤爪鈍く同じく肉食類中の一種なり、舌は平滑にして、齒は頗る尖りて其數四十二枚なり、犬族中に於て狐の瞳孔は細長し、犬狼は正圓なり、尾は長くして毛は多し、寒氣を防ぐに足る、五官中嗅感最も鋭し、

犬、狐、狸、狼、等此の種族なり、此の種族の半ば以上は亞米利加に産す、

いのししぞく(猪族) 此種族は犬齒頗る強く大きく、三角形を爲す、四肢に懸蹄を具ふ、肉は食料となりて賞味せらる、鼻頭は屈伸自在なる、圓筒形なり、皮膚には短き粗毛を生ず、體は圓く少しく細長くして太れり、尾は極めて短小なり、原野を走驅す、此種族の一二を擧ぐれば即ち、野猪、豕、びびるしぎ、等なり、此のびびるしぎ、は印度の群島中なる「モラック」島に産するものなり、是等は何れも皆古世界に産したるものなり、

いとむし(絲蟲) 蠕虫類の米蟲に屬す、細長柔軟の寄生蟲なり、此の蟲はよく蚊の血液内に居る事あり、蚊の水を飛ぶ際に於て其卵子蚊の体内を出て、水中に混入す、故に人にてても其他の小動物にて

も此水を飲用する時は卵子直に腸内に入り、始めて消化して種々の虫害を醸す事あり、有脊動物、軟體動物、昆蟲類等は皆之れが寄生の患あるものなり、

いたちぞく(鼬鼠族) 肉食類の一種にして、毛色は赤茶色にして軟鬆あり、四肢小矮にして身體細長し、唇邊に一つの腺あり、悪臭液を分泌す、聴嗅二感極めて鋭敏なり、人に馴れず性悍急なり、多くは夜間に於て食を求む、鼬鼠、黃鼬、水獺、海獺、等此種族なり、

いるかぞく(海豚族) 此の種族は、性頗る兇猛好惡にして、諸洋中に産す、群居す、體は細長く、皮膚裸出し、又皮下は脂肪にて厚き層を有す、鼻孔は結合して其形羊目状をなし頭項に開在す、齒は圓錐形にして老成には脱落する事あり、多くは軟體動物を食す、

いとじぞく(鯔魚族) 此の種族は喉嚨類の族にして、全身に大なる薄き鱗あり、然れども頭部は裸出す、又腹部には往々鋸齒縁を爲す、種類少し、數多くして皆近海に産す、食料及肥料等に使用する有益の魚類なり、脊鰭は最も大きく、腹鰭は小なり、何れも體の中央にあり、鯔魚、鯖、鱈魚等なり、

いとつぐみ(鴉) 有脊類の鳥類中水禽類に屬す、南洋諸島に多く棲む鳥の名なり、其形はびよ鳥に似て稍大きく、脊は青黒く、腹は赤黒し、尾は青黒くして、ひよどりよりも長し、いはつぐみ、いはつぐみ、などの別名なり、肉は佳味なり、多く菓物の實を食す、

いたち(鼬鼠) 食肉類鼬鼠族の一にして、全身細長短頭なり、體毛は赤褐色にして、口邊黒し、多く人家又は田畑の近

傍にすむ、稍鼠に似て大きく、尾は丸くして太だ長く、其の毛は最も長し、性人を恐る、細き間隙をもくぐりて、食を求めに走る、小獸又は小鳥を捕へて血を吸ふ、其皮は種々の用に供す、四肢矮小、唇邊に一種の腺あり悪臭液を分泌す、最も嗅聽の兩感鋭敏なり、多くは夜間出で、食を求む、鼬鼠、黃鼬、水獺、海獺等は皆この種屬に類す、

いとよりだひ(絲撚鯛) 有脊類中魚類の硬骨類に屬す、其形鯛に似て、身は少しくせまし、尾の末の上の方に青くして稍黄みを帯びたる絲撚のもの一筋あり、其長さは体の大きさとひとし、うるこの色は薄紅にて光澤あり、最も美麗なり、全身に黄と青との筋あり、肉は白くして佳味なり、いとくりうを、へにざこ、いとめうを等の別名あり、

いな(鰻) 鰻は魚類の一なり、扁頭長體なり、多脂にして美味なり、ぼらの小さきものなれども、國によりて其名稱異なり、小さきものは殊に甚たしく地方々々によりにて其名異なり、東京にては四寸位のもの云ふ、伊勢にては六寸位のもの云ひ、仙臺にては五寸位のもの云ひ、播磨にては三寸位のもの云ひ、岩城にては四寸位のもの云ひ、安房にては七寸位のもの云ふが如し、此魚の成長して七八寸以上に至るものをぼらと云ふ、味ひも又大小によりて異れり、

いなご(蝗) 節足動物中昆蟲類の直翅類に屬す、小虫の名にして種類多し、小さきときはみどりいろなるも、大きくなるとに従ひ茶褐色となる、よく稻の葉を食ふ、いりて食する人あり、七八月頃生じて秋霜のふる頃に至りて死す、つちいな

こ、はたおり、こたかいなこ等の別名あり、

いはな(岩魚) 有脊類の魚中硬骨類に屬す、其形あゆに似て、味淡泊にして頗る美なり、深山の谷川に居る、多くは六七寸のものなるも、まれには一尺五六寸位のものあり、水の瀬のつよき所をのぼる事を好む、極めて水源を求むと云ふ、

いはなし(山岩鴛鴦) 有脊動物中鳥類の水禽類に屬す、小鳥の名にて小さきをしどりなり、毛色頗る美麗なり、胸に月形ありて其長さ七八寸位なり、多く沼池等に棲む、

いへたご(家鳩) 鳥類中鳩類に屬す、鳩の一種にて大き七八寸のものなり、首は短し、胸は出で、高し、足は短し、其毛色種々あれども多くはれづみ色なり、好みて豆を食ふ、かひばと、どばと等の

別名あり、寺院家等に飼ふ、

いしもち(石首魚) 石首魚族の一にして、其体形遍長なり、長さ六寸位なり、頭裏に二個の眞白なる耳石あり、即ち此名ある所以なり、昔は之を避難品として最も貴重せり、脊は緑灰黑色にて、腹は、淡青色なり、産所によりて之をぐちとも云ふ味ひ美なり、中國以西は概して之をぐちと云ふ、

いそぎんちやく(菟蓐菜) 珊瑚類に屬し、体軀は圓筒状にして、軟かに頗る美麗なり、花形類の一種にて腔腹動物なり、多くは海中の岩石の上に生着す、其下端を外物に緊着し、上端に開口し口縁には數多の觸角を具へて食物を求むる要器とす、其中心は体腔と通するによりて、身体を縮する毎に體中の水液は觸角中に入りて之を伸張せしむ、小さき動物の觸る

時は、直に屈曲して捕へて口中に投入し、胃に送るものなり、殊に面白きは肛門なきを以て、不消化の食物を得たる時は口中より再び出す、肉は最も美味にして、外國人殊に之を好む、故に現時輸出品として貴重せらる、

うの部

うさぎぞく(兔族) 齧齒類族の一種なり、山兔、熟兔等の種類あり、性怯懦にして多く山野に生息す、近來熟兔多し、野菜菓物の實、木皮等を食ふ、産地多く殆んど全地球上に産す、前肢は短小にして五趾を具へ、後肢は長大にして四趾を有す、眼は側向して大なり、耳殻又頭より立ちて潤大なり、齒は總數二十八枚あり、門齒は上顎に四枚下顎に二枚あり、肉は食用に供す其皮は敷物又襟巻等に用ふ

毛色種々あり、雪國の兔は時候によりて毛色の變するものなり、

うさぎうま(驢) 奇蹄類中の一種にして、耳殻長大尾は細長なり、兔に似たるを以て此名あり、形馬に似て小さく、足は短し、全身鼠色なり、肩には十文字形の斑あり、脊の上二筋の黒條あり、温順にして鈍し、牛馬の如く人力を助く、又は乳汁を取る等其用頗る多し、

うまぞく(馬族) 皮膚に短毛密生す、頭上に鬣ありて、尾には長毛を生ず、馬、驢、斑驢等之に屬するものなり、門齒は兩顎各六枚にして、犬齒合して一枚、牝は概して之を欠けり、白齒は長大にして外側面に二筋の縦溝を存し、其咀嚼部面には珞瑯質より成りたる不順序の重輪紋あり、又門齒の咀嚼部面には稍楕圓形のうづあり、老長するに従ひ其縁邊自ら磨

消するを以て其うづの深淺によりて其年
齡を知る事を得べし、

うま(馬) 馬は奇蹄類馬族の一種にし
て、家畜の一なり、其種類多き如きに似
たれども皆一種の變性に過ぎず、人力を
助くる最も有益の動物なり、尾の毛と爪
とは種々の用品にして利あり、肉は食料
に供して滋養あり、韃靼邊にては野馬よ
り乳汁を取りて酒を醸す、馬乳酒さて大
に賞美せらる、世界中馬の最良なるもの
は亞刺比亞を以て第一とす、我國にては
奥羽の南部を最良とす、

うし(牛) 反芻類中の一種なり、全身肥
にて頭に二本の角あり、鼻頭潤大にして
裸出し喉下に垂肉あり、毛色は黒、赤、
黄、白、ぶち、等種々あり性質ゆるく、
變性頗る多し、三四十年を以て生期とす、
力極めて強く、家畜として荷を積み車を

ひかすに用ふ、人力を助くる事は馬と同
じ力量馬の數倍なり、肉及乳は食用とし
て滋養に富み、我國にては肉食として多
く使用す、皮、ひづめ、角等何れも各種の
用に供す、牛は殆んど全身一としてすつ
べき所なし、骨は扣鈕を製し、毛は織物
とす、角は各般の器具を作り、血は砂糖
の製造用に供す、膽は健胃劑とす、右の
如く各部効用頗る大なるものなり、

うなぎ(鰻) 鰻魚族の一種なり、形蛇に
似て腹白し、又薄黄にして薄き縞のある
ものなり、全身極めて粘滑にて、脊は赭黒
色なり、鱗は最も微細にして、皮中に浸
入す、脂多し、一尺乃至二尺位のものあ
り、皆淡水に産す、肉は眞白にて其味最
も美且つ、濃厚なり、下り鰻に限り鱗の
見ゆるあり、此の下り鰻に産卵期にて肉
肥へ從て全身に脂肪充實するを以て鱗を

押し出して外に顯わるゝものぞ知るべ
し、

うみがめ(蠟龜) 有脊動物中爬虫類の龜
鼈類に屬す、小笠原島、土佐等の海に産
する、龜類中の最も大なるものにて、脊
の甲は突起すれども、其實余り堅硬なら
ず、前肢長大後肢短小、趾間に連肉あり
皮膚を以て之を被ふ、肉味は絶美にして
滋養に富めり、

うに(海膽) 芒刺動物の海膽類に屬す、
常に淺海に棲息す、多くは海のその石
又は岩につく貝なり、體は球形にして石
灰質の殻を蒙り、丸くひらたくして外部
に黒色の刺多し、肉は鹽漬にして雲丹を
製す、香味にして絶美なり、肥前薩摩等
の産最も名あり、越前の福井盤城及北海
道の産亦名あり、刺は防護の器なり、口は
體の下面なる、中央にあり肛門は其上面

に開在す、
うにるね(海膽類) 芒刺動物にして形
球形なるこ心臓形なるさあり、外皮は
石灰質の片々より成り、而して殻の上
面中央より下面に亘れる十帯の歩間帯
あり、口は下面の中央若しくは側心に
ありて其の周圍に齒を具ふ、体面には長
短不同の棘あり、一説棘皮動物に加ふる
なり、

うみゆりるね(海百合類) 芒刺動物海
百合類にして體球形なり、石灰質小板
にて被はれ、長き柄ありて海底に固着す
然れども老成に至れば之れを失ひ、自由
に轉移す、體の周圍に五腕ありて節を有
す、
うみすずめ(海雀) 一名かばこぶぐ、す
づめふぐとも云ふ、かいつぶりに似てつ
ばさ小さく、体の末端尾に似たれども尾

はなしと稱せり、脊部は黒く腹は灰白色なり、其形むくりに似たり、口は小さくして尖れり、

うもつ(羽毛) 皮膚より發生するものなり、種類によりて構造異なり、従て三種に大別す、翼、翅、毛とす、翼中翼を構成するものを翼是と名く、全身を被包するものを翳是と云ふ、翅の構造は翳に異ならずと雖も小枝密着せず、其質軟かなり、毛は眼瞼、嘴根等に生じ質剛直にして、獸毛に同じ、羽の鳥に於ける全身細かに生ずるに似だれども、其實は裸出の所あり、其裸出の部分は他の効用をなす、腹の裸出部分は卵に体温を與ふ、又兩脇の裸出部分ば兩翼を歛收するの際之を受容する爲めの便を爲す、羽は美の爲めに發生するものあり、又温を放散せざる爲めに發生するあり極めて軽く、各種の

用に供して暖を取るに供す、

う(鶉) 有脊動物中鳥類の水禽類にし水鳥の一種にして、全身の羽毛黒く脊と肩とは少しく茶色を帯び其形鳥に似たり、嘴は長くして其先小しく下に向てまがれり、よく水を潜り游泳中の小魚を捕ふ、性質頗る貪食なり、鮎がりによく鶉を使用す、

うづら(鶉) 鳥類の鶉類中搔撥族の一種なり、形ち雞に似て丸く肥へたり、首は小さく尾は短かし、全身黄赤色にして、黒白の斑點あり、又一種斑點なきものもあれど之をふなしうづらと云ふ、晝は草中に伏住し夜に入れば群飛して田野に生息す、雄は足長くして雌は短し、鳴聲幽靜たり、

うひす(鶯) 鳴禽類の一種にして、脊は黒味を帯びたる褐色にして、腹は灰白

なり、嘴は細くして尖れり、鳴聲嬌朗にして、世人之を愛養す、肩に鼠色の三本の髭あり、又頬にも三本の髭あり、人家の近傍又は野の藪の中などに住みて美音にて初春よりさへづる小鳥なり、其美音を珍重する所より小鳥なれども價高し、

えの部

えんじやくるゐ(燕雀類) 此類は禽中の最も多數なるものにして、殻類又は昆蟲類を以て食餌となす、小形の禽類なり、嘴の形小なりと雖も、短小にして角質なり、樹上に居りて能く飛翔す、性快達にして雄は鳴轉す、巢の造營は極めて精巧なり、漂鳥にして無数の群を爲すあり、
えんこうるゐ(圓口類) 魚類なり、圓口類は体長くして鰻に似たり、骨格は多く軟骨にして、六對又は七對の袋狀腮あ

り、脊骨と頭骨との區分なくして、生殖器は腹腔中に有り雌雄共に一個にして導管を有せず、口は圓形にして環狀の唇を具へ他物に吸着するに便ならしむ、全身粘滑なり、八ツ目鰻めくら鰻の類是なり、種類僅少なりと雖も真正なる魚類に比し、体制著しく差異あるを以て、殊に一綱に設くるを當然とす、

えんちうるゐ(圓蟲類) 蠕形動物なり、此類族の体軀其切斷面圓形にして、体腔は廣潤なり、体面は極めて硬質の硝子膜より成り、多くは寄生蟲にして、雌雄異体なり、此種族を大別して更に又線蟲類、及び鉤頭類の二綱目に分類す、

えんそう(燕巢) 燕巢は、燕に似たる鳥の巢にして熱帯地方の水邊の巖窟の間にあるものなり、支那人は好みて食用とす、最も貴重なる食料品なり、

えんどう(咽頭) 咽頭の腔洞は、其一部

口腔に通し、他の一部は食道に通するものなり。食道と、氣道と、互に相交又せる處にして、其内面は粘膜にて被包す。上部は、兩鼻腔に連通す、而して其前方喉頭に連通す、後方は食道に連れり、之れに連通するに會厭軟骨と云ふて、喉頭口の前方に當り、突起せる匙状のものあり。

えら(鰓) 魚類の吸呼器にして頸部の左

右の側面にあり水を呼吸すると同時に此所にて酸化作用の行はるゝなり。

えび(蝦) 節足動物中甲殻類の軟甲類中

の胸甲類に屬す、海河共に住む一種の動物にして脊に斷節あり、全身に骨質の殻を被われり、鼻は尖りて、鬚長く八足にして能く躍る、子を持つに腹の外部にあり、薄き甲骨質様の皮にて包む、腦と腸

とは附屬す、其種類甚だ多し、食用に供す。

たの部

たほありくひ(大蟻食) 食菌類に屬す、

身体細長く全身に單毛を被り其毛は長くして、流蘇狀を爲す、口吻圓筒狀にて其先にある小さき口より細長き粘滑なる舌を出して蟻を舐食す、毛色は全体に灰褐色なり、自色を雜生す、歩行は極めて拙劣なり、其性怯懦にして物を恐る、前肢に四趾後肢に五趾を有す、後肢は全蹠を地面に接し得らるも前肢は、稍内にまがりて向へるを以て外側のみ地に觸るゝか故に歩行拙なるものなり。

たつとせい(臘肭獸) 臘肭獸は食肉類

の中鱗脚類の一なり、幼は黒色にて老は蒼褐をなし深青黒色の斑點を備へ、腹脇

共に白色なり、皮膚厚靱にて牛皮の如く面貌小さく犬に似たり、蝦夷人は此獸を呼んでをれつふといふ、

たにたこせ(虎頭魚) 虎頭魚は甲頭類

に屬せる海魚なり、全身暗黒色にして深紫色の斑點あり、脊鰭の針、硬直にして能く人を刺す、其頭部恰も踏壓せるが如く疣、膜辨及刺を生ず、肉は淡泊にて上饌に供すること能はす。

ためむし(臆蟲) 等脚類の一種なり、夏

秋の間濕地の塵中に出來るものなり、脊の中は峯の如くに高くして、横に一筋の縞あり、二三分より七八分に至る、全身薄鼠色にて少しく嗅氣あり、物に恐れておぢくして居るを以て此名あり、藥品として効あり。

たほおもり(大蝟螿) 有脊動物中兩棲類の有尾類に屬す、やもりの類にて、魚

形類と一般に水中にては鰓にて吸呼す、形やもりに似たり、水中又は濕地に棲息す腦の上より脊にかけて肉のとげの如きものあり、全身黒青の色を帯へり、其大なるものは一尺餘のものあり、口に毒を有するを以て人之れに咬まれるれば容易に癒ほらず、頸は時々其色を變する事あり、腹も赤色を帯ふる事あり、藥品となるものなり。

たしざり(鴛鴦) 一名鴛 鴛鴦は水禽類中

扁鰲類の一にして雄は頭部に長白毛を生し、翼は大きく鮮美なり、雌は蒼色にして眼後に白斑を具ふ、大ききより小なり、湖池の邊に生息し、雌雄偶居す。

たほかみ(狼) 狼は食肉類中犬族の一種

なり、性質怯懦なりといへども、剛情暴戻にして同類相食み、或は人、家畜類を害す、体色は黄灰色にて黒毛を生ず、前脚

に黒線を有し、耳の周邊黒色なり、全体或は白色又は黒色なるものあり、是れは寒帯地方に産す、

たはくろとんぼ (鐵漿蜻蛉一名黒色蜻蛉と云ふ) 昆蟲類中直翅類に屬す、休止の際は常に四翅を休側に並行せしむ其飛翔するに當りても、亦他の蜻蛉の如く迅速ならず、唯除に草に輕飛するに過ぎず、繁殖の法は、蜻蛉の種類によりて多少異なるなり、或は雌の獨り卵を生するあり、或は雌雄提繫して卵を生するあり、或は水面に近き蘆草に、卵を生するあり、或は雌雄相提繫して繁殖するものあり、

かの部

かざめ (蝸蚌) 又かさみとも云ふ、海中に棲息する蟹類の一種なり、甲の廣さは

五六寸より七八寸に至るものあり色は概れ赤色にして少しく黒色を帯び、所々に白きまたらあり左右各一本の尖を具ふ其肉味頗る美なり、

からす (慈烏) 鳴禽類の一種なり、人家の附近又は原野に棲息す、糞實種子又五穀を食ふ、全身黒色にして光澤あり、上嘴は鈎曲し、頂背紫光を放つ、又好みて獸肉類を食ふ、性猖黠貪戾なり、肉食料に加ふれとも美ならず、園畝にては作物に害を爲す、

かます (梭魚) 鱸魚族なり、其体は圓長にして頭部は細長く尖形なり、海魚の一なり、体の形状は織機具の梭に似たり、故に此の名あり、色青白なれど脊は淡赤褐色なり、腹及び胸の鱗は相別れたる事遠し、鰭の色は黄色なり、背に二つの鰭あり、肉は脂肪極めて多く味ひ美なり、各

海に産す、

かいじう (海獸) 海中に棲息する、獸類の總稱にして、其形魚類に似たるものあれども魚類とは全く異なるなり、其種類の重なるものを擧ぐれば鯨あざらし、いるか等なり詳くは其項を見よ、

かに (蟹) 硬殻中十脚類なり、水産の動物にして殻厚く、形横にひろく、殊異の能あり、兩手に鉗を備へて物に觸るれば直に之を緊束す、左右各四本の足あり、走る事極めて早し、腹部は屈曲して体の内側に着く、眼は蝦と同じく頸上に着き、産所は同一ならず、淺瀬の中に棲息するもあり、又は海濱の砂石中に棲息するもあり、又は山地の陸に居るもあり、又山間谷河の邊に住むもあり、山間にては清水の出づる所に多く棲息す、從て生活の有様も一定せず、其皮膚は數回更脱して

後ち漸く本形に達するものなり、

か (蚊) 昆蟲類の一なり、夏の始めに出で秋に至りて死す、夜間群飛して、人畜を螫す、其体は細長の翅脚及び觸鬚を有す、群飛する時にはよく、細き音を出して鳴く、濕地に多く出づ、其幼を孑孓と名け、常に水中に浮沈するものなり、

かみきりむし 昆蟲類の一種にして、蝶蜂の如く、二對の翅と三對の脚を具ふ長さ一寸幅三四分あり、背は固く色黒くして白點ある甲を有す、頸に太き感觸官の鬚二本を出しよく感動せり、齒は鋭くして、木材又は髪をのみきる故に此の名あり、

かも (鳧) 水禽類扁葉簇の一にして、嘴遍大黃綠色なり、雄は麗はしき綠色に稍黒色を帯びたる頸にて、胸は濃紫に黒點

あり、腹は灰色に同しく黒く細點を持ち背は鼠色にして同しく黒點交じれり、脚は橙赤色にて、蹠は稍黒色を帯ぶ、雌は全身帯赤灰褐色にして、黒斑を交へ、常に群を爲して池沼田澤等に生息す、食料に供して滋養あり、種類極めて多し、鷺はかもの變生なり、

かき(牡蠣) 鳴禽類の内にて齒齶類の一種なり、各地に多く棲息せず、我國にては肥前に多く産出す、此鳥は其形狀慈鳥に似て飛鳴惡食す、尾は極めて長く且黑白の雜生するあり、背部は青色にして腹部は白く爪は黒し、聲は低くして其音からすに似たり、一名乾鵲とも云ふ、

かいめんどうづつ(海綿動物) 單體又は群體を成して海中に産す、よく外物に附着す、其形狀外觀は極めて不正なる圓塊の狀の如きあり、又は壺狀を爲すものあり、盃形狀を爲すものあり、又立樹狀をなすものあり、其區別同一ならず、各形狀は實に千差萬別種々あるものなり、每體に於て上部に一の大孔を開きて體中の單一又は分岐する所の主腔と疎通す、體中に一種の骨格を具へ、剛硬なれども體制甚だ脆弱なり、大凡二三細胞層より成立し、其外層は扁平細胞にて體軀の全面を被ふ、又體內諸腔の内面を被へる處の内層は皮膜にて纖毛室に在りては其附着する所の各細胞皆襟狀物を有し、而して之を振動する爲に鞭毛を生ず、之れに因りて水は常に體面の小さき穴より流れ入り、且上部の大孔より流出す、此れと共に流れ入る所の小なる有機物を採りて自體の營養を爲すものなり、骨格の有無並に其性質により大凡五目に區分す

る事を得るものなり、

かたつむり(蝸牛) 軟體動物腹歩類の一種なり、殻は淡黄色にして、少しく褐色を帯び縦に深褐色の線二三條あり、外人好みて之を飼養す、其殻は螺に似たり、外人は此肉を好みて食す、我國にても往々山村の人は酢に浸して山なまこなど、稱して食する事あり、藥用とす、人家の壁又は柱などに生息す、其他樹木又は濕氣を帯ぶる大石などに生息す、

かひこ(蠶) 連環動物類の一種なり、種紙の卵を孵化し、桑葉にて養ひ成長せしむ、其間變體する爲に、四回程眠るやうになる事あり、之れを四眠と云ふ、孵化せしよりあがる迄二十五日位より四十日位迄とす、之れは寒暖と桑の與へ方の多少によりて長短あり、全身白し、足は左右各七本つゝあり、四眠起きの後ち大凡そ一

かき(牡蠣) 軟體動物薄鰓類の一なり、其殻は粉末をなし肥料に使用す、海中の

週間程桑葉を食する時は全身稍透明となりて、繭を作る期に至る、之を移して巢に入る、時は繭を作り、身は中に入りてさなぎとなり、孵化して蛾となる、春夏秋の飼養法ありて体中より絹糸を出して繭となし、國益をはかる大切の蟲なり、

かひこのてう(蠶蛾) 連環動物鱗翅類の一なり、其體軀は大きくして全身に白毛を密生し、前後翅共に白色なり、國を利する最も有益のものなり、卵子は濃灰色にして、少しく紫色を帯び、卵子孵化すれば一分程の幼蟲を生ず、蠶は即ち是なり、

かぶとがに(鱧魚) 硬殻蟲の一種なり、多く海濱の淺き處の砂中に棲息す、長さ一尺以上二尺五寸余にも至るものあり、背部には前後の兩甲あり、又裏の中央には口ありて六對の脚を以て之を圍み、其後方に稍板狀に似たる鰓ありて呼吸の用

をなす、又後甲の末端は刺針ある劍の如きものあり、此肉は食用となす事能はず、甲は船中其他に於て水を吸む器に代用す、

かはねづみ(水鼠) 鼯鼠族の一にして水中を潜行して小魚を捕へて之を食ふ、足には游泳毛を具へ、尾の下側に長き毛を生ず、常に小河の近傍又は、谿崗の岩石等の間に穴居す、水中の魚を捕ふる事極めて巧みなるを以て、養魚家に頗る害あり、皮は種々の用に供す、

かはをぞ(水獺) 食肉類鼬鼠族の一種なり、身體及び頭は扁く、趾間に蹼ありて能く水を潜る、全身毛は細く柔かなり、取りて以て衣服などに用ふ、體の大きき三尺余、毛色背部は暗褐色にて、腹部は稍淡薄なり、口喉白し、常に魚類を嗜食す、肉は食用に供して頗る珍重せらる、

又薬用となして効用あり、價貴し、

かいりぞく(海狸族) 齧齒類中の一族なり、此族は齧齒類中の最も奇なるものなり、大きき三尺にも至るものあり、木葉樹皮等を食とし、常に海中に棲息す、四肢に五趾を具ふ、後肢の趾間に蹼あり、尾は扁平圓形にして鱗あり、牝牡共に香囊を有す、海狸に二種あり、一は歐洲及亞細亞の北部に産す、一は亞米利加に産す、毛皮精良なる革を製する事を得ると云ふ、香囊は醫藥に供せり、

かいぎつ(海牛) 游泳類に似たりと雖も、之を精細觀察する時は大に區別あり、其性質水中に棲息する等は、よく游泳類に似たれども、鼻喙は豊肥し、上部に鼻孔を開き、唇腫厚反上して髯を生じ、前肢は鰭形をなし、尾は平に開き、後肢は之なし、皮膚には短毛粗生す、全

く游泳類と異なれり、多く 熱帯地方の河口に群生し海草を食とす、

かんがるう(更格盧) 有袋類に屬する動物なり、其種族は數種の多きに至る、山野に群生し、又樹上に生を營む、其中の大なるものは大更格盧にして、全身七八尺のものあり、前肢は細く小く後肢頗る長し、尾は甚大強直にして、能く全體の支柱となる、頭は小にして耳殻最も大なり、胃は重複し多くは根物を常食とす、幼兒は母の腹部にある所の皮囊中に養育せらる、成長したる後は時々袋外に出で、は食を求むと雖も、又時には皮囊に入る常に後肢と尾とを以て起坐を自在にす、一躍に四五間達するに至る、肉は頗る滋養に富む、

かつな(鯉魚) 青花族の一種なり、此魚は初夏の候より、東南海に群集す、其肉

は乾して脯子となす、土佐の國より産出するもの極めて有名なり、體の形ち青花魚に似たれども遙に大なり、背部は青黒色にして紺色の線斑四節あり、腹部は純白にして銀光あり、其鮮肉は刺身となして食すれば頗る美味なり、八九月の頃多く捕ふる、乾して鱈魚節を製す、奥州盤城近海のもの名あり、

かんせうほう (間生法) 其外形より内性に至る迄、能く類似したる異種の動物を、互に相交接して特種の動物を生ずる生殖法なり、總て動物の雜種は此生殖法によりて得たるものなり、例へば牡馬と牡驢と交接せしめて驢驘を生ずるが如し、牡馬と牡驢と交接せしめて騾を生じ又狼と犬、狐と犬、或は野兎と熟兎と互に相交接せしめて間生動物を生ず、此結果頗る異様の殖法を得るものなり、

かものほし (鴨嘴獸)

一穴類に屬する岸物なり、常に河岸に穴居して蟲類を食料とす、其最も多く産出する地は、濠洲東北の諸川なり、哺乳動物中にては最も下等に位するものなり、四肢共に短く各肢の五趾の間に蹼あり、游泳に便にす、口喙は扁潤鴨嘴に似て鼻孔は其前端に在り、全身に細き短き毛を生ず、

かきぎよるい (鰐魚類)

爬蟲類中の最も大なるものなり、大小種々あれども、其大なるもの二丈餘に達す云ふ、背部の上に甲あり、毎甲皆方形にて、中央著く突起せり、尾は側面して其上縁の隆起せること櫛の如し、前肢は五趾共皆分れて、後肢は四肢を具へて連結ある蹼あり、心臟の血液は肺動脈と大動脈との根本に於て双方相連結するを以て、體内に循環するものは、純粹にあらざるなり、齒は

圓錐形なり、喉中に二個の腺あり、劇烈なる香液を分泌す、肛門も縦裂して其兒は卵生なり、大河に生息して魚類及鳥類を食ふ、性質極めて凶暴あり、東印度、北亞米利加等の産最も大なり、公衆の奇觀に供して收利を得るものあり、

かもしか (羚羊) 偶蹄類の一種なり、其體形は稍羊に似て青色の動物なり、毛色は皆黒褐色なり、圓鏡なる角は多節を有し頗る光澤を放つ、此角は藥用に供して最も熱冷ましにして効あり、

かれいぞく (比目魚族) 軟鱗類の一族なり、體形は扁平せる赤味を含みたる稍白色のものなり、肉は白くして淡薄なり、胸と腹の兩鱗は短小なり、脊と臀との二鱗は延長にして体縁を爲すものなり、此種族は鰓を有せざるを以て、直立する事能はず、一側に平臥す、上面は黯色を帯

び、下面は白色なり、兩眼は側面に偏在す、體の大きは一尺より二尺に至る、一方の面は白くして鱗なし、一方の面は黒し、種類甚だ多し、

かいせうるい (海鞘類)

體は囊狀にして、口と排泄門は大概接近して外物に固着す、自在に游泳し能ふ處の特種の者なきにあらず、此種類に單立及び群體の二あり、又之を區分して更に四目となす、腮嚢は格子狀に開裂して、之を通る水は第一其嚢を周繞せる處の周腮腔に出づ、是は全く排泄腔なるを以てなり、

かいむ (海馬)

海獸にして北海に棲み、常に群集する性質あり、此の獸は極めて大にして、二丈餘に至るものあり、四肢はあざらしに似て、上あごに二本の牙あり、上方より下方に向ふ、長くして強し、**かいけいるい (介形類)** 雙殼にて全身

を蔽ふ所の小硬殻類なり、鹹水淡水に産す、楕圓にして側扁なり、其外形は雙殻貝に似たり、一個の眼を有し、又七對の肢を具ふ、觸角二對と上腮一對と又下腮二對及び胸脚二對あり、

かつかうぶり(郭公鳥) 攀木類の一にして其嘴扁平にして上嘴鈎曲す、尾長く脚に羽毛多し、好て昆蟲を食す、他禽の巢中に産卵し、他禽をして之を抱せしむる特性ありて、恰も杜鵑の如し、

かなりや 鳴禽類の一にして、全身黄色なり、本産はかなりや鳥なれども、現今は各地にて籠養す、

かうりんるゐ(硬鱗類) 皮膚は硬き鱗にて蔽はれ、琢磨質なるを以て又光澤あり、尾は不正なり、腮は櫛状にして側面に各一孔を有し水を通す、魚類に屬す、
かうこつるゐ(硬骨類) 魚類に屬し、

骨は硬くして鱗は覆風狀に並列極めて薄し、通常食用の魚は大概此種なり、尾は平等をなす、此の類は卵を産すること極めて多し、然れども實際成長するは僅かにして其何万分の一に過ぎず、

かげろう(蜉蝣) 直翅類にして其形とんぼに類似し、其尾に二本或は三本の長き毛を有し、前翅は後翅より大なり、幼蟲は腹側に腮を有し、二年以上泥中に棲息す、
かひつむり 游禽類の一種にして足は極めて後端にあり、翼も尾も甚だ小なり、趾間に蹼あり、游泳に巧なり、

がらんでう 游禽類にして水中に游泳し、體は扁平にして嘴は非常に長く大きく、趾間に蹼ありて足は短し、嘴の下に大きな囊ありて水中にて魚を捕ふれば此の囊に入り、水は流出し去る、尾は短し、
かいめんるゐ(海綿類) 腔腸動物の一

類にして、體は筒筒形をなし、壁は非常に厚くして、一方に大なる口を具へ、此口は海水の出入するものにして、細かき藻草は壁にある管を通じて體腔に浸入し口よ 出づるなり、壁には骨格ありて硬石灰質のものと硅質のものとあり、通吾人が用ふる海綿は此の骨格を除去したるものにして、硬質を有せず極めて柔かなり、

かめるゐ(龜類) 背腹兩面に角質の甲を被り、扁平の胴を作す、かめの甲即是なり、上下顎に齒なく、角質の鞘を以て蔽はれ、魚介を食とす、而して其甲の背部は常に脊椎と膠着す、四肢は扁平又は圓形にして、游泳の具なり、好みて水中に棲息す、爬蟲類に屬す、
かいぎつるゐ(海牛類) この種は實に二三種に過ぎず、體と頸部とは判然たる

區別なく、鼻孔は頭の前部に位し、外耳なく、目は小に前肢は短くして鰭状をなし、後肢はなく、口吻に厚き唇ありて、體面には毛を生せず、尾は肥大して魚の鰭の如くなり、儒艮は俗にさんいをと稱し、我琉球近海及印度洋に産し、海産なり、有胎盤哺乳類に屬し、脊椎動物なり、

かまきり(鎌切、螳螂) 頭小さく全身細長く六本の足あり、前の二足恰も鎌に似たるを以てこの名あり、後の二足は長大なり、翅を備へて能く飛ぶ、木の葉の下に居て小蟲を食ふ、色は茶色なるあり、緑色なるあり、俗にかまきつちよーなどいふ、

かり(雁) 水禽なり、秋寒國より來り春去る、首長くして腹に茶と黒との班點あり、尾と翅とは黒く、脚と嘴とは茶褐色

なり、食用として最佳なり、かりがれ、又はがんとも云ふ、

かめ(龜) 爬行動物の一にして淡水に住む、身扁平にして楕圓形なり、甲の模様六角形にして大抵十三あり、甲の下より四足と頭尾を出す、物に觸れて恐るゝときは甲の下に縮み容る、食用として可なり、其種類甚多し、

かむし(架蟲) 架蟲は節足動物中昆蟲類の一なり、多くは静水中に住み、水底に生ずる植物の間を匍匐す、此の昆蟲が、他の普通の水住甲蟲と異なる者は、水面を休息するに當り、頭部を垂れ、尾端を以て水面に懸る習慣なり、構造の最も區別し易き者は、觸角の形状にあり、即ちその形状は棍棒状にして、複眼の直に前方より生し、一般に眼と前胸部との下に隠没す、觸鬚を以て觸角と

誤認せざるやう注意せんことを要す、

かはげら一名いしとんぼ(石蜻蛉)

石蜻蛉は、節足動物の一綱昆蟲類にして池沼河海の周邊を飛翔す、本邦に産するものは普通の種にして、此の蟲は休止せるときは、背上に翅を疊み置けり、其體軀は扁平にして而かも整長なり、左右兩側は殆んど平行せり、胸部は大形をなし、觸角は長くして、尖り多節なり、多くの種には腹部の末端に二本の細き附屬具を具ふ、此蟲に「いしとんぼ」の名あるは、幼蟲の時期を池沼及び河海の石下にて、經過すればなり、

かどんぼ(蚊蜻蛉) 蚊蜻蛉は節足動物中昆蟲類の一にして、幼蟲は水中に生活す、

他の昆蟲の異なる點は翅を生じて飛ぶことを得る後、更に一回脱落すること、是なり、水中より出てたるまゝにては充分發

達するものにあらず、亞成蟲の時期にして、この時期は短くして數分時間に過ぎざることもあり、或は二十四時間以上に及ぶものあり、池畔に近き植物、若くは他の物體に、休息する所の蚊蜻蛉を注視して、亞成蟲の脱落するを目撃するを得、若し之れを首尾よく採集するときは、成蟲と亞成蟲とをともに採集することを得、頗る快味を覺ゆるものなり、

かめれ(避役) 蜥蜴類にして細鱗を以て蔽はれ、四肢を有し樹上に棲息して趾を以て水を傳はり、舌長し、此もの外界の有様により其皮膚の色を變ずる云ふ、其大二尺に至る、運動は極めて遲緩なり、

かつたのえぼし くらげの一種にして、海中に棲息す、通常にらご稱するもの同一種なり、其全體は透明なれども紫色紅色を帯びて甚だ美麗なり、此の類には、は

げしき毒あり、

からすがひ 雙貝の一種にして、體の左右の側に一枚づゝの貝殻を具ふ、其味ひ尤も美にして鳥肉に似たり故に鳥貝の名あり我國小笠原島近海に産するもの味ひ殊に美なるを以て古來大に世に賞用せらる

かなかしら(金頭) 頭大にして鱗細く身は黒色を帯びたる銅色にして、定鱗は尾に近づくに従ひ赤く、腹は淡白色にして鱗長し、肉は冬より春に至り味美なり、

かいろうごうけつ(偕老同穴) 海綿類の一種にして、體形細長くして、恰も籠の如く、其外圍は硅質の縱條横條相錯交す、其中に小蝦を寓するにより此名あり、

きの部

きんけい(錦鶏) 雉子に似て頭部に鶏冠あり、身、翅、尾、ともに綠紅茶黒等の色混

じて甚美麗なり、腹は緋色にて尾は長し、にしきどり、あかきじなごともいふ、

きんじり 鳴禽類の一種にして細紫類に屬す嘴硬直なり、頭背淡黄にして淡紫の斑あり、腹胸白く恰も鵝の如し、

きうい 走禽類の一種なり、濠洲に産す、全身毛髮の如き毛羽あり、無翼無尾飛翔するこゝ能はずと雖も、勁脚健なるを以て老ること早く、細長の嘴は土壤を搔撥するに適す、

きのう(氣囊) 鳥類等の胸腔、腹腔等に存在する一程の膜囊なり、肺臓を経過したる空氣は此膜囊に入り、肺を輕巧にし且血液氣化の作用を補ふ、

きりん(麒麟) 哺乳類中最高の動物なり反芻類に屬す、其頭長く全身黄白色にして黒褐色の方斑を滿布し、牝牡共に兩角を有し、毛皮を以て之を包み、其頂上に

粗毛を生す、舌は細長にして屈伸自在なり、枝葉を捲折するに適す、南部亞非利加に産す、其性質温柔怯懦なり、

きんこ(光參) 沙蟻類の一種にして我邦奥洲金華山沼海函館灣に多く産す、全身黄色にて外面に凸起物あり、五條に均列す、毎條數條の凸起より成る、其形狀沙蟻に似て皮は軟柔なり、肉は美味にして之を清國に輸出す、

きんぎよ(金魚) 金魚は鮪の變種なり、盆池に養て夏日の愛玩とす、其色、純紅、白紅、白斑、黒斑等あり、尾は四岐せるものを上とし、三岐は中とし、鮪尾なるは最下等とす、

きす(鱧) 淡水に産するものと、鹹水に産するものとあり、前者は色青く、かはきす、又はあほきすともいふ、後者は色白くしらす又はうみきすともいふ、何

れも嘴尖りて尾細く、淡水に産するものは斑點あり、青鱧も白鱧も共に味美なり、

きつね(狐) 食肉類中犬族の一種なり、體毛腹部は白く且背は黒く、尾は長大なり、其性質多疑狡猾にして家禽類を害す、北極地方に棲息するものは白色又は黒色なるあり、之を白狐及び黒狐といふ、

きこ(雉) 雉は鶉類の一種なり、雄は翠黑色にして美麗なりと雖も、雌は黄色黒の斑點ありて尾短く文彩なし、其肉は冬季最佳なり、

きりぎりす(蝻斯) 昆蟲類の一にして、直翅類に屬す、形ち蝻に似たり、其鳴聲面白きを以て兒童之を籠養す、

きやうかうるお(胸甲類) 頭部と胸部と緊着して一の甲をなし、腹部は八個の環節より成り、其環節毎に一雙宛の肢を具備し、歩脚は五對なり、全體の環節一

定し眼は複眼にして柄の末端にあり、甲殻類の一種なり、

きうちうるお(吸蟲類) 他の動物の内臓又は體面に寄生生活を營む者にて單立たる體は、舌狀又は樹葉狀なり、皆渦蟲類より生じたるものなり、口は盃狀肉質の壁を具し、他物によく吸着す、腹面には一つの吸盤あり、體面は平滑なり、體面に寄生する者は眼あり、體外に寄生する者は之なし、雌雄同體なり、

きよるお(魚類) 脊椎動物中常に水中に生死をなすものは、獨り魚類あるのみ、されば其形態構造游泳に適する構造ならざる可からず、其の形扁平なるか、若しくは紡錘形をなし、四肢は比較的小にして概ね扁平なり、之れを鰭と云ふ、游泳器なり、鰭には脊、腹、胸、臀、及尾鰭の五種あり、此類は全身鱗を以て被はれ

覆瓦狀に并列さる、鱗は扁平にして外面に滑らかなる物質あり是、敵に捉へらるゝの保護の爲なり、消化器は大なる口に初まり口腔に齒ありて、其の形狀は食物により種々あれども、硬きものを食するものは大にして臼の如し、口を入れれば直に胃にして腸の部には膽汁管開け甚だ短し、而して胃と腸との間に無数の盲管附屬す、呼吸器は口腔の兩側面にある裂孔により呼吸作用をなす、先づ水を口中に入れ、後壓すれば水は其裂孔を通して再び外に出づるなり、其際腮の膜は水と相接するなり、陸上動物は鼻より呼吸を營むものなれど、魚類の鼻は其鼻孔内に開通することなきを以て、呼吸に何等の關係なし、心臟は一個の心室と一個の心耳とより成りて筒單なるものなり、而して心臟より輸送さる血液は壁頗ぶる厚き

一個の管により、其の彈力性の爲めに平流さなされ毫も脈搏を打つことなし、蓋し非常なる脈搏を打ちて血液輸送さるゝ時は、腮の薄き膜裂かるゝ、恐あればなり、魚類に最も特徴なるは脊骨の直下に鰓と稱するものありて氣體を含み、體の重を變換し得ることなり、かくして水底に沈むことも水面に浮ぶことも得るなり、蓋し腹壁筋の收縮伸長に由りて鰓は膨脹收縮さるゝものなり、魚の游泳するや鰭を用ゆれども速かに游がんとする時は脊骨部の筋肉の伸縮により體を左右に屈曲して、水を後方に蹴り前進す、又魚類の目は外面平面にして凸形をなさず、之れ眼球内の液體は光線の屈曲水と其度相等しきものなれば、よし凸形をなすとも其効果尠なければなり、又耳も體內に在りて體外に通ずる孔なし、從て外耳もなし、

之れ水中の響は水の動搖により直に體に感すればなり、生殖線は體の左右に開き一個づゝあり、子と稱するものは所謂卵巢にして、しらくと稱するものは畢丸なり、之れを分ち硬骨類、軟骨類、肺魚類、硬鱗類、圓口類の五とす、脊椎動物に屬す、

きくめん(器官) 複細胞動物の諸器官は之を皮膚、運動器、神経系、消化器、循環系、呼吸器、泌尿器、生殖器の八に大別するものなり、

きんそしき(筋組織) 收縮運動を専らにする細胞を云ふ、是は原形質の特別な發達によりたるものなり、筋細胞の聚合したるものを筋肉には筋組織と云ふ、**きつしるゐ(齧齒類)** 此種は大概小獸にして、上下顎骨に各二個づゝの門齒ありて、下顎は上下前後に運動し、顎骨は

左右の二枚より成り、齒は鑿形をなし、前面のみ珞瑯質を蔽被し、後面は單に齒質より成るを以て其磨滅の度非相違ありて年を経るに従ひ其後面のみ磨滅す、而して其の齒は食物の硬きものを食するを以て死に至る迄絶えず生長す、又臼齒は其咀嚼面に數條の珞瑯質あるのみ、此の類は多く肉食なり、而して冬期は永眠をなすものあり、又食物を貯へ其備をなすものなり、其性怯懦にして巢を構ふるに巧なり、りす、ねすみ、うさぎ等は此類に屬す、脊椎動物の有胎盤哺乳類なり、**きじ(鳥)** 鳩類にして、翼は長大なり、よく飛翔し常に雌雄雙棲す、よく人に馴れ易し、尾は恰も扇子の如し、**きつつき(啄木鳥)** 有脊動物中鳥類の鑿木類にして嘴は銳利なり、羽毛は美麗にて極めて剛し、四趾ありて其二趾は前

方へ他の二趾は後方に向ひ、樹幹を攀づること極めて巧にして、深森に棲息し、好んで昆蟲類を食さす、

ぎこうるね(擬猴類) 四肢皆手をなし、能く握取の用をなす、後肢の第二指は釣

状の爪を有し、面部は毛を以て覆はれ、此は大に熱帯に産す、哺乳動物中に屬す

きていゐるゐ(奇蹄類) 四肢の中海のみ非常に發達し、他は僅に其の根跡をのこすに過ぎず、恰も只一指のみの觀なり、

此類は皆草食にして、門齒、臼齒は大に發育すと雖も大齒殆んどなし、うまは、この種に屬す、脊椎動物にして有胎盤哺乳類なり、

くの部

くま(熊) 熊は食肉動物蹠行類の一種なり我邦にては北海道に多く産す其の全

身は黒色にして鋭利なる鈎爪を有し、喉下に白色の毛輪あり、所謂月の輪是なり肉及脂肪は食料となし、其膽は熊膽と稱し、藥品に供す、毛皮は褥等となし貴重す、其の種類甚多く、白色なるものあり、之を白熊といふ、

くまたか(熊鷹) 鷹の一種にして其性質極めて烈しく、猿羊狸兔などを攫む、形全く鷹と同じと雖も、大さは通常の鷹よりも三倍大なり、唯耳の上に角の如き毛ありて少しく鼻にも似たり、

くもるゐ(蜘蛛類) 頭部、胸部、腹部は分明に區別され得るものありと雖も、大概頭と胸とは密接して全然見分け難きもの多し、肢は頭胸にのみ在りて六對を有す、其の第一肢の末端は鈎形をなして毒腺を有するものもあり、複眼を有せず、單眼にして、一雙乃至六雙を有す、

氣管により呼吸し腹部に左右一對あり、空氣に觸るゝなり、之れ肺と名くべきものなり、消化器は胃に五對の盲囊ありて排泄器はまるびき氏管より成り腸の後方に開く、此者に特有なるは絲腺なり、其の内臓中にあるやこれ單に粘液なれど、空氣に觸るれば直に凝固す、腹部の末端の四個又は六個の突起したる所より細孔を通して此絲出づ、而して櫛状の後脚末端にある爪を以て一條の絲とし、巧に精緻なる巢を構ふ、凡て卵生にして變體することなし、昆蟲類の血液を吸ひ生活す、節足動物中の一種なり、

くじいちう(蛔蟲) 長さ七八寸の者にして蚯蚓状の者なり、小兒の腸内に生ず、卵は大便秘と共に排出す、飲料水より再び人の腸中に入る時は蛔蟲となる、
くじんちうるゐ(環蟲類) 體軀は數多

の環筋相連りて之を成す、延長にして扁平又は圓筒の形狀を爲す、血管系は發達す、無色又は赤色なる血液なり、泌尿器なり、其形内は漏斗状を成す、體腔中に開けり、外部は小孔を以て外に通す、環節毎に一對あり、環節器と稱す、排泄作用を爲すのみならず、生殖物輸管の働きを爲す事あり、口は前端に位し、神經球は食道の直前にあり、又環節器毎に神經球あり、頭端に眼を有す、蛭類及び毛足類の二綱目とす、

くじちうるゐ(渴蟲類) 體形は細長若しくは橢圓なり、濕地に棲息する者あれども、多くは淡水鹹水に産す、口中に肉質管状の吻と稱する一つの器械あり、伸出して食物を喰ふ、雌雄同體なるを常とすれども、亦時によりては分體して蕃殖するものあり、

くしくらげ(櫛水母類)

球状にして、粘膠質透明なり、體面に櫛齒状の纖毛板を八列を具へ、能く水中に移動するは其振動によりてなり、體に二極を具へ其一極に口を開き、他方の對極には胞状感覺器あり、粘質細胞ありて食料を採取するの便に供す、海面に無數現出する事あり、夜間燐光を大に放つ者あり、腔腸動物の一種なり、

くもひとでるお(陽遂足類)

體圓盤状にして五個の細長き腕を有し、體の前面鱗状の石灰質を以て被はれ、歩帶の溝状は腕の下面にあり、又腕の根底には開口ありて呼吸、生殖の作用を司る、軟皮動物の一種なり、

くつそくるお(掘足類)

管状の單數を有し、口中上部に顎板ありて、下部には小なる銳齒を有す、又眼を有せず、足は

極めて長く、海底を匍匐す、雌雄異體なり、而して口の周圍に若干の觸手ありて食物を捕捉して之を食ふ、軟體動物にして一類をなすものなり、

くさかめ

半翅類にして口は吻なくして管状なり、前翅は半ば硬し、

くうていお(偶蹄類)

四肢實に二指より成る、而して此者には胃囊を數囊有するものあり、之れを反芻類とす、就て其の部を見る可し、脊椎動物にして有胎盤哺乳類なり、

くぢらるお(鯨類)

形體魚形にして諸方の海洋に産し、體面に毫も毛を生ぜず、判然たる頸部なく、前肢は鱗状をなし、後肢はなく、目は小にして鼻孔は頭上にありて尾は扁平なり、皮下には厚き脂肪の層ありて體温の發散を防ぐ、之れ脂肪は熱の不導體なるを以てなり、此の者水

棲にして陸上に来ることなし、昔時は其形魚類に似たるを以て魚の一種族ならんと思ひ誤りなれども、其内部の構造全く獸類に異なるなきを以て、今日にありては獸類とせり、この類にはいるか、うにこうる、くじら等あり、其のくじらの如きは脊隨動物中最大のものにして長さ十數間に達するものあり、有胎盤類にして脊椎動物なり、

くるまえび(車蝦)

節足動物の一綱甲殼類に屬し、海に産す、其形狀通常の蝦と異なることなく、大なるものも七八寸を越ゆるものなし、殻は藍色にして節ごとに美しき紅色の斑あり、秋冬の頃最佳味にして珍重せらる、全身屈曲して車輪の如くなるを以てこの名あり、

くださんご(管珊瑚)

管珊瑚類の一種なり、石灰質を有する數多の管相列ひて

聚生體をなし、横板ありて其上下を接続す、水螅は通常淡紅色なれども管は深紅色なり、産地は印度洋なり、

くもひとで(陽遂足)

陽遂足は棘皮動物の一種にして海中に産す、常に磯邊の石上を匍行し或は石下に棲息す、其體は放線形にして中央にある石灰質の扁平圓盤より圓柱形の長臂五個を射出す、此の臂は細長くして刺を帯ひ容易に屈曲して移動す、此臂頗る脆弱にして誤りて物に觸るゝときは損失すと雖も、新生するの特性あり、又他種のでつるもづると稱するものあり、其形狀陽遂足に酷肖す、混すべからず、

くろだひ(黒鯛)

有脊動物の一綱魚類に屬し海中に産す、全身淡黑色を帯ひ、大なるは一尺餘あり、體肥へ圓くして眞鯛に似たり、食用として佳味なり、

くろつとみ(鶴鴉) 鳴禽類にして齒齧類の一種なり、常に林間に捷息して昆蟲を食ふ、其肉味佳なり、頭脊は純黒胸白色なり、しるばら、あかばう、しまあかはら等の種類あり、

くさかげろう(咬蜻蛉) 節足動物の中昆蟲綱の中、脈翅目の一、咬蜻蛉科に屬す、發育は實に三期に成長するものと異ならず、形狀は紡錘狀をなす、咬蜻蛉の卵は、葉面又は葉上にありて、細線狀の上に附着せり、俗に優曇華と唱へて吉凶を卜するもの是なり、

くぢら(鯨) 形狀魚に似たる海獸にして動物中最大なるものなり、長サ五六間乃至十四五間に至る、鱗も毛もなく體は肥大にして身の上部に穴あり、其所より鹹水を噴吹す、前脚は鰭となり、後脚は尾の如く又になりて横面に附けり、色は黒

白種々あり、効用は頗る多く皮肉は食用に供し、骨は肥料と又は細工に用ひ、脂肪最需用多し、鬚は彈力強き爲め種々の細工に用ふ、これを名けてをさ或はひれともいふ、

くひな(秧鷄) 秧鷄は涉渉禽の一なり、頭脊翼に蒼黒の班を具へて淡黃赤色を帶ふ、嘴細く、脚短小なり、眼上に一條の白斑ありて脚は淡黃なり、常に沼池等に棲息して、小魚、水蟲等を吸食す、夕刻又は曇天のとき淋しき聲を發して鳴く、

くびきりむつた はつたの一種なり、其意地非常に強く、物などを嚙ませて其の一端を引けば、其頸切れても嚙たるを放さず、故にくびきりはつたの名あり、

くらげ(海月、水母) 軟體動物の一種にして其形蓮の葉の如し、手足鼻目眼鱗を具へず、紫紅色を帯ひ骨なく海面に流浮

す、乾して食用となすことを得、されど一種水くらげと稱するものは生食すべからず、

くじやく(孔雀) 孔雀は鸚鵡類の一種なり、雄は頂上に綠羽三四莖あり、長サ五六寸冠冕の如し尾は長くして毎端圓文あり五色の金翠相續て連錢の如く、頗る美麗なり人之を愛し床間の裝飾となす雌は羽冠なく尾短く雄の如く美麗ならず産地は印度の北方に多く高山の喬木に棲息す、

けの部

けつそしき(結組織) 體中の諸器官を保護結締し若しくは支持す、細胞間物質及び細胞より成る、細胞間物質は頗る多量なる事あり、又少き事あり、皆時による、細胞は楕圓、圓球、紡錘、杖狀等の形を成せり、質緻密にして、纖維に變化

せるあり、粘液様なる事あり、
けいたいがく(形體學) 動物體の内外の形體を審にし、其發生中及び最早發生したるもの、萬般を講究するものにて、更に解剖學及び發生學の二學とす、

げんごらうむし(源五郎蟲) 鞘翅類の一種にして池若しくは小川に棲み、體は黒色にして温たかき時は空中を飛びめぐる變態完全なり、

げんせいどうぶつ(原生動物) 單純なる體制にて、其初め原始動物より啓發して表出するものなり、原蟲は微かにして肉眼にて視得らる、者甚稀なり、形體は種々なれども皆一個の細胞なり、器官ありき雖も原形質の分によりて生ずる複細胞動物に見るが如き、組織の器官の比にあらざるや明かなり、

げんちう(原蟲) 他の動物の體内に寄生

する者あり、淡水、鹹水共に頗る無數に産出するものなり、而して之を根足蟲類、鞭毛蟲類、胞子蟲類、纖毛蟲類の四綱、

げんごろう(龍龜)

龍龜は節足動物中、

昆蟲類の一なり、其性質劫掠なれば、他の昆蟲若くは生肉片を以て、飼養し得べく、體の外形は扁平にして、水中を潜行するに適す、觸角は、複眼の前方に生し糸状をなして、十二節より成る、この觸角の形状は、昆蟲の特徴にして、唯この點によりて、外形の酷肖せる、彼の(むかし)と區別し得べし、脚部は三種に分つこきを得、

(一) 後脚、特に游泳に適し、細長にて多少擡状をなし、跗節は扁平にして、其縁邊は毛を以て、被はれ、其の節片は基底より爪に向ひて尖れり、
(二) 中脚普通の昆蟲を見るが如しと雖

も或種の雄蟲にありては、跗節の前三節は他の節片より稍廣くして、其の下に帯を具ふるを見る、

(三) 前脚雌蟲の前脚も、亦普通の形をなすも、本邦産の雄蟲に在りては、跗節の前三節は展開して、圓盤状をなし、其の盤の下面には盃狀の吸着器を具ふ、此の吸盤は屬の異なるに従ひ、其大小及装置を異にす、

けら(蛞蝓) 又おけら 蛞蝓は連環動物の一綱直翅類の一にして土中に穴居す、頭圓く濃褐色を帯び其前脚は特に成長して恰も鼯鼠の手の如しこの手を以て地中を貫通し甚だ田畑を害す、

この部

こひ(鯉) 有脊動物の一綱魚類に屬す體肥大にして大鱗を被る口邊に四本の鬚を

具へ下颚に十本の鈍き齒あり脊鰭長大にして鋸齒状をなす色は居所季節老幼によりて多少差異あり脊は暗綠色にして腹は黄白色を呈し背は少しく赤色なり其肉は上饌に供し脱汁は色素を取り鰾は魚膠を製す此の魚の壽は百歳乃至二百歳に至るものありといふ、

鯉は元東洋の産にして其歐洲に輸入せられたるは僅々三四百年を出でずといふ、金鯉は此變種にして元支那産なり西曆一千六百九十一年始めて英國に渡來せしといふ、

こうづる(鶴)

鶴は涉禽類の一にして全身灰白にして嘴細長に赤色なり羽翼黒色を呈す常に池沼に棲息して蟲魚を啄む、

こごぞう(米蟲)

米蟲は連環動物中甲翅類の一類にして常に穀物の中に棲息す

入其肉を食へば甚害あり、

こかひ(沙蠶) 沙蠶は蠕蟲動物の一なり體軀細長くして赤色を呈す頭部に眼觸鬚あり側面に刺毛を具へ常に泥沙中に埋伏す漁夫は之を用ひて魚を釣るの餌料に供す、

ころぎめ(鯨魚)

鯨魚は鯨魚族の一種にして全身灰黒色にして眼青色に眼瞼を具ふ頭扁平鼻高く頬は赤色にして胸鰭の長大なること鳥翼の如し其性質強暴にして頗る恐るべし肉は甘平、膾又は酢さして佳味なり、

こまどり(駒鳥)

有脊動物の一綱鳴類に屬す頭背翼尾共に赤褐色にして頬赤く胸腹白色なり形状鶯に似たり鳴聲清亮恰も走馬の響を鳴すが如し故にこの名あり世人愛玩して籠養す、

こち(山嘯魚)

山嘯魚は甲頭類に屬する海魚なり背は暗褐色にして腹部は白色

なり尾鰭は十五針帶黃白色にして三條の黒線あり胸鰭は小にして十九針を有す形大なるものは二尺に至る常に沙中に潜伏して小魚の類を食ふ此の魚の肉は淡泊美味なり、

こむんいただき(咽機修魚) 一名こぼんざめ 青花魚族の一にして體細長く頭上に橢圓形の吸盤を具へ下顎長く口に細齒を生ず、船底に附着し水中を疾行す此の吸盤は鱗鬣の變形せるものなり、

こちこ 連環動物の一なり雄は翅あり雌は魚翅にして諸種の羈玉樹に棲息す洋紅と稱する鮮紅の染料は此の雌を粉末にせしものなりめきしこ、あるぜりあ等に産す、

こうひむし(膠皮虫) 膠皮虫は大體「たがめ」に似て小形なり、其雌は一種の膠質物を分泌し、背上に防水用の薄層を作

り、其の下に卵を負ふの特性あり、
こつごりんが(果採蛾、忽毒蛾) 節足動物の中、昆蟲綱の中、葉捲蛾科の一なり、此の蛾は、菓樹栽培家の最も惡む所のものにして、菓の心に近き邊に蠢入して、之れを蝕害する鳥蠅之なり、此の鳥蠅は、所謂こつごりん蛾の名を得たる以所なり、

こみづむし(小水蟲又は風船蟲) 小水蟲は節足動物中、昆蟲類の一にして、其體橢圓形、灰黑色にして斑點あり、長さは大概半吋以下なり、河流、池沼、湖水等到る所に發生す、形狀一見松藻蟲に似て運動するにも、又松藻蟲の如の構狀の脚を以て進退すといへとも、その松藻異さる所は、脚を具へたる位置の異なるによりて、區別することを得、
ごみかつぎ(又はいさごむし) (塵捏

蟲)塵捏蟲は節足動物中、昆蟲類の一にして腐敗せる、木片、若くは細長き葉を用ひ或は直に之れを並列し、或は縱横に之を交錯して小屋を營む、此の小屋は其外形は粗なれども、其内部は滑かにして、絹を以て、張りつめ、柔軟なる幼蟲を保護するには頗る適當なる構造を有せり、屋狀は圓筒にして、其兩端に石塊を附着するものあり、或は細微の砂より成り、巻旋せること恰も蝸牛の如くして、他物の侵入を防ぐ、而して呼吸する爲めに、水の流通すへき、小孔を作る、幼蟲は皆口より細き糸を吐き、之れを以て住屋を作る繩素とし、或種に屬するものは、全く絹絲を吐く、成生は夜間好みて燈火を暴ふ、所謂「とびけう」と稱するもの是なり
こうしるい(甲翅類) 此類の前翅は角質なり、後翅は薄膜なり、頭及び胸は角

質の硬皮を被膜、自在に運動す、上下の腿は大にして且強し、觸角の形狀は一ならず、複眼なり單眼は稀にあるものなり、角質なる前翅は、鞘と云ふて、休息する時は、柔軟なる腹及後翅を蔽へ能く保證す、後翅は膜質なるを以て靜息する時は縱異し又横折して外部にあらわす事なし腹は頗る肥大ななり、脚は游泳又は走行に便す、昆蟲の一類なり、
こうこころね(甲殼類) 體は頭胸兩部判然せず、腹部は一見頭胸部と區別せらる、頭胸部には一雙の複眼に二對の角とを有す、口は上顎一雙下顎雙ありて咀嚼に適す、複眼は往々柄を持ち、幼時は一箇の單眼ありたり、胸部は肢ありて歩行、游泳或は交尾等の作用を司る、此類は水中に棲息し多く海中に住す、呼吸器は鰓にして胸部に小さき心臟を有す、

神経系は腹面を走る神経球の連接により成る、雌雄異體にして卵生なり、節足動物の一なり、

こんちゅうるゐ(昆蟲類) 節足動物の類にして頭胸腹の三部明に區別せられ頭頭に一對の觸角あり一對の小さき顎あり四個の環節より成ると雖も相緊接せしめて區別し能はず、胸部は三個の環節より成り毎環毎に脚を有し、又其中の後の二環節には背面に當つて翅を生じ腹部は九節若しくは十節の環節より成る、此の部には肢なし、口は種々に形あり、液體を吸ふに適するもの或は物を嚙むに適するもの等あり、大概上唇、下唇、大顎、小顎とより成る、眼には單眼のもの複眼のものとなりて頭部にあり消化器は食道胃腹具はれり、呼吸器は各環節の兩側に孔あるのみ、心臓は消化器の背部にあ

りて管形にして左右に孔あるなり雌雄は多くは異體にして卵生なり、而して其の發育は三様の變體を經返す、幼蟲、蛹及び成蟲とす、然れども其の變體の如何により更に此類を三とす、不變態類、半變態類全變態類即ち是れなり、其數實に二十万を下らず蓋し昆蟲は吾人に其利益大に關係すれば之れを一科として研究するあり、

こうちようどうぶつ(腔腸動物) 此門に屬する動物は珊瑚、くらげ、いそぎんちやく等を含めるものなり、其種類甚た多し、此類は消化機關なく、食物は直に口より體中の腔室に入りて消化せらる、別に肛門を具へざるを以て不消化なる部分は口より吐出す、體軀は内外二層の皮より成り外層には微細なる細胞を具へたる刺胞あり、外敵の襲撃を防ぐ爲に各胞細

内に螺旋狀に捻れたる刺絲あり之を伸出して刺衝す、又口の周りに感覺を有する數多の指の如き機關あり食餌を捕獲するに便す、不完全の神経あれども循環機及び呼吸機は全くなし、

こきつき(呼吸器) 空氣中の酸素を吸收し其酸化により體中に生ずる炭酸を排除する機能は特別の裝置の營むものあり皮膚の之を營むものあり、空氣呼吸に適當せる所の若しくは呼吸に適當せる處の鰓等是なり、

こんそくちゅうるゐ(根足蟲類) 一定の形狀をなさずして、裸體なるものあり、又は介殼狀を成す者あり、針骨を生ずる者ありて體質は虚足を伸出する者又縮入する者も頗ふる定形なる者なり、體軀粘液狀なり突起を生じよく收縮す、移動並に食物採取に便す、之を虚足とす、虚足は細

く絲の如きあり幅の如きあり、樹に似たるに岐せるものあり原蟲類の一類なり

こどうぶつがく(古動物學) 此學は古植物學と共に古生物學を成す者にして、地層中の分布、化石動物の構造分類等を根本的に考究する學なり、

こがねむし(黄金蟲) 節足動物中鞘翅類の部、甲蟲類に屬す、前翅は角質に變じ飛翔の用をなさず、後翅は膜質にして靜止せるときは、之れを縱横に疊みて前翅を以て之れを蔽へり、完全變體にして幼蟲は多く暗所にひそみ成蟲は植物を食ふ害蟲なり、

こうさいるゐ(後鰓類) 介殼を以て被はれ、鰓は背面に突出し雌雄同體なり、うみうし此類なり、軟體動物にして腹足類に屬す、

間に小膜なり、眼の周圍は羽毛なし、鳥類に屬す、

さ の 部

さんご(珊瑚) 腔腸動物の一綱、珊瑚類の一なり、表部には、共有鮮肉の一層あり、此の共有鮮肉に數多の小孔ありて、毎孔皆水嚙を存し、且縱横の小溝ありて、其の中に養液を含み以て、各自の水嚙に連る、體の内部は、石炭質の莖柱ありて世人の最も貴重するもの是なり、其色は濃紅色なるものと淡紅色なるものとあり、淡紅色のものを上品とす、本邦にては、土佐の沿岸及薩摩の海等と産す、又白珊瑚と稱するものは、變種にして價安し、

さなだむし(繸蟲) 繸蟲は、蠕形動物の一綱、扁蟲類の一に屬す、其體は數多の

節片より成り、口及び腹管を見ふることなく、表皮に由つて、養料を攝取す、皮肉は各節片肉に充滿し、繁殖極めて、盛んにして、人蓄魚鱸の體内に寄生す、種類は三種あり、有鉤のもの無鉤のもの裂頭のもの是なり、若し人體に此蟲の寄生することあるときは、或は頭痛鬱悶し、或は食慾を減し遂に人命を失ふに至ることなしとせす、故に驅蟲劑を用ひて、此蟲の驅除をなす、るへからず、この蟲は頭部より環節を新生して、復原との繸形を成す、故に頭部を驅除するにあらざれば驅蟲劑の動を見ることが能はず、驅蟲劑の主なるものは、栝榴根皮、てれびん油等にして、これ等は胃腸の病懷妊月經等の場合には用ふへからず、

(一)有鉤繸蟲、頭は球形を爲し、四個の吸盤を具ふ、其の項上に二列の環鉤を生

す、此の吸盤及鉤を以て、腹の粘膜面に附着す、頭以下數百の環節より成る、長きものは二十尺に至るものあり、老成する従ひ環節離れて糞とともに體外に排出せらる、而して、卵子は柔皮様のものに包まれ環節内にあり、環節は腐敗するも皮膜中にある胚子は死することなし、豚の糞を食する時は此の體内に寄生し、人豚を食ふときは、再び人體に寄生するに至る、

(二)無鉤繸蟲、卵子糞とともに體外に排出し、四方に散乱し草葉等に附着するあり、牛の是れを食する時は牛體に入り、人この牛肉を食するときは、上連豚の場合の如く、人體内に繁殖す、

(三)裂頭繸蟲、我邦人に最も多く見る所にして、其頭長く各一個の溝ありて、腹の内面に附着す、

さそり(全蠍) 全蠍は、蜘蛛類の一にして、熱帶地方に産する毒蟲なり、其頭胸部に二個の大なる單眼及び螯を具へ腹部の末端に毒刺あり、毒刺に孔ありて之を皮膚内に挿入するときは、即ち其孔より毒液を出して、大害を與ふ南米及び錫蘭島に産する黒色の全蠍に刺傷さるゝときは、即害生命に及ふことあり、往時は之を乾して藥用に供せり、我地球には此蟲に似たるサソリモドキを産す、

さなき(蝨) 蝨の中にて孵化したる蠶をいふ、

ざりかに(蠅蝨) 一名つひかに、蠅蝨は、甲蟲類の一目、十脚類の科長尾類に屬す一頭胸部扁平にして、第一對の脚は變して螯をなす、之を脱落するときは、更に生ずるの特性あり、其胃中に突起せるものありて、咀嚼の用をなす、蠅蝨石と

稱する石灰質より成る、薬用となる性質は、食食にして、互に争闘し或は其の幼なるものを食害す、本邦にして奥羽北海道等に多く産す、

さけ(鮭) 鮭は、鮭鱈族の一種なり、體色は長幼居處によりて差あり、顎骨、口骨蓋骨及舌上に齒を生す、肉は赤色にして美味なり、吾邦にては、北海道に多く産す、大さ二尺六七寸に至る、秋分の頃より河川に入り十月頃清砂の間に産卵す、其の遡上の時に網獲す、之を鹽引となし各地に輸出す、卵も赤色にして、味最も佳なり、

さより(鰻魚) 鰻魚は、軟鱈類に屬す、體形圓長にして鱗細き海魚なり、頭首小にして下喙は針の如く眼巨大なり、色は微赤色に、喙は黒く肉は白く味美なり、最も多く東北海に産し大なるものは、二三

尺に至る、

さんしようを(鮠魚) 兩棲類の一目、有尾類の一にして、頭は平に背は黒褐色にして、斑點あり、且背上に腺藏ありて頭に近くに從ひ、其數を増す、眼は小にして、口顎に幼齒あり、吾邦にては伊賀伊勢等に最多し、日光に産するものは、形小さく別種に屬す、何れも美味なり、

さざえ(榮螺) 榮螺は、軟體動物の一綱腹歩類の一にして、海に産す、外部は石灰質にして、圓錐形の殻ありて、其殻に數多の突起あり、厭は圓板にして、外部は赤色基石の如し、頭部に肉辨あり、觸角數對其間に挺出す、食用として頗る美味なれとも其質軟なる消化し難き肉なり、殻に突起なきものを、つのなしさざえといひて、西海南海の沿岸に産す、

さそりもぢき 節足動物中、蜘蛛綱の中、

觸足目の一科にして、腹部は後類よりなり、後類頗る大にて、其形缺の如し、腹部の末端に尾有り、

さめるお(鮫類) 有脊動物の中、魚綱の中、硬骨目の一科なり、長錐形にして、横口類にして、鰓孔は體側に有り、此巨大なるものは迅速なる游泳をなし、性貪食なり、其皮は磨摺するに用ひ、肉は魚餅などを製す、魚類の部にては、これを硬鱗中に入れ、別に一類として取扱はざりしが、茲に之れをあく、

さんごるお(珊瑚類) 單體又複體の物あり、其體壁は三層なり、常にぼりぶを成す、珊瑚ぼりぶは下面を以て物に附着し、上面の中央に裂状の口を開き、許多の觸手其周圍に環生す、開口の時は菊花の如し、之に觸る、時は收縮す、内腔中に懸垂せる、管状の食道あり、而して

其下端は腔腸と通す、珊瑚は、總て海産なり、多放線及び八放線類の二綱目とす、腔腸動物の一類なり、

さるお(猴類) この類は人類に近し、四肢共に物を握るを得、指の末端には爪ありて、扁平なり、顔面は毛を生せず、齒は人と大差なし、三十六枚を有し、性群居を好み、多く樹上に棲息す、其の種類極めて多く、しゃうじやう、ごりらてながさる、等あり、有胎盤哺乳類にして脊椎動物に屬す、

さいたう(細胞) 生物體を組織する、原形質の形狀は、一定の微塊を成す、細胞と云ふものあり、細胞は、單獨に一個の單細胞生物を成すあり、又は數多結合の上、複細胞生物を構成するものなり、其細胞の本形狀は圓球狀なれども、時々種々に變化する事あり、中なる核は、同形

の小體を包藏す、核は至要の類部原形質分にして、原形質の分化より生ずるなり核の中には其物質を分化によりて、生ずるものなり、

さい(犀) 犀は、有索動物中、有脊動物綱中、哺乳目中、奇蹄類の科にして、象に次ぎ大なる獸なり、鼻上に、一乃至二の突起あり、纖維質より成る、所謂角を組成す、四肢皆三趾を具へ、嗅聽感は頗る鋭敏なり、いへども、視力弱し、産地は、亞細亞、亞非利加にして、深林に棲息す、其性愚にて群をなす、効用は肉は食ひ、皮は最需用多し、印度に産するものは、鼻頭に一角あるを以て、一角犀といひ、亞非利加に産するものは、二角あるを以て、二角犀といふ、

しの部

しか(鹿) 有索動物門中、有脊動物綱の中、哺乳目の中、偶蹄類に屬す、體形馬より小さく、狗より大なり、毛色は褐色にして、黄色を帯ぶ、小斑ありて麗はし頭に立角ありて、分枝す、毎年夏落ちて秋再生す、昔時ば武人之を刀掛等に用ひて愛玩す、現時は多く彫刻の材とす、牝には角なし、大和の春日等にて、人のよく見る所なり、

しぎ(鷓鴣) 鷓鴣は有索動物中、有脊動物綱中、鳥目の中、鷓鴣類に屬す、嘴長く形體くいなに似て、小さく、羽毛茶褐色にして白點あり、

しよくちうるお(食蟲類) この種の動物は體皆小にして、脚は非常に短く、口吻は長く前方に突出し、足は稍扁平にして趾の端に爪を有し、地を掘るに適し、日光を忍むの性あり、又極めて小形なる

齒を備へ、主に蟲類を捉へて食物とす、もぐら、はりねづみ等、此の種に屬す、有胎盤動物なり、

しぎいるお(四鰓類) 四鰓を有する、頭足類にして、其の腕は吸盤を有せざれども、皆頭部にあり、噴水器は完全にして管状をなし、墨汁を有せず、介殻を被りて厚し、

しやうきんるお(涉禽類) 嘴、頸部及脚極めて長く、海河のほとりに生息し、魚介を食とす、つる、さぎ、たんちやう等之れに屬す、鳥類に屬す、

しじみてお(小灰蝶) 小灰蝶は、節足動物中、昆蟲綱中、鱗翅目中、蝶類中、小灰蝶科の一にして、三期の發達をなすこと一般の蝶類と異なることなし、溪流の岸邊及濕潤の地にして、赤楊の生ぜる所を好みて、徘徊する小蝶なり、此蟲は、

鳥蟲、若くは、蛭蟲よりは寧ろ蠶類に似て且綿蟲の分泌物を幾分か身に被り、其脚及肉質突起は短小にして、體を樹皮に密着せるに適せり、其幼蟲は、綿蟲を以て飼養することを得、この蟲は真正の肉食類の一なり、

しじみ(蜆) 蜆は、軟體動物門中、辨鰓綱の中、同柱族の科なり、殻は、殆ど三角形にして、淡水に生活し、其の色黒又は黒褐なり、常に水底の泥中に住し、其味甚だ佳なり、本邦産中最大なる者は同類中の新田蜆なり、

しやこうしか(麝) 麝は、反芻類中の麋鹿族の一種なり、形體麋鹿に似て矮小なり、角又は涙竅は牝牡共に有せず、牡は上顎の犬齒吻外に突出し、長さ殆ど三尺に達す、性質怯懦なれども、動作輕敏なり加ふるに能く蘄巖を踏歩す、牡の腹部に

は二腺を有し、之れより香料を分泌す、世に所謂麝香とは即ち是なり、東京麝香、しべりや麝香、及び無囊麝香の三種あり、右の内最上なるものを、東京麝香とす、中央亞細亞は麝の産出本場として有名なり

しよくにくるぬ(食肉類)

此の類は、動物の肉を食するものなれば、犬齒銳利にして、凡て其の趾の末端に鈎形に曲りたる鋭き爪ありて、其の爪の基には一種の弾力性なる筋肉を備ふ、而して歩行の際は其爪地に接することなし、此類に水棲なるものと、陸棲なるものと二種類あり、其陸棲なるものは、鳥類、昆虫又は樹根等を食とし、其水棲なるものは、指跡の間に蹼を生じ、魚介の族を食す、陸棲にはいぬ、ねこ、とら、をほかみ、ひょう等あり、其水棲なるものには

あざらし、なつとせい、等あり、以て其性大膽癡猛なるもの多きを知る可し、脊椎動物に屬して、有胎盤哺乳類なり、

しんけいのそしき(神経組織)

神経細胞より成る、神経系の中樞に存在する神経細胞は樹根状に數枝を發出し、且神経纖維を發す、神経を成すものは、此纖維の數條聚まれるものなり、

しんけいけい(神経系)

神経及び中樞の二部より成る、中樞は神経球及び腦脊髓を云ひ、皆神経力の根源とする所なり、神経中樞より起りて、體軀の諸部に分達せる所の絲條を云ふ、五官感覺器の外部より受收する刺激を中樞に輸送し、又刺激を筋に傳達して之を活動せしむる作用を司る、

しようしよき(消化器)

人類の消化器は、之を生理の部にして説くを以て、

茲に攻究するものは、一般動物の消化器とす、消化器は口に始まり、齒、食道、嚙嚙、砂囊、胃、腸、肛門線に終る、即ち消化器及び消化液を分泌する所の各部の諸線より成る、消化器は數部に區分す、

しゆんくごんけい(循環系)

體軀中の各部に營養を分泌し、老廢物を聚取して新陳代謝の媒介をなす所の液を血液と云ふ、血液は體腔には特別なる血管中を運行す、唧筒作用を爲す、血管系の一部は分泌す、心臓是なり、心臓より血液を送出する血管を動脈と云ひ、又之を心臓に還輸する者を靜脈と云ふ、

しちちちるぬ(繸蟲類)

體軀は數多の體片と稱する體片相連繫して成る、有脊椎動物の腸内に寄生す、一端に附着器あり頭と稱す、頭の次は絲の如き細き頸あり、續々片節を生ず、夫れ故に驅除する

場合には、頭及頸を留止する時は即ち元形に復す、片節には各片に雌雄の殖器を具ふればなり、

しよくもつるい(食毛類)

其形小にして、翅を有せず、口は嚙咬に通ず、血液を呼收する事なし、鳥類の寄生蟲なり、羽毛を食す、其狀虱に似たり、はむしの類是に屬す、昆虫の一種なり、

しびれぬい

軟骨類にして電氣を有し自個の保護をなす、

あやうしるぬ(鞘翅類)

前翅は硬くして革の如く飛翔の用をなさず、只後翅を保護するのみなり、口は咀嚼に適し、完全變態なり、たまむし、がまきりむし等は、此類に屬す、昆虫の一種なり、

しらすぎ(鷺)

鷺は有索動物門中、有脊椎動物の中、鳥目の中、涉水類の科に屬す、首及勁長し羽毛白色なるが、故に、

此の名あり、
 しらうな(白魚) 白魚は、有索動物門中、有脊動物綱中、魚目中、鮭鱒類の科にあり、體區長全身淡青色にして、鱗に黒色の斑點あり、肛門の邊最も肥大にして、其幅殆ど頭部に三倍せり、此の魚水を得ざれば白色となり半ば透明なり、三四月の頃になれば腹に鰓ありて味極めて佳なり、
 しいら(勒魚) 勒魚は有索動物門中、有脊動物綱の中、魚目の中、青花魚料の一種にして、體海鱧に似たり、背部は、青色腹部は、香橙色尾鰭は金色なれども死すれば、全身濃紅色に變じて、青色の斑紋を呈し、尾鰭は白銀色に變ず然して紅色の光輝を放つ、此魚は性敏活にして常に文鰻魚を追撃す、其鰓をくまびきさ云ひ、越中の産を最上とす、

しようじよう(猩々) 猩々は、有索動物門中、有脊動物綱中、哺乳目の中、猿類の科にあり、顔面潤大にして、少しく皮膚を裸出して、鉛色を帯ぶ、身長四尺餘にして體毛の色栗褐なり、臂毛逆生せり、後肢は矮短なれども、前肢は長し之を垂るれば蹠に達し、以て立行す、牡は其頸部に鬣鬚を生じ、犬齒強且つ大なり平素林中に棲居し専ら植物質を嗜食し、其の性強暴なり、すまさら、ぼるれをに之を産す、

すの部

すまめ(雀) 雀は有索動物門中、有脊動物綱の中、鳥目の中、鳴禽類の中、厚鱗科の一なり、體の羽毛黄赤色にして黒色の斑紋を具へ、頬邊に三角の黒斑あり、翼に二條の横白斑ありて、喉腹部は殆ん

ど灰白色なり、家屋の簷下に棲息するものは稍大なり、色合幾分か異なる、之をにうないすめさいふ、田圃に群集して五穀を害すること夥しさいへども、好んで菓樹の害虫を啄食するを以て養樹家には有益なり、之を大驅すれば他の害虫の繁殖するを以て農家にては注意せざるべからず、
 すいきんるお(水禽類) 水邊に生活し、長く游泳す、脚短く體の後方にあり、趾間には蹠ありて水を掻き分くるに適せりがん、かも、う等此類なり、鳥類に屬するものなり、
 すつぽん(鼈) 鼈は、有索動物門中、有脊動物綱の中、爬虫目の中、龜鼈類の科に屬す、常に池沼江湖の中に生息し、魚介蟲類を食ふ初夏の頃水濱の水を穿ちて産卵し、六七十日を経て、孵化す、甲

背扁平にして其質堅からず、甲は狭少なるが故に四肢頭尾を縮藏すること能はず鼻は延長して象の鼻の如し、其肉は頗佳味なり、

すいきう(水牛)

水牛は、有索動物門中、有脊動物綱の中、哺乳目の中、反芻類の中、洞角科の一種なり、體軀偉大にして強壯なり、其性質猛烈剛愎にして、虎と格闘するの力ありといふ、前額は穹隆して縷毛を生し、角は扁平にて大きく、後方に曲れり、亞細亞の内部に産す、肉は美味ならずさいへども貧民は之を食す、乳は良酪とし皮は製靴の用に供す、

せの部

せんざんこう(鯨鯨) 一名龍鯨 鯨鯨は、有脊動物門中、有脊動物綱中、魚目の中、貧齒類に屬す、其全體に硬き鱗を被り、

尾磚狀をなし、四肢は短小にして、五趾を具へ、尾體より長し、爪は鋭強にして長く、土壌を穿つに甚だ便なり、舌は伸縮極めて自在にして、其形は細長なり、而して之より粘液を分泌し、蟻の如き小蟲は舐食す、若し敵に會ふときは、體を捲縮し、其鱗を聳し、牙鋭きこと甚だし故に其體は小なれども、謂の如く強食の難を免るを得、亞細亞及び亞弗利加に産し、其鱗は穿山甲と稱して往時藥用に供せり、

せきれい(鵠鵠) 鵠鵠は、有索動物門中有脊動物綱中、鳥目の中、鳴禽類の中の一ชนิดにして、其體細瘦形錐の如し其尖少なく扁平なり、背部は黒く腹部は白し、之を背黒鵠鵠と云ふまた、胞部青黄にして、眼上に白き斑紋あるものは黃鵠鵠と云ふ、

せきつゝおごうぶつ(脊椎動物) 殆んど高等なる動物を含み、體の中央に必ず、脊骨ありて、大概左右相對なり、此の脊骨は、頭部に初まりて、體の末端に終り、中軸を作すものなり、而してこれ一本の骨に非ず、幾多の相連結せる、脊骨より成るなり、又前後左右に、自在に運動屈曲し、得る様造られたり、今一個の脊椎を検するに、白形にして背側面より、左右に一個つゝの突出ありて、背の中央部にて、相接合し體の背側なる小腔を包む、この小腔裡に在る、脊髓は生活には、大に必要なる器官なるを以て、其の柔軟にして破損し易きをうれひ保護する爲めに、備へられたるなり、體の構造は、頭、幹及び尾の三部に區別され、頭部には、腦髓と稱へらるゝ重なる、主感覺器及耳目等あり、幹部には、消化器

呼吸器、排泄器等の諸器官あり、されど尾部には、甚だ著しき器官あることなし幹部には、通例二對の肢あり、陸棲のもの、この四肢大に發達して、體形も亦これにより、其の構造を左右せらるゝ、水棲のものは、陸棲のものに比すれば、小にして陸棲のものゝ如く、骨と肉とありて、一の骨格を造らず、體の中央を横斷すれば、一個の大なる腔ありて、其の中に諸種の器官備はり、外部は肉と皮膚とに被はれたるを知る、大概圓筒形をなし、其の内部に諸臟機含まるゝなり、消化器は、必ず體の前端より起り、上下の顎ある口に初まり、肛門に終る、この顎は上下に運動し、食物を咀嚼す、これ實に脊椎動物にとりての一種の特徴なり胃、腹、肝臟、心臟等委く具備せざるはなく、其器官の欠けたるはまれなり、血液

は、陸上に棲むものは、四周の空氣不導體なるを以て、運動より起る、熱により常に體温を有す、故に又温血動物の名あり、而して其血液は赤し、水中に棲むもの及び他の動物と雖も多少熱を生ぜざることなしと云へ、放散の多きと、其量少なきとを以て、吾人は殆んど其熱を感せず、これ等を冷血動物と云ふ、血脈管は、動脈管及靜脈管の二つより成り、心臟は左右兩個の心室より成り、こむ製のぼんぶの如く伸縮自在にして、血液を體内に循環せしむ、神經は中樞ありて、前頭の頭蓋骨に位し、腦と稱す、其脊髓内にあるものは脊髓神經と云ふ、腦は大脳、小脳、間腦、小脳及延髓の五部より成る、官覺器の重なるもの即ち視、聽、嗅、味、觸の五官は完備し、觸官を除くの外は、皆頭部にあり、筋肉は隨意運動

をなすものと不隨意運動をなすものと二種ありて神經の作用により伸縮をなす、生殖法は卵生のものと体生のものとありて一定の時期ありて生殖作用をなす、又この動物は水中に生活するものと、陸上に生活するものと、水陸共に生活し得るものとありて、呼吸器は、鰓及肺の二種あり而して、鰓は水を呼吸し口より入り、肺は空気を呼吸し、口若しくは鼻より入り、又發音器は、空気を出入する途にあるなり、この類に五綱あり、即ち哺乳類、鳥類、爬虫類、兩棲類、及魚類とす、詳細は各其綱に就きて見るべし、

せきこむく(尺蠖) 鱗翅類の幼蟲の一種にして其初め卵より孵化するものなり、彼の蠶兒の繭を作るごとく口より細き絲を生じ、繭を作り後ち蛾に變ずこれ等は常に樹葉を食するが故に害蟲の一なり、

り、口もあり、又肛門を具ふ、體面の全部に纖毛を簇生す、其毛を揮て自在に水中を游泳す、原蟲類中の一類なり、

せいこむつづつ(生活物質) 通常數多の物質より構成するものなり、其内緊要なるものは、原形質なり、生活の源は此物質なり、故に之を生活物質とも稱するなり、化學上より、此原形質を講究する時は、蛋白の一種にて、炭素化合物なり、其最も至要の成分は、炭、水、窒、酸、の原素なり、柔軟又は粘液状を成す所以のものは、即ち多量の水分を含有するが爲なり、其諸性質中最も特殊なるは生活なり、

せんきうるゐ(前尻類) 其形狀種々にして一ならず、體面には介殻のあるあり又なきもあり、口の周圍に纖毛を生せる觸を環生するものなり、體部には、櫛突起

り、
ぜんけいこむつ(蠕形動物) 形狀延長左右相稱なり、體質柔軟前後に連り、又は單一にて數環節より成り、三胚葉は並より構成す、神經系の位置は體中の腹部に占む、泌尿器あり、又血管系あるありて、腔腸動物の上に出づる者なり、體面に介殻を生ずる者を稀に見る事あり、

せいしよくき(生殖器) 其一體にて、雌雄兩性の生殖器を兼備する者を、雌雄同體と云ふ、又兩性別にある者を雌雄異體と云ふ、生殖器は雌は卵巢を主部とす、雄は睪丸を主部とす、主部の外には、附屬の諸器官及輸官等あり、

せんもうちつるゐ(纖毛蟲類) 纖毛蟲類とは、原生動物門の中、滴蟲綱中の一目にして、ぞうりむし、つりかねむし等を總稱す、原蟲中には、最高等の者なり、と云ふ蹄鐵狀の突起せるものあり、體軀には環節構成を成さず、腸管は口より後方に至り迂曲して、又前進す肛門は體の前端に接近したる位置に於て、背部に開けり、血管系は一般になきが如し、稀にあるものもあるも不完全なり、雌雄異體なり、

せんちつるゐ(線蟲類) 寄虫の者あり、又獨立に生活する者あり、口あり、腸あり、肛門あり、雌蟲は雄蟲よりも遙かに大なり、蟻蟲、蛔蟲、十二指腸蟲等皆之に類屬す、

せつかうるゐ(節甲類) 胸部に七個の環節ありて、全身の環節一定せり、歩脚七八對あり、複眼なり、のみ、ふなむし、とひむし等なり、甲殼類の一類なり
せつかうるゐ(切甲類) 環節等一定せず又其構造も種々ありて一定の形體なし、かめのて、みじんこ等は此の類なり、

甲殻類の一なり、
せつそくごうぶつ(節足動物) 左右相
 對にして、數多の環節より成り、環節毎
 に一對の脚あり、其表面は硬き皮膚を被
 ふと雖とも、環節なるが爲めに、屈曲を
 なし得、其皮膚の硬きは身體を保護する
 爲なり、眼は小なる眼球數多相集まりて
 成り、一對あり、之れを稱して、複眼と
 云ふ、而して一個の小なる、眼球各一個
 の水晶體を具ふ、神経は、各環節毎に其
 中樞とも云ふべきものありて、節をなす
 之れを神経節と云ひ、二本の神経により
 互に相連續さる、而して此神経節より幾
 多の神経左右の各關節の諸部に達す、第
 一の神経節は食道の前、第二のものは食
 道の後に在りて、之れを連結する二條の
 神経は食道の兩側を回り相合して一の環
 をなせり、消化器は、口より肛門迄一直線

なり、心臟は食道の背方にありて、左右數
 雙の孔より血液心臟に入りかくて全體に
 回るなり、其血液は白色なり、又頭の前
 部にば一二對の觸角ありて知覺を司る、
 生殖は皆雌雄異體にして、卵生なり、又
 此動物は外面硬皮に包まれたるを以て脱
 皮して、漸々成長するものなり、之れを
 分つて昆蟲類、多足類、蜘蛛類、甲殻類
 の四とす、
せきそくごうぶつ(脊索動物) 體の中
 央に一條の脊索ありて、中央神経系を具
 へ腹面には諸器官具はると雖ども、知覺
 なきが如く、一見動物なりや否やを疑は
 しむ、其幼時より成長に至るの間、蓋し種
 々の變遷あるならん、其幼時は海中に尾
 を有して游泳すと云ふ、
せんさいるお(前鰓類) 軟體動物中腹足
 類の一類にして、皆介殻を有し、鰓は心

臟の後にありて雌雄異體なり、よめがさ
 ら、あわび、いもがひ、さくら等、此に
 屬す、

せいぞう(海象) 海象は、有索動物門中
 有脊動物綱中哺乳目の中、有胎盤動物の
 中、食肉科の中の一様なり、全身肥大に
 して、大黃褐色の短毛を密生す、口部に
 は長き粗毛を生じ其狀恰も鬚の如し、上
 顎には大齒あり長大銳利にして、長さ二
 尺許り以て海岸に縁上し、又は氷上に匍
 匐するに便す世人之を海象牙と稱し、義
 齒を製するに妙なり、脂肪及び肉は食料
 に供し、皮は革紐等を製れるに便なり、
 常に群居し其數千頭に上る事何りと云ふ
 其大さは一丈八尺乃至二丈に至り、重さ
 は千五百ポンド乃至二千ポンドに至る、
 我國にては北海道の極北又は管領たる樺
 太にも亦産す、

せつちう(舌蟲) 舌蟲は節足動物門の
 中、蜘蛛類の一目なり、體を平にして、
 舌狀をなす常に犬狼山羊人類等の腔鼻内
 に寄生し、鼻可答兒等の病疾を發せしむ
 此卵は粘液と共に外界に出で、草葉等に
 附着す、而して羊、牛、兔等に呑み下さ
 らるゝときは、胃に入り肝或は肺に入り
 て、幼蟲となる此蟲再び外界に出て犬等
 に吸入せらるゝときは、鼻腔内に入り茲
 に老成す、

その部

ぞう(象) 象は、有索動物中、有脊動物
 綱中、哺乳目の中、有胎盤哺乳類の中、
 長鼻科の一なり、有脊動物中最大のも
 のにして常に群集することを好む、鼻は
 極めて長く手の働きをなし、如何なる小
 さきものにてても、容易に鼻を以て、採る耳

は大きく垂れ、四足又巨きくして恰も四本の圓柱を立てたるが如し、牙は種々の細工に用ひ、皮は象皮として極め需用多し、印度及び亞非利加の中部にも産す、

ぞうりむし(草履蟲)

草履蟲は、原生動物門中、滴蟲綱の中、纖毛類中の一科に屬す、其體扁平楕圓にして、恰も草履の如し、體の周圍には、纖毛を密生し、之を用ひて水中に波流を起し、以て餌を求む體は透明にして、留水、腐水の中に産す、生殖は分體法による、

そとぎ(組織)

動物體中數多くの細胞の續合せるものにて、一定の形状と作用とを爲すもの即組織なり、之を四類に區別す、皮膜組織、結組織、筋組織とす、

そうしるゐ(雙翅類)

口は、物を刺すに適し、前翅なきも、又雙翅欠きたるものあり、變態す、はへ、のみ等此類に屬す、

す、節足動物門中、昆蟲綱の一なり、或は二翅類ともいふ、

そうきんるゐ(走禽類)

走禽類は、有索動物門中、有脊動物綱の中、鳥目に屬す脚は非常に大にして強く、且走ること實に速なり、然るに其翼退化して全く飛翔の用をなさず、其體大にして、熱帯地の砂漠若しくは原に群をなして生住す、だちやう、きうい、等此に屬す、

たの部

たぬき(狸)

狸は、有索動物門中、有脊動物綱中、哺乳目中、有胎盤哺乳類中、食肉科中、犬族の一種なり、其體肥へ、口尖脚短く尾長し、體毛黃褐色なり、性質は狡猾なり、常に人家に接近して生息す、夜間に民家の養禽を盜食す、

たまむし(玉蟲)

玉蟲は、節足動物門中

昆蟲綱中、鞘翅目の一種にして、綠色に頗る光澤ありて、美麗なり、體は稍卵形なり、

たそくるゐ(多足類)

多足類は、節足動物門中の一綱なり、體は長くして幾多の環節より成り、環節毎に脚あり、其頭部は判然たる區別あれども、胸部と腹部とは區劃すべからず、頭部には一對の觸角ありて翅なく又、複眼なく、變態の經過なく、口は一上雙の顎上二雙の下顎より成り、皆卵生にして生成する時は、皮の硬き甲脱落して、漸々に大になるなり、雌雄異體にして三雙、若くは七雙の有節肢を具へり、やすで、むがで、げじく、等此類なり、昆蟲類なり、

たんびるゐ(彈尾類)

彈尾類は、節足動物門中、昆蟲綱の一目なり、古書の間になき居る、銀色の小蟲にして、全面

細かき鱗を以て蔽はれ、翅なく、目は單眼の集合せるものにして、末端長もなり之れしみむしなり、此種は不變態なり、例へば、くわむし等是なり、

たいちるゐ(苔蟲類)

軟體動物にして海中に産し、群居して、岩石等に附着す、あみがひ其一にして、小個々の體は非常に小なるを以て、殆んど肉眼にて見るべからず、而して船體などに附着す、其色綠色を帯ぶ、

たんちるゐ(單柱類)

單柱類は、軟體動物門中、辨鰓綱中の一なり、前柱なく、一肉柱あるのみ、右左兩殻は往々不同なり、水管なく足も闕く、かき、ほたてかひ、此類に屬す、

たんよくるゐ(短翼類)

短翼類は、有索動物中、有脊動物綱中、鳥目類の一なり、堅き嘴短小なる翼にして、三趾間に蹠

あり、或は無きあり、水中に遊泳す、例へば駄鳥、ひくひどり等、之れに屬す、或は走禽類ともいふ、

たまはへ(玉蠅) 節足動物門中、昆蟲綱の一科に屬す、楊柳科植物の枝端に産卵して、其孵化せし幼蟲は、枝端嫩芽の中に生活し、これが爲めに、其芽は上方に伸長發育すること能はず、獨り其葉を病的に發育せしめ、遂に松球狀の蟲癭を成すなり、

たがめ(田鼈) 節足動物中昆蟲類の一にして、恰も「胃蟲」の如き體形なり、其性質、夜間燈火を慕ひ、多數群集するを以て、一に電燈蟲ともいふ、成蟲は巧に飛翔す、好んで肉食し、前脚に食蟲を捕獲するに適し、中脚及後脚は、歩行に用ふ、地方によりては「かへるばさみ」又は「がつばむし」ともいふ、

たいこうち(太鼓打蟲) 又は(紅娘華) 節足動物中、昆蟲類の内、水黽族の一なり、常に水中に棲む、前脚は把獲の用に適し、中脚及び後脚は歩行に用ふ、尾端に、轉節を名くるものあり、恰も西洋小刀の如く、且兩側に一對の翅を備へ、背の上に負ふ、全體扁平にして、細長形なり或は「ゆりはなすぬ」ともいふ、

たつのを(龍馬) 海馬は、有索動物門中、有脊動物綱の中、魚目の中、硬骨類中、總鰓類に屬す、體頗る扁平にして、頭部は馬に類し、腹部は隆起せり、又尾は物に纏着するに適す、俚俗曰く婦人難産の時産母之を用うれば、則ち輕易なりと、尙其形質の如きは、總鰓類の條に詳なり、

たら(大口魚) 一名鱈 大口魚は、有索動物門中、有脊動物綱中、魚目中、硬骨類中、

軟鰭類に屬する海魚なり、口巨きく齒細小にして喉下に一の肉髯なり、背鰭は、三個臀鰭は二個ありて、腹鰭は尖かり、其色は全身灰白にして、黒斑なり、性寒を好むが故に重に北海に之を産す、肉は其味甚だ佳美にして、淡甘を帶ぶ、雄魚の鱗は雲肉と名づけ其味の美なる事鯛に優れり、其肝より肝油を製すべく、肝油には、白、褐、赤の三種あり、就中鮮褐色の者を上品とす、

たちうを(帶魚) 一名太刀魚 帶魚は、有索動物門中、有脊動物綱中、魚目中鱈魚族の一種なり、其體は匾長にして其色は銀白色なり、鰓下に長髯あり又腹部に其硬棘ありて、利刀の如し、性貪食にして甚だ巧に遊泳す、其肉中には其細微なる骨片多くするを以て、上饌に供する能はずと雖も、其味は美味なりと云ふ、

たいまい(瑇瑁) 瑇瑁は、有索動物門中、有脊動物綱中、爬蟲目中、龜鼈類の一種なり、其形鱉に比すれば、稍小なり、甲は黃褐色に黒色の斑點を具へ、光澤また美なり、鼈甲と稱するもの、即ち是れなり、婦人の櫛簪等を製するに用ひらる世にまた馬蹄牛角を以て、之を偽造し、或は象牙を鹽酸に浸して之を質製するものあり、此魚は多く印度海に、本邦にては琉球近海に産す、

たこ(章魚) 俗蛸 章魚は軟體動物門中、頭足綱中、管足目中、二鰓類中の一にして、體軀柔軟なり、腹部は囊狀をなし頸部の左右に二大眼を具へ、其中央に口を開き、口の周りに八本の脚を有し、每脚吸盤を有す、性活潑怒るときは墨を吐く、其肉は美味なりと雖も消化し難し、其卵房の鹽酸せるものを、海蔘花と稱して、

珍稱す又一種望潮魚なるものは其體細小にして腹中に幾多の卵を有す、故に此名あり、此魚は海底若しくは海邊に産す、

たこがね(缸魚) 缸魚は、軟體動物門中頭足綱中、管足目中、二鰓類の二科に屬す、雌は、白色脆薄の殻内にあり、雄も其出入の自在なる事猶ほ寄生蟲の如し、雄は殻を缺如す脚は八ヶありと雖も、雌の兩脚頭は蹠狀をなし、雄の一脚は變じて囊狀をなす而して、其中に精液を蓄ふ此足を雌の腹内に入るれば、精囊を辭し出で、卵手に接す、殻は白色透明なり而して此魚は温體地方の海水に産す、
たにし(田螺) 田螺は軟體動物門中、腹足綱中の一なり、其殻は黒色陸は角質にして、水田に棲息し、其肉は食用に供して、其味美ならざるに非らずと雖も、亦不

消化たるを免れず、

たからがひ(貝子) 一名子安貝 貝子は軟體動物門中、腹足綱中の一目たり、海産にして、其形は橢圓形なり、色は光澤を帯び種々の斑文あり、以て殻面を裝飾す我が小笠原島に産するものは、其色黄色にして美なり、黒奴は、之を貨幣に代ふ、
たいらぎ(玉球) 玉球は、軟體動物門中、類の一にして、海産なり、色は暗褐色若しくは黒色にして、稍脆薄也其岩石等に附着するや美麗なる脚絲を以てす、脚絲は絹絲を織り維へて、手袋紙入等を製す伊國の皇帝大に之を愛すと云ふ、又肉核は寸許にして、白きこと雪の如し羹となし、高客の食膳に供す、
だちやう(鴉鳥) 鴉鳥は、有索動物門中有脊動物綱中、鳥目綱中、走禽類に屬す、禽中最も大なるものなり、熱帶地方の産

にして曠野に群居し、産卵甚だ多く一卵の重量三百六十羽以上に達す、其亞刺比亞の沙漠及び亞弗利加に産するもの二趾あるを以て、二趾駝鳥の名あり、其高さ六尺乃至八尺に達し、其頸頭の二部殆ど裸出し、雄は黒、雌は灰白色なり、南米に産するものは、前種よりも較々小にして三趾あるを以て、三趾駝鳥と云ふ、頸部に羽毛を生じ、全身灰褐色なり、又其羽毛は他禽と異り、枝々離折して密綴せず嘴扁平にして、骨に髓質を填充す、

ちの部

ちうとんるお(十腕類) 十腕手を有し、其の二觸手は極めて、長く、體多少扁平にして、背部に、海蝶蛸を藏す、其質強にして透明なるあり、或は灰質にして白色脆硬なるあり、軟體動物にして、頭

足類中二鰓類に屬す、ヤリいか之れなり
ちよくしるお(直翅類) 二雙の翅ありて、其一は細く長くして、幾分か厚く、他は薄くして疊みこむを得るなり、いなご、ばつだ、きりぎりす等なり、口は、咀嚼に適し、其變態不完全なり、節足動物門中、昆蟲類の一類なり、

ちうちうるい(紐蟲類) 體軀極めて細長扁平にして、其狀紐の如し、血管、肛門、等を其へ、多くは海産なり、稀に濕地に産するものあり、腹面前端に口あり、後端に肛門あり、頭上に、二對には數個の眼あり、泌尿器あり、血管あり、血液を循環せしむ、雌雄異體なり、蠕形動物門中、扁蟲綱中の一目なりと知るべし、
ちやうびるお(長鼻類) この類に屬するものは、現時唯ぞうあるのみ、亞細亞

亞弗利加の兩大陸に産す、其の體頗ぶる大にして、陸上動物中最大なるものなり體面に僅に短き毛を生じ、鼻は極めて長く其末端に鼻孔を有し、屈伸自在にして感觸鋭敏く物を攫み、恰も人の手に於けるが如く、齒は犬齒なく、上顎の門齒二枚は長くして、且外部迄も突出し、世俗之れを象牙と稱し、大に珍重す、白齒は實に大なり、而して二種のぞうあり、一は印度産にして、一は亞弗利加産なり脊椎動物の有胎盤哺乳類なり、

ちやうよくるね(長翼類) 嘴多く鉤状をなし、翼長く、三趾間に蹠ある海鳥なり、有索動物門中、有脊動物綱中、鳥目に屬する一類なり、

ちやぼどり(嬌鷄) 矮鷄は、有索動物門中、有脊動物の一綱鳥目中、怪儼類に屬す、雞の一種なり、然れとも通常のもの

より、小さく嘴の黄色なるものも上品とす、卵も又小さし、

ちん(狎) 狎は、有索動物門中、有脊動物の一綱、哺乳目にして、有胎盤哺乳類中、食内料の一なり、然れとも犬より、少さし、猫の如く、室内に飼ふ、性質甚だ伶俐なり、

ちん(鳩) 鳩は有索動物門中、有脊動物の一綱鳥目に屬す、喙赤褐色にして、首長く七八寸に至る、其羽に毒性を有するを以て、注意せざるべからず、

つ の 部

つる(鶴) 有索動物門中、有脊動物綱中、鳥目中、涉禽類の一にして、其形ち鶴に類似し、脚長し、嘴は、端直にして、頭部は、其長さ殆んど均し、常に田畔若しくは山澤の畔に生息して、蠕蟲類を食ふ

本邦に産する者には、鶴、丹頂、鷓等あり、此の種の鳥を或は渉水類ともいふ學者あり、

つらねこ(鼯鼠) 一名七郎ねづみ 鼯鼠は有索動物中、有脊動物綱中、哺乳目中、有胎盤哺乳類中、乳齧齒中、鼠族の一にして、其体赤褐色を帯ぶ、腹部は灰白色にして、黒色の長硬毛其間に雜生し、尾は軀幹より、稍々短少なり、全地球上殆んど産せざる所なしと雖、其本産地は亞細亞なり、日常人家に巢居して大害をなし、又能く水を渉る本邦に産するは概して是れなり、

つらね(燕) 燕は、有索動物門中、有脊動物綱中、鳥目中、鳴禽類の内別、鶯口科の一なり、嘴短く扁平にして、三角形をなす、口は深く裂けて眼下に及ぶ、體色黒色にして飛ぶこと輕捷なり、晩春人

家に巢を作り秋去る、好んで飛蟲を食ふ又燕の一種にて、燕窠といふものあり、支那印度等に産す、

つちがへる(土蛙) 土蛙は、有索動物門中、有脊動物綱中、兩棲目中、無尾類の一にして、其色土色をなし、甚だ醜く其構造は兩棲類の部を見るべし、

て の 部

てん(黃鼬) 黃鼬は、有索動物門中、有脊動物綱中、哺乳目中、有胎盤哺乳類中、食肉科中、鼬鼠族の一なり、性質鼬鼠に酷肖すれども、體は稍肥大なり、體毛黄色を帯ひ、四肢の下部は暗黒色なり、

てうざめ(鮫) 鮫は、有索動物門中、有脊動物綱中、魚目中なり、硬鱗類の一種にして、骨は軟骨なり、形は圓筒形にして、尾は不平に、皮膚は、齒質にして、

頸部より尾に至る迄、五條の突起相并列せり、我國石狩川に産す、

てうるお(鳥類)

鳥類は、有索動物門中有脊動物綱中の一目なり、現今生存する鳥類は、一万餘種ありて、温血卵生の脊椎動物たり、體面は羽毛を以て蔽はれ常に空中を飛翔す、其骨は硬けれども、概れ氣窩多くして輕し、蓋し空中を飛ぶに便ならんが爲めなり、羽は大抵角質にして、皮膚の漸々突起して生成したるものに過ぎず、其構造は一定の法規ありて、如何なる小枝に至るも相互に平行に列生し、其小枝は極小の小鈎を以て、連結せり、されば一度相裂け隔るゝとも又舊に復するを得、而して其常に光澤あるは尾根に脂線ありて、この脂肪を嘴を以て、全身に塗沫するに由るなり、この羽毛は、實に體温を保護するが爲めなり

其脊椎は頸部は屈伸自在なれども、其他は殆んど動かす、骨の内には、肺内の空氣出入して、飛翔に便ならしむ、胸骨は大に發達して腹部に突出し俗に鳩胸と云ふ、之れ龍骨なり、翼は外見一個の骨より成る如き觀あるも、上膊骨、臂等皆具備して缺けたるはなし、食道は其中間に嚙嚢と稱する嚢ありて、食物を貯ふ用をなす、かくて、前胃に通ず、其壁厚く消化液に富めり、次に胃に通ず、腸は其發育十分ならず、大腸は甚だ短くして、長く食物の殘餘を止むる能はず、肝、脾臟等備はれり、嘴は角質にして齒なし、肺臟は俗にざりと稱し、其色鮮紅なり、循環器は左右の心耳及心室より成り、他の脊椎動物と異なる所なし、生殖は皆卵生にして、體温を以て孵化するなり、其の時期及び卵産の度數は、種類によりて

相異なる又氣候の變移により居を遷すあり、俗に之れを渡鳥と云ふ、食物は昆蟲穀物、綠草又は魚類などを食す、鳥の飛翔の速度は一秒に平均四五十尺なりと云ふ、又實に速かなりと云ふべし、此類を分ちて游禽類、攀木類、鳩類、鵝類、鳴禽類、水禽類、涉禽類、走禽類の八とす、各其部に就き見るべし、脊椎動物に屬するものなり、

てづるもづる

陽逐足の條を見よ、

てんまごむし(瓢蟲)

(一名紅娘)瓢蟲は、節足動物の中、昆蟲類の中、瓢蟲科の一にして、此の種の昆蟲は、多少半球狀に似たる體をなし、多くは、赤色、若しくは、黄色にして、黒點あり、或は黒色にして、赤色若しくは、黄色の點を帶ぶる小甲蟲なり、常に圓圖にありて、他の昆蟲の幼蟲又は成蟲、又は卵を食する益蟲

なり、園藝上に於て少なからざる、効あるを以て、農夫の友と稱するものあり、三期の生活をなすこと他の昆蟲の三期生活をなすものと同じ、此の幼蟲は咬啜略蜻蛉の幼蟲と相似たりと雖も、體の柔かなること、其頸の短きことによりて、區別することを得、

てんまごむし一名うめけむし(天幕蜃)

節足動物中、昆蟲の中、鱗翅目の中、天幕蜃科の一なり、發育の階段は三期に分つことを得卵は先、天幕の内にて孵化し、幼蟲となり、次に繭を作りて、蛹となり、遂に成蟲となる、早春樹葉の開展し始むる頃、林檎その他の樹枝上に著しき、粗網を張れるを見む、是れ幼蟲期の初期に當りて、蟲が群生する住屋なり、以て、風雨を凌ぐ必要なる天幕となす、故にこの名の付せられたる以所なるへし

この蟲は新しき木葉を以て食す、
てながさる(猿猴) 猿猴は、有索動物門
中、有脊動物綱中、哺乳目中、有胎盤哺
乳類中、猿猴科の一なり、印度のすんだ
う島に最も多し、

その部

まいつくるぬ(頭足類) 軟體動物門の
一綱なり、其足は頭部の末端より生じ、
身體は何も破らず、胴と頭より成り、胴
の腹面に廣き外套腔ありて、外界に通ず
之れ外套膜なり、噴水器云ふものなり
て、外套腔の排泄物及外套の周りより、
腔内に入る海水を吐出す、又此の吐出に
より、游泳の作用を司る、此動物は皆海
産なり、足は多くの吸盤を有し運動自由
なり、口には二個の角質様の顎なり且齒
を有す、肛門は外套腔内に開く、呼吸器

は一對の羽狀の鰓にして、心室は鰓と常
に同數なり、二鰓を有するものは二心室
を有し四鰓を有するものは四心室なり、
外套膜中には二個の瓣ありて、頭部にあ
る一瓣より水入り、漏斗の瓣より出つる
なり、感覺器はよく發達して、其中目は其
構造脊推動物と等し、血液は無色なり、
腸の傍に囊ありて、之れに黒汁を貯へ腸
の末端に其開口あり、もし敵の來襲に遇
へば此黒汁を吐出し、身をくらし逃げ
去るなり、

とかがるぬ(蜥蜴類) 其體圓筒形にし
て、四肢を有し、全身細かき鱗を以て蔽
はれ、趾端に爪あるものあり、又吸盤な
るものあり、肛門は横開して、多く昆蟲綱
を食す、有索動物門中、有脊動物綱中
爬蟲目の一類なり、

どうちるぬ(同柱類) 同柱類は、軟

體動物門中、辨鰓綱の一目なり、前後の
肉柱同形なり、あかがひ、からすびひ、
之れに屬す、

どうぶつぶんるたいべつ (動物分類
大別) 地球上のあらゆる、動物部類を
大別して二部類となす、一を有脊動物と
なす、二を無脊動物となす、

どうじよくぶつのかべつ (動植物の區
別) 生物は動植物の二に區分する事通常の
慣例なり、高等なる動植物に至ては、之
を區別する事極めて容易なるも、最下等
の動植物に至りては、古來生物學者の至
難とする所なり、動植物の進化せる今
日に至りても、尙明白に之を區別する事
能わさるもの多し、之を一般に適用す
る所の例を舉ぐれば、動物は一の感覺力
を有して、其體を移動す、植物は之に反し
て無心無感にして自ら移動する事能はず

然れども動物中にも亦他の物質に緊着
して、移動する事なくして一生を終始す
るもの亦多し、植物にありても、移動止
む事なく、動物も及ばざるの様を呈する
ものあり、然れども、食物の質及び之を
攝取する方法とによりて生する結果は
其區別の確定を現すを得べし、動物は
有機物質、植物は無機物を食とするに至
て明かなり、之を得る法に至ては自ら直
接間接の別あるものとす、

どうぶつちがく(動物地學) 地球上の
寒熱又は、形勢及深山、原野、河海等に
よりて、棲息の分布散在する區域を究む
るなり、

どうぶつけいどうがく 動物の交互の縁
類、諸動物等より、又特殊の異同を參酌
し大小に區別し、類似の類縁、諸部分等
を一系統に順序を立て、整列するを攻究

するものなり、

とがづがのほんね (動物學の範圍) 其範圍は極めて廣く、通常之を八種類に分別す、動物發生學、動物分類學、動物組織學、動物解剖學、動物形態學、動物生理學、動物地理學、動物化石學、なり動物學は専ら動物界に屬する事實、法則を講究するものなり、成長して現在生存する動物のみならず、今や發成せんとする者及び、生存せざる化石動物の如き、前世界の者をも考究するものなり、

とび(鳶) 鳶は、有索動物門中、有脊椎動物中、鳥目中、猛禽類の中、鷹科の一なり、眼鏡くして、銳利なる釣状の爪を有す、羽毛赤黄脚色灰青なり、能く鱧肉を嗜食するを以て、衛生上に有益の鳥とす、

とら(虎) 虎は、有索動物門中、有脊椎

動物中、哺乳目中、有胎盤哺乳類中、肉食科中、猫族の一なり、全身栗黄色に黒色の横斑を具へ、眼光閃々人を射り、口は耳邊まで裂け銳利なる牙を有す其性瘁猛にして南亞細亞の深林藪中に棲息し、人畜を害す、其毛皮は壯麗美にして價頗る貴し、

とががひ(蚪) 蚪は、軟體動物門中、腹足綱中、薄鳃類の一なり、河湖及び池沼に産す、殻は橢圓形狀にして、球色を呈せり、琵琶湖の産名あり、其肉は肥料に用ひて、宜し、

とりがひ(鳥蛤) 鳥蛤は、軟體動物門中、腹足綱中、薄鳃産の一にして、海岸に産す、最も瀬戸内海及び伊勢海等に多し、殻は、ばががひ、に似て、較大、外面淡黒色若くは灰白色にして、縦紋あり、管は短大赤黄色にして、脚は鎌状をなす、

肉は生乾共に美味なり、

とんぼ(蜻蛉) 蜻蛉は、節足動物門中、昆蟲類中、脉翅類の一にして、夏時多く産出する飛蟲なり、雄は青色にして、雌は褐色なり、其交尾せんとする時は、雄は先づ其腹端にある鉤を以て、雌の頸に狭み雌は腹部を屈曲して、其端を雄の腹部に在る、生殖器に附着せしめ以て、精液を受く雌は卵を水中に墜し、仲夏の頃に孵化す之を水蠶と云ふ、水蠶は一二回蛻皮して、水中を出で陸に上り、後ち其背面裂けて、蜻蛉を生す、一種馬犬頭は最大にして、全身綠色なり、紺攀は玄紺色なり、赤卒は其體小にして赤色を呈すと**なかひ(馴鹿)** 馴鹿は有索動物門中、有脊動物門中、哺乳目中、有胎盤哺乳類中、偶蹄科の中、麋鹿族の一にして、北極地方の人民は家養す牝牡共に角ありて

前後に分岐し終始更脱することなし頸頂に鬣あり、鼻頭に毛茸を生す全身灰褐色にして、冬日は白色に變ず、其産地は亞細亞及び歐羅巴の北部にして、土人は之を使役して、負重せしめ、又橇を引かしむ、

とこがし(鰻魚) 又なからみ、せんれんかび、軟體動物中腹歩類の一なり、南海に多く、北海になし、秋期産卵す殻は石決明と略は同じ形狀なりと雖、其大なるものは三寸許に過ぎず、

とでよう(泥鰌、又鮠) 泥鰌は、有索動物門中、有脊動物綱中、魚目中、圓口類中、鯉鰯族の一にして、形狀細長く口邊に十鬚若しくは十二鬚あり、背部は青黒色を帯び、腹部は灰白色を帯ぶ、全身に黒褐色の斑點あり、鱗は細小にして、粘液を分泌し、常に泥中に潜伏す、肉は

多脂にて美味なり、一種しまとちようなものあり、

とかげ(石龍子) 石龍子は有索動物門中、有脊動物綱中、爬虫目中、蜥蜴類に屬する動物にして、雌は背部茶褐色にして側部に各一條の黒線を有し、雄は雌よりも小にして、脊上に五條の黒線あり、其間には青色にして頗る美麗なり、其體細長く平滑なり、鱗形は細小にして薄き光澤あり、尾は脆くして挫折し易し、然れども再び生長するの性あり、舌は短少にして僅に口外に伸出することを得、夏月牆壁砌石の邊に生息して、昆蟲を食ふ、

とびつを(文鰩魚) 一名あびこ 文鰩魚は、有索動物門中、有脊動物綱中、魚目中、鰩魚族の一稱にして、體圓く且つ肥満せり、胸鰭は鳥翼の如くして、巧に海面を躍飛す、肉美ならず、鱸魚として、

各地に輸送す、

このさまかへる(金線蛙) 金線蛙は、有索動物門中、有脊動物綱中、兩棲 目中、無尾類蛙蛤科の一にして、背部綠色をなし、腹部は白色を呈せり、眼は圓大黃色にして固有の金色を帯ぶ、又背中には黒色の斑點及び三條の黃線之に縱走す、西人は其肉を嗜食す、漢土も亦之を美稱して田鶏となせり、金線蛙は、四月上旬に啓蟄し常に沼池水田の間に棲息し、十月下旬より泥中に蟄居す、

とらふね(花金鼠) 花金鼠は有索動物門中、有脊動物綱中、哺乳目中、有胎盤哺乳類中、齧齒科中、栗鼠族の一にして、常に地下に蟄居す、我國北海道に産す、毛皮は赤褐色にして、黒黃の縱線互に交雜し、頗る美麗なり、故に皮は世人の珍重する所となれり、

とげうを(棘鰭魚) 棘鰭魚は、有索動物門中、有脊動物綱中、鳥目中、硬骨類中、眞正棘鰭科の一にして、細小の淡水魚なり、脊鰭の前方及び腹部に鋭利なる棘あり以て、敵を追撃するの用に供す、性活潑にして子魚の爲めに意を用ふるの奇性あり、即ち産卵の期將に至らんとすれば雄魚先づ草木の鬚根莖葉等を蒐集し、之に皮膚より出づる粘液を塗抹して、水底に巢を營む而して其雌魚の交魚來りて産卵し、終れば雄之に精液を注ぎ後ち之を守護し、卵の孵化を待つ已に孵化して、一ヶ月許も経過したる時は、之を放棄して再び顧みざるを云ふ、故に一雌の産卵僅に百個に過ぎざれども能く繁殖するなり、

な の 部

なまこ(沙緑一名海鼠) 沙鼠は軟體動物門中、腹足中、芒刺類の一にして、體扁平軟滑なり、體面には多く癭瘻を生じ、背部は灰褐色、若くは茶褐色にして、腹部は其色薄し、又其匍行進退は全體を伸縮し、或は皮孔より、水管足を出して、體を移す、多く南海に産す、其皮肉は醋に浸し食するに頗る美味なり、

なんたいどうぶつ(軟體動物) 表面は、一對の石灰質の介殻より成り、其介殻不對にして、螺線形に回旋するものなり、其内部は柔軟にして、諸器官を具ふ、腹部に足と稱する肉質のものなりて轉移を掌る、又他方に二個の孔ありて、水は絶えず一孔より入り他孔に出づ、呼吸器は概ね鰓なり、消化器は、食道、胃、腸、肛門を具備せり、循環器中心臟最も發達し、血液は無色或は青色を帯ぶ、神經素

は腦、足、神經球、及び内臟神經球の三對より成り、體皮は外套膜となる、其生殖は雌雄異体にして、概ね水産なり、

なんこつるお(軟骨類)

骨皆軟骨より成り、體は扁平なるものと圓長なるものありて、口は頭の腹面に開き、鰓は五個あるを常とす、尾は平等ならず、其骨の軟きは蓋し生存競争の結果の然らしむる所にして、比重大なる水中に在りて、其體を支ふる必要より起りたるならん、

なまこるお(沙磧類)

體概ね扁平にして、右左相對の鰓を呈す、口の周圍には伸縮する觸手數條あり、五條の步帶中三條は腹に餘は背にあり、皮膚は石灰質の小片無數あり、皮膚の裡面には横行筋あり、又步帶には縦行筋あり、食道の周圍に水管あり、生殖器は枝状をなせる、管状物にして、雌雄異體なれども、稀に同

體なるなり、軟體動物中の一類なり、

なめくぢ(蛞蝓)

蛞蝓は、軟體動物門中、腹足綱中、有肺類の一なり、體細長くして柔軟なり、背部は、筋衣を以て包被する性温陰の地を好み、常に晝間は、此に潜伏して、曉暮に出で、植物を食ふ、故に園圃に害を及ぼすこと少なからず、之を防ぐには石灰若しくは硫酸鐵を砂に混合し、植物の周圍に散布すべし、(腹足綱或は腹步綱といふ)

なまげもの(樹懶)

樹懶は有索動物門中、有脊動物綱中、哺乳目、類中、有胎盤動物類中、貧齒類に屬し、圓顔短喙恰も猴に類似し、三趾樹懶と二趾樹懶の二別あれども、共に前肢は後肢より長くして、毎肢に各長大なる鈎爪を具ふ、肢の趾は皆三個あり、別は只甲に於ては、前肢の趾三個を有し、乙に於ては二個を有す

この部

にしきへび(錦蛇)

錦蛇は、有索動物門中、有脊動物綱中、爬虫目中、蛇類の一種なり、印度に産し大なるものにして、人畜を害す、其の皮は、三味線に張らる、

にさいるお(二鰓類)

二鰓類は、軟體動物門中、頭足類の一種なり、八個若くは十個の觸手を有し、又吸盤と黒汁囊とを有す、噴水器は完全なる管状なり、やりのか、たこ此類なり、總て海産の肉食動物なり、

にはとりるお(鶉雞類)

鶉雞類は、有索動物門中、有脊動物綱中、鳥目に屬する一科なり、嘴は、短くして鋭からず、體は肥大にして其體の割合翼短小なるを以て、飛翔巧ならず、三趾前面に向ひ一趾

のみなり、又三趾樹懶は三十二枚の肋骨を有し、二趾樹懶は、廿六枚を有す、共に全身茸毛を生じ、常に山林或は深澤に棲息し、其行歩は極めて遅々たるものなり、性遲鈍怯懦にして、好んで食物質を食ふ、二種共に亞弗利加熱帶地方の産なり、

此他一種、めがせりあむと稱する樹懶は、最大なるものにして、體の全長十八尺高さ八尺許ありと云ふ、

なめかぎめ(慰斗鯨)

慰斗鯨は、有索動物門中、有脊動物綱中、魚目中、板鰓類中、横口科中、鮫魚族の一なり、海底に棲息す、全身淡褐色にして、暗黒色の叉線あり、体小にして、好んで青魚を食ふ、効用は、皮は物を磨擦するに用ひ、肝は肝油として、需用多し、

後方にあり、地上を走ること巧に常に塵埃の所を掻き立て、餌を求む、此の類は、粗悪なる巢を地上に構ひ、雄は雌に比し羽毛美麗なり、きじ、にはとり此の類に屬す、鳥類に屬す、

にはとり(家鶏)

家鶏は有索動物門中、有脊動物綱中、鳥目中、鵝鷄類の一種にして、又有益鳥類中の最たるものとして、愛禽す、其大小形状には異同ありと雖も、概して雄は美麗にして、肉冠を戴き強大なり、雌は矮少にして文彩に乏し、其肉及び卵は滋養に富むを以て、世人の貴重する食品なり、本邦にて通常見る所のもの、地鶏、しゃも、矮鶏、をけっこ、交趾種、等にして、近來は、れぐほらん、ぶらま、すばし、みのるか、等の洋種を飼養す、

にしん(青魚)一名練

青魚は、有索動物

門中、有脊動物綱中、魚目中の一科、鯉魚族の一種にして、眼巨大にして、赤色を呈し、全身蒼碧色腹部に稍白色を呈す、肉は白色多脂にして、細刺あり、其味佳し、其鱗魚となしたるものは、肥料となし、其鱗を練籬と名く、北海道より多く産す、

にべ(鮓)

鮓は、有索動物門中、有脊動物綱中、魚目中の一にして、石首魚と同族なり、其體形も、亦能く類似すと雖、遂に大なりとす、頭部に二枚の耳石あり、其潔白なると玉の如し、其背部は淡綠色にして、腹部は銀白色なり、且つ腹中に白鰓あり、彼の膠は之れより製すべし、肉は贅となし美味なりと雖、鮓子には毒あるを以て、注意すべし、

ぬの部

めえ(鵝鷄)

有脊動物の一綱、鳥目の一種なり、羽毛黒斑あり、嘴は黄色にて大さ鳩の如く、大和の吉野山等に棲む、日中は伏して夜間に出て、食を求む、其鳴聲兒童の泣く聲に似たり、

ねの部

ねんしるお(撚翅類)

其雄は、兩翅を有し、前翅至て少く、末端は撚旋すも雖も、後翅は之と異にして、縦に疊收す、雌は三角状の扁平頭を有して、翅を呈せず、蜂類の腹部に寄生し、蛆状にして、無翅無脚無眼なり、節足動物門中、昆蟲目の一類なり、

ねずみ(鼠)

有脊動物の一綱、哺乳目に屬す、體毛淡黒色にして青色を帯びたり、眼黒く前爪四ツ後爪五ツあり、尾に毛なし、兔に似たるも稍小さし、多く人家倉

ねこぎぬ(虎頭鯊)

虎頭鯊は有索動物門

庫納屋等に棲み、物を嚙る、近來黒死病の媒介を爲すこと、市井に於ては、殊に之れが驅除に勤むといふ、元は是れ亞細亞の産にして、亞米利加に移殖せしは、實に一千五百四十四五年頃なりき、繁殖の速なること、哺乳類中第一位を占む生れて四ヶ月を経過すれば、子又兒を生むといふ、

ねこ(猫)

猫は、有索動物門中、有脊動物綱中哺乳目の中、有胎盤哺乳類中、食肉類の一なり、其形狗よりも小さく、人に馴れ易し、其毛色白、黒、三毛等種々あり、其性質眠りを好み能く鼠を捕ふ、極めて寒を恐る、其眼は朝圓く次第に細くなり、正午には針の如く細くなり、午後に至りて舊に復す、故に猫の眼を以て、時計に代へたりといふ、

中、有脊動物綱魚目中、板鰓類中、横口科の一にして、鮫魚族の一なり、其頭部猫面に似たるを以て、此名あり、全身黄褐色にして、黒斑を有す、齒は非常に強固に造られ、螺殻も能く咀嚼すべし、皮膚硬質にして刺を有す、

の の 部

のみ(蚤) 蚤は、節足動物門中、昆蟲綱中、微翅類に屬する小蟲なり、其體赤褐色にして、腹部は大、頭部は小にして、雌は雄より、肥大なり、人體に寄生す、蚤は其血液を吸収するものなれば、其害多し故に勉めて屋内を清潔にし、或はインセクトパウダーにて、之を豫防すべし、
のこぎりさめ(鋸鯨) 鋸鯨は、有索動物門中、有脊動物綱中、魚目中、板鰓類中の一目、横口類に屬する魚にして、體形

鯨魚に似たり、但し嘴は延長して、長刺左右に鋸齒狀をなして排列す之を以て、護身用となす、其前背鰭は腹鰭の前に位して臀鰭なし、又尾部には、舟底狀の隆起あり、此魚は胎生なれば、分娩するや、刺忽ち硬化す云ふ、

は の 部

はひねあみ(狸) 狸は性夜獸の類屬にして、好で鼠、蛙、昆蟲等を喰ふ、背部に棘毛を生じ、背筋の作用に依て之を起立するの性あり、以て強敵の難を免る、齒數三十六枚にして中央の二門齒殊に大なり、狸は農家には有益無害の動物とす、體は極めて肥えて、一尺許りあり、尾、脚、頭共に小さく全身に刺あり、常に林に棲む夜出で、蟲、果、などを食ふ、支那、又は歐洲産の獸なり、此屬十三種あり、

はごるゐ(鳩合類)

有脊動物中、鳥類の内なり、嘴の基部柔かにして鼻孔の周圍厚く、且膨脹せり、往々鼻孔に軟骨質の鱗邊を具ふ、翼は長大にして能く飛翔す、人に親馴するの性あり、其變種極めて多く、普く萬國に産す、肉は美味にして食ふべく、糞は善長の肥料と爲すべし、脚は細くして短く、樹上に棲み果穀を食物とする鳥類なり、

はぶさ(隼)

猛禽類、鷹族の一種なり、鷹に似て胸腹共に鼠色に赤みを含み、背腹共に斑文あり、横に褐色の彪あり、其性驚悍なりと雖も、其形態猛ならず、能く他の諸鳥を捕ふて之を食ふ、之を飼養して、鷹其他の諸鳥を捕ふる用を爲さしむ、

はせ(蝦虎魚)

棲底族の一種なり、細鱗褐色にして蒼黒色の斑紋あれども、判明

ならず、其大なるものは六七寸あり、四月頃産卵す、雄魚之を護りて孵化するまで去らず、爲めに大に體軀は疲瘠すと云ふ、河口の海底に群居して、常に昆蟲を捕へ喰ふと云ふ、こちに似て小さく口廣く、食用に供して肉味美なり、甚だ淡泊なり、

はりがねむし(鐵線蟲)

蠕形動物線蟲類の一種なり、其の體の細長き事針金の如し、故に此名あり、幼時は昆蟲類の腹中に寄生し、成長すれば自ら水中に飛出して老成す、口に隆起なし、諸蟲又諸鳥の腹中に寄生するも、殊に蠐螬の腹中には多く寄生するものなり、

はんすつゐるゐ(反芻類)

此の類は一度食物を嚥下するや、數個の胃囊を通過するものにして、又一度嚥下したる食物を再び口中迄出して、嚥むものなり、即ち初

め第一囊に食物を貯藏し、又それを再び口中にもどして咀嚼す、第二囊に下し此に於て第三囊に送るなり、而して後漸く第四囊に入り、茲に初めて消化する物なり、脊椎動物に屬して、有胎盤哺乳類なり、趾は多くは四個なり、各蹄を具ふ、其狀恰も單蹄の割裂せるもの、如し、中央の二趾就中強大なり、故に大に歩行を主とす、兩隣の二趾は短小なり、後部に副生す、之を懸蹄と云ふ、掌骨及び蹠骨は各二箇ありて、相結合す、以て單骨を爲す、之を主骨と云ふ、腹管は凡て長大なり、又齒列の特異なるは消食器の構造に譲らず、牛羊等の如き真正の反芻類は上顎に門齒なく、硬疣之に代り、犬齒なく、左右各六個の臼齒を具ふ、又下顎の前面に密生せる八齒中、其中央の六齒は門齒にして左右の二齒は犬齒なり、臼齒は上

顎のものと同數にして之と犬齒との間に廣濶なる差隙を存す、
はいぎよるぬ(肺魚類) 内部の構造頗る兩棲類に似て、鰓と肺とを有す、皮膚には鱗なければならず、兩期には魚の如く水を呼吸し、枯燥期は肺にて空氣を呼吸す、只四肢の形魚類に似たるを以て今日には之を魚類に編入せり、熱帶地方の大河に産す、其狀甚だ兩棲類に似たれども魚類に屬す、其體魚の形なる頭骨及び下顎骨を呈すれども、背索は遺有して、椎骨に椎體なく頭骨に髁狀突起なし、鱗は皆角質圓滑にして、其排列の狀は常の魚と少しも異なる事なし、胸と腹の二つの鱗は種屬によりて或は細長なる細狀を爲し、或は橈足狀を爲す、二個の鼻乳口中に開達す、尾は正形なり、心臟は二心耳一心室より成り、各二枚の呼吸器を所有す、上

下兩顎に各一對の臼齒を具へ又上顎の前方に二個の小齒を生じ、其形ち及び大小は種類に隨ひて異なれども、臼齒は必ず多少の突起を有す、

はりせんぼん(蝟) はりせんぼんは、有素動物門中、有脊動物魚中、綱目中、硬骨類の一なり、全身の表面には棘を有す、口小にして、毎顎に一齒を具ふ、空氣を含み、食道を膨脹せしめ、全身を球形にすを得、斯くすれば、刺直立して、觸るべからざるにより、敵の攻撃を防ぐに妙なり、其狀はりねづみに似たり、

はなせせり はなせせりは節足動物門中、昆蟲綱中、鱗翅目の中の一なり、翅小にして體軀比較的に大なり、多く花間に徘徊し、翅は茶褐色にして、白點あり、幼蟲を「はまくりむし」と稱す、稻を害すること甚し、

はなせせりは節足動物門中、昆蟲綱中、鱗翅目の中の一なり、翅小にして體軀比較的に大なり、多く花間に徘徊し、翅は茶褐色にして、白點あり、幼蟲を「はまくりむし」と稱す、稻を害すること甚し、

はいとりくも はいとりくもは節足動物門中、蜘蛛綱の一なり、詳細は「くも」の條につきて参照すへし、

はちうるぬ(爬蟲類) へび、さかげ、わにの類其重なるものにして體形は長く四肢を有するものなり、或は之を欠くものあり、頸部殆んど判然たる區別なく、又尾部と胴部著しき相違なし、尾は概ね同形なり、體面一面に鱗を以て蔽はれ、其鱗は角質にして、觸覺鈍く多く扁平なり、之れ皮膚の上層變化したるものなり、而して皮膚には汗線、脂線あることなし、へびの如きは四肢なきを以て、肋骨及筋肉の助けにより、この鱗自由に運動し以て進行の作用を司る、骨格は骨硬く頭骨と第一椎骨とは關節面を以て連接す、心臟は一心室、一心耳より成り肺より來る血液と體の諸部より來る血液と相混す、然

れどもかくぎよ類の如きは二心耳、二心室より成るを以て靜動の血液相混するをさなし、此類は腦髓極めて小にして鳥類などに比すれば、其智力杳かに劣れり、概ね卵生にして卵を土中に産し、太陽の熱により自然に孵化せしむ、蓋冷血動物なればなり、而して此類は肺を以て呼吸し、鰓なし、多くは熱帯に産す、此類を分ちて鰐魚類、龜類、蜥蜴類、蛇類の四とす、脊椎動物の二類なり、

はちせんのるゐ(八腕類) 八觸手を有し皮肉中に細小なる殻あり、軟體動物にして頭足類中の二腕類に屬す、八觸手は形状同一なり、口は二個の強き角又は石灰質の腮及び擔齒舌を包める窩内に通す、其擔齒舌の後部に在る齒は皆後方に屈曲す、其窩は唾腺を備ふる會道に向へて口を開き、順次に胃腸に通じて肛門に終り、肛

門は漏斗口内に開口す、漏斗口は頭部と腹部との間にある筋肉質の短管なり、一端は外套膜内に開き、他の一端は體軀の外面に開く、然れども、たこの漏斗口は管状を爲さずして只二個の筋肉相接触して、管形を爲したるのみ、又外套膜内には黒汁を分泌する囊を有し、外敵の侵掠をふせぐ、呼吸器は羽翼狀腮なり、體側にあり、雌雄の別ありて皆卵生なり、

はうしちうるゐ(胞子蟲類) 寄生蟲にして、其體面は極めて薄き被膜にて覆はれ而して胞子を生じて繁殖するものなり、被膜を有すれども、纖毛又は鞭毛を有せず、此類は皆な寄生の働によりて、植物の種子に類する胞子を生じ、増殖するものなり、内部は核を存するのみ、原蟲に屬す、

はいごら はいごらは、海蛇類の一にして、管状なり一端は物に附着し、他の一端は

五本以上の觸角及び口を具ふ、口は直に體腔に開き體腔は消化作用を爲し食餌の不消化物は口外に排出す、小動物の觸角に觸るゝときは直に屈曲して口中に送致す、色は褐色又は綠色なり、是植物に含有する葉縁を稱するものを含有するが故なり、はいごらは池沼溝等の淡水中に産し、水草等に附着す形體頗微小なりといへども、顯微鏡にあらすして、肉眼にて、見ることを得べし、其生殖早し、分體法又は出芽法に因るさいへとも、又卵又精虫を生じ、有性生殖をなし、又は躰軀を分斷するも各片は再び完全のはいごらとなるべき是なり、此蟲の最も奇性とする所は、如何に躰軀を寸斷にして、之を殺さんとすると、其寸斷分切せし片

々は再び完全の、はいごらとなるべき是なり、故に刀類を以て之を殺さんと分切するは却て之を繁殖せしむるものなり、

はも(海鰻鱺) 海鰻鱺は、鰻族の一種なり、皮膚は粘滑にして、脊は青黒色、腹は白色を呈す、口は大きく口内に鋭齒を生じ腮孔小なり、眼又大きく、其肉佳味なり、本邦にては攝、泉、等の海中に多く産す、其形ち鰻鱺に類す、全身通常三四尺、稀には七八尺に至るものあり、此の魚は其性猛烈にして、よく人を咬む、肉に小骨多く、上等の料理に用ふ、

はぶ(飯匙) 飯匙は蛇類の一にして、有毒なり、全身灰褐色にて、背、腹共に、黒紋を具へ、其身五六尺あり、其毒極めて激烈なり、常に大木の上において人を見れば躍落して之を咬む、産地は琉球、大島等なり、皮は三絛の槽に鞘すべし、

頭首平にして、飯匙の如きが故にこの名のある所以なり、全身鮮黄色にて黒斑あるものを金飯匙といふ、本種の變生なり寒國には餘り居らず、概して暖國に多く棲息す、有毒なるを以て、人齧まるれば大抵死す云ふ、

はつかねすみ(齧鼠) 齧鼠は齧齒類中鼠族の一種なり、地球上人の群居する所殆んど居らざるはなし、體は灰黒色にして、腹部は稍淡白なり、尾は舐の長さと同ふす、其の子生るゝや、始めは明を能くせずして裸生す、全蹠裸出す、

は(齒) 齒は總て動物の口腔内にありて、大抵上下二列より成る、消化器の最初の器械なり、今人類の齒につきて説明せんに、上下各十六枚より成り左右平等に相並へり、其の形狀及官能につきて四種に區別することを得べし、

はまごり(文蛤) 軟體動物中、薄鰓類の一なり、殻は蛤仔に似て黒色、若くは褐色の斑點あり、其外面は滑澤にして光輝あり、肉は生乾共に食し甚だ美味なり、碁石に似たるものあり、之れを碁石文蛤といふ、其殻碁石に似たればなり、多くは淺海の汀沙中に棲息す、其大なるは三四寸に達す、賀意を表するを以て、婚禮の儀式には必ず之れを用ゐる、參州の産尤も名あり、

はくちよう(鵝) 一名天鵝 有脊動物中水禽類の一日、扁柴類に屬す、羽毛潔白にして光あり、額部黄赤色に嘴脚共に黒色なり、頸長し羽は甚だ柔軟なるを以て胃寒の用となし、又は服飾に製す、其翼はハシ先を用ふ、喙の本に赤き瘤あり、肉には脂多し、味佳美なり、

は(蠅) 蠅は連環動物双症類の一なり、

其卵子は食物に散布し、孵化する時は蛆變じて蛹となり、又變じて蠅を生ず、四月頃人家に來り厭忌せらる、其種類極めて多し、

た(獾一名封豕) 獾は哺乳動物奇蹄類の一種なり、性溫柔にして人に馴れ易く池沼邊の深林中に群居し、夜間出で、木葉果實を食ふ、南亞米利加、及び亞細亞の産なり、亞細亞の産は、全身黒褐色にして、廣濶なる白斑背腹を包繞す、すまさら、ぼるれを等に産し、亞米利加獾の如く鬚を有せず、此動物の鼻は延長して恰も象鼻の如く屈伸自在なり、門齒六六犬齒七六にして前肢に四爪を有し後肢に三爪を具ふ、皮膚は柔軟多毛にして尾は極めて短少なり、其形ち象の鼻、犀の目、牛の尾、虎の脚、全體は熊に似たるものなり、

はらめーしあむ そりむしの項を見よ、
はんもくるね(攀木類) 樹木に攀縁する事尤も巧みなり、四趾の内二趾は前に向ひ二趾は後に向ふ、之を攀木類と云ふ、飛力は低度なり、常に巢を樹上に營む、好で昆蟲を啄食す、此の類を大分すれば鸚鵡族、杜鵑族、喙木鳥族等なり、

は(さ)いるね(薄鰓類) 軟體動物の一種なり、淡水又は潮水に棲息す、双殻にて體軀を包む、呼吸は常に薄葉狀の鰓にてなす、頭部と體部との區別なし、脚は筋肉質にして體軀の側面より凸出し、之に依りて能く水底に匍匐跳歩し、又は沙泥中に穿ちて之に入る、大概雌雄異體なり口には齒なしと雖も其兩側には二個の膜質唇あり、之を觸唇とも云ふ、膜質唇は口中に物を入るゝ用を爲す、卵子は母體中に於て孵化し胚子の産出したるものは

纖毛を以て能く水中に游泳す、魁蛤、文蛤、蛤仔、牡蠣、おほのがひ、海扇、玉珪、璋、螺、蜆、えんじゆ、ひ、竹、蟹、ば、が、ひ、と、り、あ、ひ、淡、菜、等、之、に、屬、す、

はち(鳩) 有脊動物中鳥類の内の鳩鴿類なるもの、小頭短頸なり、嘴は軟弱なり、末端は軟弱なり、翼は長くして尖れり、後趾は短くして歩行自由ならず、樹上に棲息す、羽力極めて速かなり、胸は高かし、羽は紫色を帯びたる藍色を常とす、鼻孔の周圍至て膨大なり、好みて豆を食す、種類多し、食料に供するを得、

はち(蜂) 節足動物、昆蟲類中の膜翅類なり、六脚二翅の蟲なり、口は固き物を咬み、又流動物を吸収するに適す、左右の複眼の間常に三個の單眼あり、雌蟲は腹端に産卵管を呈す、尻に螫なり、物を刺して其害を防ぐ、其巢は樹枝又は物に

懸りて作る形も蓮の房を削にしたる有様なり、種族多けれども、普通ハ蜂は足つるしと云ふものなり、此種類は常に飛翔する場合に於て足を乗するものなり、黄黒兩色のものなり、頭、胸、腹部の下部には三對の足を有し、上面側部には二對の翅あり、翅は無色透明なり、家の軒の下に巢を作る、巢の中に産卵す、卵子は穴の底に附着す、親蜂の持ち來りて與ふる餌を食して成長す、子に與ふる親蜂の持ち來る餌は種々の花より蜜を吸ひ取りて、胃の中に溜め置き、巢に來りて之を吐き出して子に與ふ、蜂の子は自由動く事なし、體は節より成り、頭と口とあり、常に巢の穴の中において親に養はる、充分に成長する時は、細糸を口より出し穴の入口の縁に蓋を作る、蓋を

作りたる後蛹に化す、漸次變化して成長し、蓋を破りて飛出で親蜂同様の完全なる形となる、孵化して親蜂と爲るまでに二回全く其形を變ず、此の形の變化を稱して發育と云ふ、子の時と親となりたる時とは全く其形を異にするを以て變體と云ふ、其變形する時々を稱して、初めの子蟲と云ひ、子蟲變形して蛹と爲り、蛹變して親蜂となる、即ち成蟲なり、發育に三段階級あり、

はち(葉捲蟲) 節足動物門、中昆蟲綱の一なり、葉捲蟲は樹葉を捲きて巢を作るよりこの名ある以所なり、巢の形狀には種々あり、一葉を捲けるあり、一葉の部分捲けるあり、數葉を捲き集めて作るものあり、此巢は一個の幼蟲の作れるもの最も多し、然れども數個の幼蟲協力して一個協同の巢を作ることなし

せず、葉捲蟲の種類異れば、各特有の形狀を有せる巢を作り、又各一定の種類樹葉を害するものなれば、唯その巢のみを研究して、其蟲の一斑を知ることを得べし、葉捲蟲が巢を作るには、先づ絹絲の帯によりて、思ふ位置に葉を折り、疊み、後之れを完成す、

はち(葉堀蟲) 葉堀蟲は節足動物門中、昆蟲綱に屬す、二翅類及び甲蟲類中にも其幼蟲が、葉堀蟲に屬するものなきにしもあらざれども、葉堀蟲の多數は殼蛾科に屬する小蛾の幼蟲なり、葉を食ふ幼蟲には、極めて微細にして、好んで葉の中に棲息し、葉の上下及び兩皮間の空隙を以て、住家及び牧場に當て尙充分の餘地を有するものなり、かゝる方法を以て生活せるを以て、葉堀蟲と名づく、

晩夏秋季の間、殆んど何れの灌木、喬木、にも白色若くは灰色の瘡のため或は屈曲せる長線の爲めに、多少失色せるものあるは、即ち葉掘蟲の爲なり、この屈屈線は之を葉掘蟲の隧道といふ、この隧道を三種とすることを得、

(一)線狀隧道、細長にして多少彎曲せるもの、
 (二)蛇狀隧道、其の形蛇に似て、末端は次第に膨大し、恰も蛇の頭の如き觀をなす、
 (三)喇叭隧道、狀態恰も喇叭に似たるを以てなり、

むつた(飛蝗) 節足動物門中、昆蟲綱中、直翅目の一なり、青き保護色にて蝗の如く、後脚は頗る長く、跳躍するに適す、翅は直にして強く、飛行するに堪ゆ、水田に害をなすこと大なるを以て、農夫は

之れを驅除するに勤む、體は蝶、蛾、蜂などと同じく、三部分より成る、即ち頭、胸、胴なり、頭の頂上の左右には、大なる眼を具ふ、附近に觸角あり、胸部には三對の脚あり、背部に二對の翅あり、其飛ばざる時には、前對の翅は後對の翅を蔽ひ居るなり、

はんめう(斑猫) 節足動物、昆蟲類にして直翅類なり、灰黑色にして二本の觸角を有す、六本の足あり、身に赤と黒との斑あり、大に毒氣を含めり、薬品となす、はくむし はくむしは、節足動物門中、昆蟲綱の中、彈尾目の一なり、

はりしつかいめん(玻璃質海綿) 玻璃質海綿は、多竅動物門中の一目なり、體質透明にして淡白色なり、恰も玻璃に似たるを以てこの名あり、例へば、ほつすがい、偕老同穴の如き是なり、

はつとやるゐ(八射類)

八射類は腔腸動物門中の一綱、珊瑚綱の一に屬す、「あかさんご」、「うみまつ」の如き是なり、「さんご」の部を参照せらるべし、

はつせい(發生學)

發生學は、動物の數回の變態を経、數年月數日時を過ぎて、卵又は幼蟲より成體となるに至るまでの順序を研究するの學なり、而して此を更に區別して、系統發生學及び個體發生學の二とす、

系統發生學は、其動物が如何なる祖先を経て、現動物となりしやを考究し、個體動物學は、一個の動物が自然又は人為の如何なる理によりて發生成長するやを研究するの學問なり、

はんさい(板鰓類)

骨格は總て軟骨質なり、腹鰭は肛門に接近す、尾鰭は不正形なり、脊骨は尾の上半に延長す、鰓

房は數多の小房子に分かる鰓葉は隔壁の兩側に附着す、小房の内側は、特に咽頭に通じ、外側は體面に開在せり、鰓孔は通常一個以上なり、鱗は骨質なり、瘤狀又は刺狀を爲す、皮膚上に散布す、心臓は一心耳、一心室より成る、卵は大なれども少くして或は子高狀の腔胞中に孵化す、腸は甚だ短し、板鰓類を、大口、大頭、の二小類目とす、

ひの部

ひきがへるぞく(蟾蜍族) 無尾類の一族なり、四肢長短相協ひ、後肢の趾間には半ば蹼を張れり、其體頗る肥大、游泳は躍は之をなすも極めて巧みならず、皮膚にある所の多くの疣より惡臭液を分泌す常に陰濕地に接息す、夜間出で、食を求む、

ひぜんのみし(疥癬蟲)

壁蝨類の一なり、其體軀微小なり、扁圓形なり、頭部には墊を具へ以て皮膚内を穿ちて通路とす脚短し、雄は雌より其形小なり、此蟲の人體に生するときは、皮膚粗惡を極め透明の小胞夥しく凸起す、顯微鏡にて此小胞の内容物を見るときは必ず一つの疥癬蟲を見出す事を得べし、獅子、狗、牛、馬、家鶏等にも寄生して發病せしむる事あるべし、

ひれんじやく(緋連雀)

ひれんじやくは有脊動物中、鳥類、鳴禽類の一なり、樹上に棲息し、脚は短く、體色美麗なり、世人之れを籠に飼ふて愛現す、

びろくどく(糜鹿族)

反芻類に屬する一族なり、其體軀極めて美麗なり、牡は額上に角を有る、毎歳交脱し、年を経るに従て其大きき枝とを増加するの性なり、

角は骨軸を擁せず、初生の時は皮下にありて、柔軟なる瘤状をなす、其形状茄子の如し、之を鹿茸と云ふ、眼には劇具を有する蠟損物を分泌する涙竅あり、齒數三十四枚あり、此類各地に産す、

ひらめ(比目魚)

有脊動物中、魚目族なり、暗黒色の片面に雙眼あり、白色の片面には一目もなし、海底にて白色面を下にし、暗色面をよして居るものなればなり、幼時は兩面に一個つゝ、眼を具ふる事他の魚と異ならず、成長するに従ひて白面の眼は漸次黒面に移轉す、其肉白くして淡味なり、

ひこでるゐ(海盤車類)

體扁平にして五腕なり星形なり、口は下面の中央にあり水管の體外に出て、運動を司るは只腕の腹部にあるもののみ、此類は海底に住みて貝を食す、今一個のひこでるを探りて

其の胃を見るに胃中に數多の殻介あるは其貝を食する殻介をも悉く丸谷とすればなり、されは貝を飼養する所には大なる害をなすと云ふ、棘皮動物に屬す、全體は體盤と腕とより成る各腕の腹面に溝あり、體盤の中央に向ふて延長す、足は主なる運動器なり、其末端に吸盤あり、口は各溝の輻集せる處にあり、肛門は之に反對せる方向に開在せり、體の腹面は極めて堅固にして、背面は柔軟なり、腹面に板状を爲したる石灰質物が並列す、石灰質に富みたる棘状突起を發生す、上皮は突起して鋏刀形の小體となる、之は皮膚上に集るちりを除く作用を爲す爲なり

全體は放射形のものなり、腕と體盤と大に小甚だ異同あり、肝臓と生殖器とは、腕内にあり、腕の腹面に深き溝ありて之れより吸足を發生す、

びしるゐ(微翅類)

前翅後翅共に不完全なり、四ヶの細鱗状を成す、口は吸收するに適す、體軀は肥大なり、胸部に六本の脚ありよく跳行し又よく人體に寄生して血液を吸收す、頭部は極めて小なり、昆蟲の一種なり、其色赤褐色を呈す、雌は雄よりも大なり、人體を齧して血を吸ふを以て、大に惡むへさ蟲なり、狗、猫、栗鼠等にも寄生するものなり、

ひるゐ(蛭類)

蠕蟲類の一目なり、皮は柔軟にして、刺毛を生ぜず、體の表面に横條線あり、口は前端にありて物に吸着す、之を口吸盤と云ふ、尾端に圓形の吸盤を具ふ、腸あり、血管ありて、赤色又は無色の血液を循環せしむ、淡鹹水に生す、又稀には陸上に産するあり、魚類の體面に寄生する者多し、體軀稍々扁平なり、口には全く齒を生ずる事なきも、

或は三個の咽頭齒と稱するものを具ふ、雌雄の生殖器を兼及するものと異體のものもあり、

ひによろぎ(泌尿器) 體中諸機能の作用により生ずる老廢物即ち尿を體の外部に排出するものを云ふ、高等動物の腎臟端蟲の水尿管成は關節器等是なり、

ひふ(皮膚) 體の外面を覆ふものは皮膚なり、其働きは呼吸を常に感覺機能を營む、體軀を保護するものなり、構造の微細なる所は極めて複雑にして數多の附屬器官を發達せしむ、甲殼、介殼、鱗羽、毛、髮爪及び各種の諸腺等は皆此の皮膚より生ずるものなり、

ひまろそそぎ(皮膜組織) 體中諸腔の裡面及び外面を覆ふ所の細胞層を云ふ、圓筒状には扁平の數層又は一層に接着して排列す、皮膜は表面に纖毛を簇生し又

堅硬物質を泌出して、薄層を生ず、

びぢ びばは、兩棲類の一種なり、其の卵は母體の體面に附着して、成長の後獨立す、前肢の趾端は吸盤を有す、

ひんしるお(負齒類) この種のものには總て熱帶地方に産し、齒を有することなく、又これを有するも、夥しく不完全にして、珐瑯質なることなし、ありくひ、なまけもの、せんさんかうの類なり、脊椎動物にして有胎盤哺乳類に屬す、胎盤動物中、最下等のものなり、齒形管状なり、成長不斷の質あり、年を経るも更脱する事なし、齒根齒冠の區別なし、門齒及び犬齒は大概なし、珐瑯を有せず、鎖骨存在す、各趾に強大なる銳爪を具ふ、之にて樹木に攀緣す、又土壤を穿に便にす、植物質又は昆蟲類を食す、其性痴癡なり、

ひやう(豹) 豹は食肉類中猫族の一種なり、

り全身黄赤色にして黒褐の錢斑あり以て虎と區別す形體も虎より稍小なり毛皮は柔軟にして價貴く世人に用ひらる産地は亞非利加及西南亞細亞とす、

ひりう(飛龍) 飛龍は爬蟲類中蜥蜴類の一にして全身綠色なり假肋骨の邊より長骨を出し薄膜を以て連綴せること魚鱗の如し此の飛膜を使用して空中を飛行すること鼯鼠の如し大さは約一尺あり爪哇島に産す、

ひこひ(金鯉) 鯉の項を見よ

ひひ(狒々) 狒々は、狹鼻猴類の一種なり、全身橄欖色を帯び、頬暎及潤大なる臀疣を有す、眼藍色にして、鼻頭紅にして、黄色の鬚鬚を生ず、身長五尺に達し、性質最兇暴多力容貌醜惡なり、亞非利加に産し、深林中に群居す、

ひよどり(鶇)白頭鳥 白頭鳥は鳴禽類

の一目、ひよどり科の一なり頭上に白毛あり尾は長く脚細く體は蒼灰色にして腹下のみ灰白色なり雀より少しく小さく常に群飛す鳴聲啞しく好んで木實を喰ひ其肉は美なり、

ひむかり(腐尾蛇) 腐尾蛇は無毒蛇類の一なり體は灰褐色にして深黄色の黒點あり烈しき毒を有しこの毒に中るものは即日死すさてこの名の起る以所なり蓋し誤説ならん、

ひくひり(食火鷄) 食火鷄は走禽類中馱鳥族の一種なり頭部は裸出し蒼色を呈し羽毛黒く頭上に角質の突起あり領下に赤色の肉瓣を垂る全形は馱鳥に似たり印度に産す、

ひつじ(綿羊) 綿羊は反芻類の一綱洞角族の一種なり、性怯懦溫和にして、能く事に堪ゆ、體毛は柔軟縮縮す、所謂綿毛

と稱するものはなり、羅紗を織る原料とす、肉は消化し易く、且滋養多きを以て食料として良し、種類は、めりの一種、りんころん種等あり毛質はめりの一種最宜しとす、

ひる(水蛭) 水蛭は蠕蟲類の一なり水中を匍行し或は游泳す脊面に縦槽の條文あり河川池沼滯濼等に産す其性善く血液を吸ふが故に療用に供す、體形扁平なり、前端の口に三枚の顎を具ふ、肛門は體の後端の背面にあり、肛門の後の方にある、數節は合一して吸盤となる、先端の背面に數雙の目あり、雌雄同體なり、箱根日光の山中にあるものを、やまごびると云ふ、みず類と水蛭と異なる所は、其粗毛及び疣足を有せざる事と、吸盤を具ふる事等なり、

ひどり(天鵝) 一名告天子、天鵝は鳴禽

類中厚嘴類の一種なり、翕羽黃灰色若くは灰褐にして、翻邊暗色を呈するが故に、全身褐色の小斑を具ふるもの、如し、三四月の頃、天氣清朗の日には噴々の聲を發し、或は飛揚し或は落下す、其の肉食ふに堪ゆ告天子といふは、蓋し飛び上るより名けしものならん、

ひぐら はいごらの項を見よ

ひめあかたては(姫赤立羽蝶) 姫赤立羽蝶は、節足動物門中、昆蟲綱中、蝶類に屬す、あかたては蝶に似たれども、稍小形なり、其の後翅の裡面には二個の眼點あり、幼蟲は、薊、鼠薊草、及び之れに類する植物を食ふ、

ひしむつた(菱羽蝗) 菱羽蝗は節足動物の中、昆蟲綱の中、直翅目の中、蝗蟲類の中、蝗蟲科の一なり、體形は胸背邊は遙に後方に、突出して、翅上を蓋ふこと

小屋根の如く、數々腹部の末端を過ぎて、長く突出せることあり、此の昆蟲にありては、前翅は粗糙の小鱗状をなし、後翅は、前胸背片に因りて、保護せらる、この蟲は普通に、低濕の地、若くは、溪流の岸邊に生活し、溪流の溢るゝときは、全く水流に洗はるゝ平坦なる、低岸にして、小礫多く、草木少なく、若くは全く、草木なき處を好みて生息す、體色は土色の異なるによりて、同じいらすこといへども一般に保護色を有す、

ひむつる(避日類) 避日類は、節足動物中、蜘蛛綱中の一なり、日光の當る所に生息せざる故に、この名あり、

びんごう(尾索動物) 尾索動物は、頭索動物、有脊動物と、相對立して、有索動物門の一種なり、此の動物は、海底の砂中、或は、木石等に附着し、少し

も動くことなく、一見したる所にては、直ちに、動物なりや否やを判定するに、苦しむ、外皮は硬くして、獸皮の如く、體の一端は他物に附着し、他の一端には、二孔ありて、水はその一の孔より入り、他の孔より、出づる装置なり、體の内腔は、多く籠狀にして、その周圍に、之れを圍繞する所の一の腔所あるを見る、是れ魚の圍腮腔に相當するものにして、水は甲腔處より、籠狀の孔を通して、乙腔處に入ることを、恰も魚類の水を呼吸するに、同一の作用をなすものなり、喉頭の下端は、細き食道に通じ、膨脹して、胃となり、再び、彎曲して、斜に、上行し、圍心腔の一部なる、排泄門に入り、出水門を開く、神經は、口と排泄門との間に一點の神經球あるのみ、心臟は、

腹管の下に位す、此綱の動物、雌雄同體にして、兩生殖器は、胃の近傍に位し、之より細芽を發し、腸の圍臑腔に開く、側に於て、排泄門に開孔す、其の生殖には二様あり、一は有性生殖にして、他の一は出芽なり、卵は、分裂して、蠅斗に類する、幼兒を生ず、其形状は、體の前端に、裂孔ありて、是より大なる臑孔となり、其末端より短き、腸を發し、肛門に終る、又體の中央を貫通して、脊索あり、その脊面に、神經あり、前端は膨脹して、腦となり、其中央脊面に、一個の祖字を具ふ此の類に屬するものは、例へば「ほや」、「さるば」の如き是なり、全く他の頭索動物及び、有背動物と、異なるもの、如くなれども、其初期に於ては、相近似せるものなり、
この綱を分ちて、「サルパ」類及、海鞘類

の二綱とす、之れを更に分ちて、左の如く細別することを得、
サルパ類は、紐筋類及び環筋類とし、海鞘類を、分ちて、四種とす、曰、有尾海鞘類、單海鞘類、複海鞘類、サルパ狀海鞘類是なり、

ふの部

ぶゆ(蠅) 節足動物門中、昆蟲綱中、蠅科の一なり、幼蟲の時期は、斷崖を奔れる水中に住む、稍成長するに従ひ、長靴狀の繭を作り、其中にて蛹時代を過し、其繭は幼蟲の生活せる岩に、固着す、其卵は帶黃色、若くは、帶褐色にして、幼蟲の生活せるところに團塊をなして存す、成蟲時代には翅を生じて空中を飛行す、其狀恰も蠅に似て少しく小さし、
ふくそくるぬ(腹足類) 軟體動物にして

一個の螺旋狀の介殻を有す、石灰質にして、圓錐形をなし、外套膜の分泌より成るなり、而して此介殻の尖りたりたる最も太き部分にして、漸々口縁の方に增長するものなり、而して其中央の尖端は所謂成長線なり、此の殻に左巻と右巻とあり、頭部の前端に口を開き頭上に一對の觸角ありて、其尖端或は基底に一雙の眼を具ふ、足底と稱腹部は扁平にして、伸縮自在の筋肉より成り、平滑にして物に吸着し、波動を以て前進す、生殖は雌雄同體なるあり、異體なるあり、卵生にして母體內にて孵化發生するものあり、神經は三個の球ありて、感覺器は聽、觸、視、嗅の四宮あり、消化器は口より肛門迄稍屈し、肛門は右側にあり、又後部に開くものあり、心臟は一竇一耳にして、水中に住むものは、臑にて吸呼す、然れ

ともかたつむりなどは肺を以て吸呼す、軟體動物に屬す、

ぶろとぶてるす 肺魚類にして亞弗利加に産し内部の構造は魚類に類似す、其水なき時には肺にて空氣を吸呼し水ある時には臑にて水を呼吸す、

ふくさいたうどうぶつ(複細胞動物)

數多細胞の複雑なる團結體にして、細胞間の分業なる作用は、諸器官を成し、依りて以て全團體を存立生活せしむ、原蟲類の一なり、卵子の成熟に近づくや、其卵子精蟲と合體し、間接分割によりて二個となる、遂には多數の細胞となる、かへる、の卵子の説明、此の卵子は黒白の兩極を分別す、動物性極は黒色の極なり、卵子水中にありては常に上に向ひ、灰白色の極は、植物性極あり、而して下に向ふ、卵子は粘膠質に圍繞せらる、水中に産み落さ

れ、而して水中にて精蟲に逢ひ、後ち分割に達する、其初めに分割する模様は、黑白兩極なり、第二の模様は矢張黑白兩極なるも前者と直角を爲す、第三の分割模様は之と異なり、前二者に直角を爲す、兩極の眞中にあらずして最も動物性の極の方に近し、八個、異大の細胞を生育す、一極にある四個の細胞は互に同大にして、他極の四個とは必其大きさを異にせり、後は、皆前同様の分割によりて、最初單一の細胞たりし卵子は數多の細胞と成る、動物性極の細胞より植物性極の細胞は稍大なり、分割歩を進むるに従ひて、植物性の灰色部分に減少す、其減少一定の時には境界も亦判然す、此の際に於て卵子の中心を切る時は、其觀内外二層より成る、其細胞は小なり、其内大なる細胞ありて、球の内容をなせども、其一部は全く空なり、

中空二あり一は外界に全く關係なく、一は外界に通ず、外界に通ずる空を原腸と云ひ、通ぜざる空を分割腔と云ふ、
ぶらなりや **ぶらなりやは** 蠕形動物門中、扁蟲綱の一なり、清き淡水に産し石塊等の表面を匍匐す、往々井戸よりも出つることあり、體は扁長形にして、頭部に一對の眼あり、體の全面にある、纖毛を用ひて、進行す、運動靜なれども、速なり、山間の溪流に、鳥の屍體等を浸し、置くときは、多數集りて、其血を吸ふ、口部の構造は、吸收に、適せり、
ふみどり(文鳥) 文鳥は鳴禽類の一種にして體色灰色なり、本産は東印度なり、好んで昆蟲を喰ふ、吾邦人之を愛養す、
ふくろねずみ(袋鼠) 袋鼠は有袋類中袋鼠族の一なり、體色背部は灰褐色腹部は淡黄色顔頸の二部は白色眼周には黒褐の

斑を環生し、一六寸六寸尾は七寸許あり、腹部に皮壁を具へ尾を以て其兒を負持す、其形は鼠に似たり産地は亞弗利加にて、同類中にカンガルもあり

ふくろ(梟) 梟は猛禽類の一なり容貌は、頗る猫に似て羽毛は柔軟なり、勁短くして、羽毛密生し爪根を没す、眼目圓大にして、前大に傾斜し白晝或は暗黒には視力なきが故に、樹間に潜伏し昏暮より出て、食を求む、

ぶた(豚) 豚は有蹄類中猪族の一種なり體は肥大にして、身幹の大小脚の長短毛色耳形等一ならず、脂肪多く食用とし廣く用ひらる、生期は約二十年にして毎歳二回六頭乃至十二頭を乳す之によりて、繸蟲及旋毛蟲を傳播するの恐あれば決して生肉若くは半熟のものを食すへからず、原は印度産の野猪及歐羅巴産の野猪

より變化したるものなりといふ、

ふな(鮒) 鮒は鯉鯽族の一種なり、體色青黒にして、腹部は白色若くは黄色を呈し、且金光あり性其貪食にして、體遍濶なり好んで昆蟲を食ふ、肉は美味なり秋の末に至れば鱗紅色に變ず、之を紅葉鱗といふ味は層美なり、

ふく(河豚) 有索動物中、魚類の内固顎類なり、骨格硬く、尾は正等なり、鱗は圓滑又は櫛齒狀なり、多く南海の産なり、食料に供するもあり、又食する時は害毒をなすものあり、

ぶり(鱒一名海鱒) 鱒は青花魚族の一なり背部は青綠色にて、腹部は白色なり、肉中に細骨あり、體は圓く大なり本邦にては、各地の海に産すれども、丹後與謝海灣に産するもの最上品とす、

ふうちよう(霧鳥) 霧鳥は鳴禽類の一目

齒葉類の一種なり、羽毛は極めて美麗にして、帽飾とす、新ぐいれや及其近島に産す、

ふせいかいたんるぬ(不正海膽類) 不正海膽類は、芒刺動物門中の一綱に屬す、

「ぶんぶくちやま」の類是まり、體は、球状或は橢圓形にして、肛門は、

石盤盤を通わせる線に沿ふて、吸足間帯に迂り、鰓並に「ありすとをとるす」の提鰓を缺く、

ぶんれつきう(分裂球) 分裂球は、動物が繁殖するに至る、原質球をいふものにして、一個の動物が、分裂法によりて、繁殖せんとするや、必ず核を稱するもの

の分裂して、繁殖するものにして、等比級数的に、増加するものなり、例へば蛙の繁殖を見るに、卵の水中に、出するや、數時間後、二個となり、この二個は、更

に分れて、四個となり、この四個は、八個となる、此の如く、分裂するも、分裂前と同しく、各一個の核を稱するものを、有し、遂に數面の小球より成る、一塊となる、此の各小球は、即ち、分裂球なり、

ハの部

へきえき(避役)

一名十二時蟲、後頭部突起して、鈍三角形をなす、背上月辨あり、又腹下に垂肉をなす、其狀櫛の齒の如し、尾は細長にして能く樹枝を纏繞して攀縁に便にす、體色は淡黃綠色にして時々綠褐色又は藍褐色のものあり、埃及及び西班牙の南部に産す、土人之を愛玩して養ふ、

へんごいん

游禽類の一種にして脚は極めて體の後部にあり、翼は羽毛なく鱗片を以て蔽はれ、この翼は水中にて魚の鱗の

如く游泳の用をなす、幼時はこの翼地に觸着し脚の用をなす、

へんさいるぬ(辨鰓類) 軟體動物にして

多くは海産なり、泥沙の中に棲息し介殻を被り左右同形なり、而して此の二個の介殻は蝶番を以て互に緊着す、靱帯と肉柱とにより閉塞を司さざる、鰓は外套膜と足の間にありて左右に二枚宛なり、心臟は背面の中間にありて、血液は無色なり、介の内部を見れば前後兩端に近き所に一個つゝの窪みたる所あり、之れ肉の附きたる跡なるが肉柱は此所にあるなり其の下端に此の兩痕跡を結び付くる線あり、之れ外套膜の附着せし跡にして此線を外套膜線と云ふ、此類は多く雌雄異體にして卵生なり、

へんちるるぬ(扁蟲類) 多くは單立にして扁平なり、細長の者若しくは橢圓形の

ものあり、他の動物に寄生するもの多し水中又は濕地に産す、鎖状に連りて群體をなす者あり、雌雄同體なるを常とす、

渦蟲類、吸蟲類、線蟲類の三種目となす食管は皆不完全なり、他の動物に寄生せるを以て吸盤又は鉤の如き附着器を具有せり、柔軟なる皮膚なり、水生のものは多く纖毛を被れり、内部の諸器官は不完全なり、生殖器は其構造極めて複雑なり、體の前端には通常一對の神経球ありて之れより後端に向て二條に神経系を出せり又時々一對の眼を存するものあり、排泄器は體の兩側を走りて多數に分叉せり、雌雄同體なり、寄生中時々宿主を轉換して以て世代を交替すと云ふ、卵子は數多の卵黃細胞と共に一の卵殻内に被包せらる、之を被卵子と稱す、

へびるぬ(蛇類)

體は圓柱形にして四肢

を有せず、然れども僅に其の根跡を認む
 き云ふ、蓋し其の尙母體の内にあるの時
 は四肢ありたるものならん、背椎は他の
 動物に見るべからざる程、數多ありて、
 又筋骨も非常に多し、全身石灰質鱗を被
 り其の腹部にあるは一列をなし運動自在
 にして能く肋骨及筋肉の助により前進の
 作用をなす、其用脚に等し、下顎骨は直
 に頭骨に關連せず、其間に方骨と稱する
 骨ありて相連結す、故に廣く口を開くを
 得、齒は銳利にして皆内方に向ひ居れば
 一度食餌を口中に入れ、ば、容易に出す
 ることなし、又上顎に大なる毒齒ありて
 其基部は毒腺と相通じ溝によりて齒の側
 面に開放す、若し咬まる時は忽ち其毒液
 を受く、爬蟲類に屬する一類なり、

べんもつちるるる(鞭毛蟲類) 極めて細
 微なる體軀にして、體中に一條の鞭毛を

具ふる者なり、又數條の鞭毛を具ふる者
 あり、其狀概ね卵圓なる極微の形體なり
 多くは一條又稀には數條の長毛を生づ、
 之を揮ふて水中を游泳又は渦流を起して
 食物を誘引するものなり、植物に似たる
 もあり、裂口を有し固形食物を體中に收
 容するを以て、動物たる事明かなり、原
 蟲類中の一なり、

べら(遍羅) 有脊動物中、魚類の内の硬
 骨類なり、南海に多く産出す、體軀細長
 し、骨硬く其鱗は滑にして光彩あり、青
 種のもの細長く、赤種のもの腹肥へて小
 なり、

へんもつちるる(扁蟲類) 扁蟲類は扁形動
 物門中の一綱に屬す、この綱に屬するも
 のには、渦蟲目、吸蟲目、條蟲目の三日あ
 り、「こらがびひる」「てすとま」「さなだむ
 し」等之れに屬す、

へんけいるる(變形類)

原生動物門中の
 一綱、根足綱中の一目なり、この類の動
 物は、機關極めて不完全にして體形一
 定することなく、運動することに、變體
 するを以て此の名あり、例へば「あみし
 は」の如き是なり、

べんぐいん(べんぐいん)

有索動物中の有
 脊動物綱中、鳥目の中、游禽類の一なり
 亞非利加産「かいつなり」に似て、甚大な
 り、翼には羽毛なく、鱗邊のみを以て蔽
 はるること恰も「にはとり」の脚部の如
 し、水中に入れば翼を用ひて、游泳する
 こと、魚の鰭を以るに異ならず、雛は
 翼を地に觸れ、之れ杖の如く用ひ、四肢
 にて歩行す、

ほの部

ほたてかひ(海扇)

海扇は軟體動物薄鰓

動物學 へ、は

類の一にして海産なり、北海道に産する
 一種は肉柔軟にして味極めて美なり、又
 一種日月縁は形正圓にして一片は濃紅色
 一片は白色なり、我南海に多し、普通兩
 殼の形不同にして一は扁平一は凹状をな
 す、體軀は光澤ありて橙色若くは深紅色
 を呈す、肉柱は甚だ大にして美味なり、
 殼は介鈎子となし或は鍋となす、

ぼうふら(椰子) 節足動物中、昆虫類の
 一なり、到る處の汚水中に多く發生す、
 全體をく字形になして運動すれども、
 比重は水より重し、然るに水面より水中
 に懸垂して能く全體を支ふる浮力は、體
 の最末端より第二環節に生する呼吸等の
 末端、恰も花紋狀に開放して之れにより
 て沈まざるなり、物に驚くときは、く
 字形をなして、忽ち水中の沈む、沈ま
 んとするときは、花乳狀の呼吸器を急に

閉塞して、水面の表面膜より脱落するなり、

ぼうしきうぶつ(芒刺動物) 芒刺動物は動物界を大別して、八門に(或は六門、九門、十門、十三門等に分つものもあり)區別したる一にして、或は之れを棘皮動物と名くる學者もあり、その名の異なるは唯研究上便利に出でたるものにして、先づ其の内容は同一なるものと知りて可なり、

此の門に屬する動物の體形は、笠状形の小さなもの、如きあり、或は鰻類の如き形體をなすものあり、而してその表面には星形の突出せる紋形あり、或は爪形の凹形あり、口は下方の真中にあり、肛門は上表面の中心にありて、頗る奇體のものなり、此の上下兩極の接合せるものは即ち體の中軸となり、是より體の内外部

は規則正しく、五方に射出せり、此の中軸を通じて發射せる所のものは均等に區分せるら、之れを輻狀相稱といふ、體壁には、必ず石灰質の小板ありて外殻をなし、且つ多くは其の面より無數の棘を生せり、故に之の界の動物を棘皮動物といふ以所なり、

而して此の界の動物は、總て雌雄異體にして卵生し、數回の變態を経て漸く成長せし形狀となるなり、體の構造は外殻と内臓とよりなり、此の類に固有なるものは水管系にして其の體の運行は主として此の器官の作用によるものなり、今各部つき左に聊か述ぶる所あるべし、
一、内臓

内部には大なる腔を有し、内臓諸器官を藏せり、而して其の諸器官は歩帶及び、間歩帶の内面に沿ふて、多くは五方は財

出せり、

生殖器は、五個の生殖絲ありて、間歩帶の裡に横はれり、口は外殻の下面の中心にあり、是れに反して肛門は、通例上方の中心に位すれども、時として位置を變じて他の一方に偏することあり、或は全く方面を變へて、口と同方面に存することあり、呼吸器は、極めて不完全にして上皮の突起せる所、若くは腹壁を以て之れを營めり、食管は食道及、胃、腹に區分ざる、血管及神經は共に、食道の周圍に在る、環狀部と之より歩帶の内面に沿ふて、射出せる五個の支管より成るなり、

二、外殻、

外殻は、總て石灰質のものにて、無數の小板より成る此の小板は規前正しく、整列して能動的に相連續するものあり、

或は堅固なる介殼状のもの、固結するものあり、又時としては細微なる骨片となり、體壁中に埋没せるものあり、又殻面には規則正しく並列せる無數の小孔ありて、通例五個の帶を成せり、之れを歩帶といふ、其の歩帶と歩帶との間は之れを間歩帶と呼べり、即ち芒刺動物の外殻は、通例之れを五個の歩帶と五個の間歩帶とに區別つことを得べし、

外殻面には無數の刺棘あり、此の刺棘は其の大小形狀種類によりて同一ならず、又此の刺棘中には一種其の尖端分叉して缺狀を呈するものあり、之れを叉刺と稱へ、常に外殻面の汚物を除去し、若くは食物を攫取するの用をなせり、
三、水管足、

水管足は、芒刺動物に固有なる一の管系にして、食道の周圍に在る一の環狀管と

之れより支出する、五個の射出管より成る、此の射出管は、歩帯の内面を沿ふて走り之れより無数の枝管を出せり、此の枝管は歩帯面に穿てる無数の小孔より、外部に突出して、歩足となれり、各歩足は、各一個の蓄水胸をへ具へ之れより水を出せしめ、歩足の伸縮を自由ならしむ、又その邊端には吸盤を備へ、他物に附着するに具ふ、又環状管には、五個の蓄水胞あり、この部より石管と呼ばれる道管を出して外界に通せり、之れを穿孔體と呼ぶ、又外殻の板面に、無数の小孔を穿てるものにして、之れより不絶管系内に水を輸入せり、この腔は時として體腔内に存することあり、此の場合には管系内は全く液體を以て充たされたるものと知るべし、

此の門に屬する動物は、研究上左の四種

- に區別することを得べし、
- 一、海百合類、例へば「うみゆり」
 - 二、海燕類、例へば「てづるもづる」
 - 三、海膽類、例へば「ぶんぶくちやがま」
 - 四、沙嘴類、例へば「なまこ」

ほとぎするい(杜鵑類) 攀木類に屬する一族なり、嘴は扁平なり、上嘴の末端少しく鈎曲す、脚羽多し、尾翼は長し、特性自ら巢を營むの勞を爲さずして他の鳥の巢に産卵し、他の鳥に之れを孵化せしむるにあり、郭公、杜鵑等之れに屬す、其色灰黒にして白斑を具へ腹部白し、昆虫又は魚類を食す、

ほね(骨) 骨は、動物の身體の支柱となりて、固有の體形を保持するものなり、而して身體の柔軟なる器關を保護す、骨は其外面緻密なるも内部は鬆粗にして海綿質を爲す、又長骨は常に中空にして

骨髓を藏む、骨は強靱にして血液に富める薄膜を以て覆わる、骨膜即ち是なり骨は骨膜及骨髓より營養を取る、骨は動物質と、礦物質との、兩成分を有す、骨の三分の一は動物質にして三分の二は礦物質なり、

ほにうるぬ哺乳類

獸類と人類とを含む、脊椎動物中最も高等なる位置を占め、全身毛を以て蔽はれ、大概陸棲なり骨格は硬骨にして頭、胸、腰、尾の四部に分つを得、四肢は柱形にして其運動自在なり、皮膚は一面に毛を生じ、且線に富む、其重なるものは乳線、汗線、皮脂線とす、其の内最も發達せるは雌の有する乳線なりとす、毛は體温を放散するを防ぐ防禦の作用をなすなり、而して乳線は實に牝牡を別つことを得るものにして、女の方には必ず乳線非常に發達し、其の

乳汁は幼兒を養ふものにして滋養物を含む事夥し、乳線は皮膚の直下に在りて乳房に至りて外部に開けり、而して胸部若しくは腹部にあるを常とす、齒は唇の内部にありて門、大、臼の三種なり、其總數三十二枚あり、然れども其大小形狀等は種類により異同あり、又其枚數も必ず三十二枚を備ふるに非ず、高等なるもののみ然りとす、蓋し其の齒は肉食するものと草食するものとを自ら別なり、消化器は口に次ぐに食道を以てし、胃囊之に次ぐ、胃囊は單一なるを通常とすれども、牛鹿羊等の如きに至りては四個の連接せる房より成る、腸は大小の二腸部より成り、遂に肛門に終る、心臟は二室二耳より成り、横隔膜と云ふ膜あり、體腔を胸腹の二部に分割す、肺は空氣を呼吸す、胃、肝、脾、腎、腸、等皆備はれり、神經は大

に發達し腦は特に大に、高等に進むに従ひて其表面に皺を生ず、生殖は大概胎生にして胎盤と稱するものありて母體より營養分を受く、而して産出の後乳汁により生長す、而してこの胎盤の有無により二種に分類す、即ち有胎盤類及無胎盤類とす、更に之れを別ちて

無胎盤哺乳類を

一穴類、有袋類とし、

有胎盤哺乳類を

貧齒類、海牛類、鯨類、食蟲類、翼手類、齧齒類、長鼻類、有蹄類、食肉類、猿類とす、

ほたる(螢) 鞘翅類の一にして腹部より燐光を放つ、其光りに熱なしと云ふ、其色炭黒なり、五六月頃多く出づ、水邊の草中又は樹の枝葉に棲む、小兒の玩弄となす、

ほろこ(星海盤車類) 體は球形にして五腕を有し、下面中央に口を具へ、其周圍より各腕の末端に至る迄溝状歩帯あり、外被は石灰質の棘ある小片より成り、食道状肝臓を納む、呼吸器は體の上面にある胞状體のものなり、生殖器は毎腕股に一對づゝを具ふ、棘皮動物の一類なり、

ほつすがび 一名しらがび 玻璃質海綿類の一種なり、體形圓若しくは橢圓にして一束の長き蛙質細條を生じ、是を海底に挿入して棲息す、此細條は白色光澤ありて美麗なり、此類は多竅動物に屬して、本邦にては相摸江の島の近海に産す、食用として美味なり、

ほごしよ(保護色) 或る動物は己れの體色を他の動物に摸擬し以て強敵の難を免るることあり、即ち之を保護色と云ふ、

ほうぼう(糸娘魚) 一名竹蓼魚、糸娘魚は甲頭族に屬する海魚なり、全身赤褐色にして細鱗を被り體形銳錐狀をなす、背棘の鱗は頗る強大にして胸部は極めて長大なり、而して表面は白色淡赤色を帯び裏面は綠色にして紺青色の圓點あり、肉は白色にして美味なり、冬春の候之を出す、一種鱗魚は胸鰭特に長大にして翼に代ふなり、

ほらがび(梭尾螺) 梭尾螺は軟體動物腹歩類の一にして其殻紡錘形をなす、性甚だ猛惡にして他蟲を傷け肉を食す、殻口は潤大長卵形をなし體軀赤色なり、常に海中に生息す、

ほほじろ(畫眉鳥) 畫眉鳥は鳴禽類の内別厚殼類の一種にして雀より稍大なり、頭背灰赤にして背上に黒斑を具へ翼尾共に黒色なり、眼上に白斑ありて恰も畫眉

蛙、蛤の類は此色を有するなり、

ほや(老海鼠) 一名石勒卒、老海鼠は脊索動物被囊類の一にして、頭部に二孔あり、一を呼吸門と云ひ、他の一孔を排泄門と名け、之れに依つて水を吸吐す、體軀柔軟にして恰も被囊の狀をなす、其組織中には植物固有の植物細胞膜質を含有す、又外皮を去り醋を加へて生食し、或は鹽藏す、本邦にては北海道及び松前、津輕邊に産す、此他ほんぼや、いねぼや、からぼや等の諸種類あり、

ほほづきがび(酸醬貝) 酸醬貝は蠕形動物擔腕類の一にして我北海道の深海に産する奇なる動物なり、殻は粗圓形深紅色を呈し、腹殼は背殼より大にして嘴狀の突起を具へ、之れより筋肉莖を出して海底に緊着す、又殻内より時々螺旋狀の腕を出して食物を搜索す、

の如し、故に此漢名あり、又眼下黒くして兩頬白し是れほまじろ、の名ある所なり、其聲清朗優にして宛も小鈴を鳴らすに似たり、世人之を愛玩す、

ほづじやく(蜂雀) 蜂雀は鳴禽類の内別細葉類の一種なり、原産地は米國にして鳥類中の最小に位し嘴細長く勾曲す、舌は長く管状を呈す、常に花園中に飛翔し花蜜を吸収すること恰も蜜蜂の如し、故に此名ある以所なり、

ほへざる(吼猴) 又吼果、吼猴は潤鼻猴類の一種にして、本産地は南亞米利加なれども今は亞弗利加州中至る所に生産せり、滿頬鬚を生ず、尾は長くして能く他物に纏繞す、啼聲頗る奇大なり、舌骨に一個の骨胞を存す、

ほまじぎす(杜鵑) 杜鵑は攀木類杜鵑族の一にして嘴は扁平翼尾共に長大なり、

體毛は灰黒色にして白斑を具へ、腹部白く鷹彪あり攀足を具へ樹木を攀縁すること巧なり、常に昆蟲類を嗜食するを以て有益鳥類とす、

まの部

まんじうかひ まんじうかひは、芒刺動物門中、海膽綱中の一なり、體形扁平長圓にして數甚だ厚く、刺短し、口は腹面の中央にありて消化管は體の後端に開く常に海底の泥砂中に産す、

まきかひ(巻貝) 巻貝は軟體動物門中、腹足綱の一なり、一個の螺旋状をなせる殻を有す、體の前端には頭と名くへき部分あり、口は其尖端に開けり、口の上には通常一對の觸角あり、眼は其基部に位す、頭部と他の體部との間には判然たる境界なし、匍匐するに當り殻より出づる

部分は腹面扁平にして、筋肉に残れる部は種々の臟腑を包み、外套を以て包まる、是胸部に相當する所なり、殻は石灰質を含みて厚し、この殻は外套膜の分泌せる液體の固まりて生せるものなれば、自身に生成力を有せざるを以て、身體の生長するに従ひ、殻の形大さなれり、是れ外套膜の働きにより已にある殻の口に新しき殼質の増すに因るなり、殻尖に光りたる部分は、最も古き部分にして殼口の周囲は、最も新しく生せし所なり、斯く殻の大き増加するに當り、殻口の周邊同速力を以て、成長せば圓錐體を形を生する理なれども、實際外套膜は背面の方、腹面よりは廣きこと多く、殻を分泌する量も亦同しからざるを以て、蟲の成長するに従ひ、殻は次第に腹面に向ひて曲り、終に螺旋状をなすに至る、而して

殻の形體に右方に卷きたるものと、左方に卷きたるものとあり、右方に卷きたるものを右巻といひ、左方に卷きたるものを左巻といふ、

殻の表面に數多の横線あり、是れこの蟲の成長せる際、殻口たりし所にして、之れを成長線といふ、

まんぼう(翻車魚) 翻車魚は、裸齒族の一種なり、體頗る扁側し、其背部には灰色に黄褐色の斑紋あり、尾鰭は背鰭の兩鰭に連りて體の後端を回る尾は短縮せり性懶惰にして、浪に従て游泳す肉は其色白色にして、味は美なり、其肝臟は巨大にして油を製するを得、奥羽及び常陸の海上に殊に産す、

まだい(棘鬚魚俗字鯛) 棘鬚魚は、體色淡紅白色なれども、死すれば赤色に變ず棘は腎腎兩鰭は強大なり、齒は鋭く肉は

微紅色にして、其味色美なり故に上饌に供し、又嘉儀の饌贈等に用ゐらる、冬期は深く海中に潜在し、有期に至れば淺海に來りて産卵す、此期に至れば色澤殊に艷麗を加へ、味亦殊に佳あり、此魚は蝦類を以て重なる食餌となす、

まんむつと まんむつとは古代に生活せし象麴の一種なり、其牙は一丈乃至一丈五尺に達し、上向して鉤曲を爲す、此獸の泳海中に凍死せる者を、一千八百〇六年シベリアのレナ河に於て發見し、今尙ほ其全體を、魯都ベテルブルグの博物館に陳列す、

まごたろうむし(孫太郎蟲) 節足動物中昆蟲類の一なり、其の性貪饕にして、池中に没せる水草等に附着匍匐す、其體長紡錘形をなし、其大形なる鉤鎌状の小腮を有す、大腮は大にして鉤状をなし、

食蟲を啣へたるまゝ、其の血液を吸收するに甚便利なり、

まんぞくゐ(蔓足類) 蔓足類は、節足動物門中、甲殼綱中、切甲目中、のななり、「つめかひふしつば」かめのて」の如き是なり、

まつもむし(一名ばつていらむし) (松藻蟲) 節足動物中、昆蟲類の一なり、この蟲は、好んで水面に浮ひ居る、時として水底に潜り、水草若くは植物に附着し、時としては空中に翅揚す、その運動極めて迅速にして、體の形狀恰も小鯛の如し、故に「ばつていらむし」の名あり、體の兩側に長擺状の脚あり、水面及水中はこの後脚を以て、櫂の用をなし自由に進退し、地上は前脚と脚を以て歩行し、空中は、背部に備へたる翅を以て翔り、頗る自由行動の機械を具備せり、體

色は燦爛たる銀光を放つ、翅を透して外部にその光り彰はる、

まむし(蝮蛇) (蝮蛇) 有毒蛇類の一にして、頭は大に頸は細く、尾は急に尖れり、全身暗灰色にして、赤褐色の斑文あり、夏期草間及び樹上に棲み、其怒るときは人を咬む其毒極めて激烈なり、

まごぞくゐ(膜足類) 後趾前方に出で、他の三趾と共に蹠を以て連なる、鳥類に屬す、

まごぞくゐ(膜翅類) 昆蟲類の一目なり、口は固形物を嚙むに適し、又流動物を吸ふに適す、複眼にして又三個の單眼を有す、四翅は同形にして膜の如し、此種は社會的生活をなし、其勉勵は非常なり、はち、あり等此類に屬す、昆蟲類に屬す、前翅は大なり、後翅は小なり、翅は膜質にして前緒少す、上下の頸は皆食物を嚙

碎するに適すれとも下顎は、下唇と共に花蜜等を吸ふに適す、雌は複部の末端に刺劍を有すれども雄はなし、

まだらうま(斑驢) 斑驢は、奇蹄類中馬族の一種なり、其形は驢に似て稍々大なり、全身には美麗なる黑白の斑點あり、此獸は南亞非利加に産し、肉を食ふを得皮は革を製すべし、

まつかさうな(荔枝魚) 荔枝魚は、眞正棘鱗類の一種にて、海魚なり、體は圓くして、六寸許にして巨なる口を、巨なる眼を有す、鱗は堅牢なること恰も甲の如し背鰭及び腹部は、銳利なる大棘あり、其縁は鋸齒状を爲す、

まぢ(竹煙) 一名がみりがひ、竹煙は、軟體動物薄中鰓類の一なり、其外殼狹長にして、恰も小刀の鞘の如し、殼の外表面は淡黒色にして、前縁に二齒ありて、開閉

に便なり、肉は細長にして、味美なり、

みの部

みのむし(避債蟲)

避債蟲は、節足動物門中、昆蟲綱の一種なり、みのむしの成熟せしときは、囊を細枝に附着して、其の内に蛹化する、昆蟲はその囊裡に産卵し、死に至るまで、無翅の蛆状をなして潜伏す、雄蟲の蛹は、之に異なり、囊の下端より、露出して有翅の蛾に化す、此の蟲は、細枝を以て、被ひたる、囊状の屋を作り、その内に生活する、奇習あり、その移動せんとするや、體の前端を突出して、住家を負ひて匍匐す、

みやくしるゐ(脈翅類)

前後翅は同形の膜質なり、網状ある多くの脈縱横に配付す、頭なく腹細長、口はよく物を嚼み又は吸に適す、蜻蛉、蟬、さひける、

うすばかけるう、さうすみさんほ、むきわらとんほ等之に屬す、夏時多く産出す空中に飛行す小蟲を捕ふて之を喰ふ、雄は美にして雌は通常美色を帯びず、其交尾の時、雄は其腹端に具有せる、鉤を以て雌の頸を挟み、雌は腹部を屈曲して其端を雄の腹部の第二環節に在る生殖機に附着せしめ、以て精液を授受して、水上に飛行す、雌は腹部を水中に浸して産卵す、其卵子は夏の中ば頃に至りて孵化す幼蟲を發生す、之れを水蠶と云ふ、水蠶は其、頗る活潑なり、胸部には六脚を有す、脱皮する事一二回にして、胸部の背面に不完全なる翅を生じ、其後跋行して水面より出で、而して陸上に上る時は、其背面さけて蜻蛉現出す、蜻蛉には其種類極めて多し、體軀細長に玄紺なるものを、紺鱗と云ふ、體軀最も大にして綠色

なるものを馬大頭と云ひ、形最も小なるものにて赤色なるを赤蜻蛉と云ふ蟬は其體軀細長なり、尾端に二個又は三個の硬毛を具ふ、前翅は後翅よりも餘程大なり、夏の初め一時に發生す、沼池の附近又は其上に群飛す、腹部の側面には葉状の腮を具へ之れにて呼吸す、うすバカゲロウは頭部大なり、腹部細長なり、前後翅は一にして透明なり、翅には多くの翅脈を分布す、網状を呈す、晝は潜伏して黄昏に出づ、小蟲を捕ふて食ふ、幼蟲は砂接子と云ふものにて、常に家の軒の下又は岩穴等の乾砂の地に、雷盆様の穴を造りて、其の底に潜伏す、頭のみ凸出す蟻其他の小蟲の陷るを待ちて之を食す、
みじんこ みじんこは、節足動物門中、甲殼類の中、切甲目中、葉足類の一なり、みづくらげ(水水母) 水水母は腔腹動物

みつむち(蜜蜂)

蜜蜂は節足動物門中、昆蟲綱中、蜜蜂類に屬す、其の性質は最も社會的生活を好み、よく業に勤勉する本能ありて、且蜜及び蠟を生ず、蜜蜂の蜜を作るには、常に路傍の花を尋ね、恰も分陰を惜めるもの、如く、暑中鐘を熔すの日も熱心に、多忙に、花より花に移り、或は後脚に黄色なる花粉を充積せあり、或はだ、花蜜を吸收せんと企つるものあり、黒色なるものは、雄蜂にして暗灰色なるものは、女王及び職蜂なり、其の蜜を集むるに當りてや、常に小時に怠ることなく、一花の蜜を吸収し盡せば、更に他花に移り、一層大なる收穫を得んとして、雀躍するもの、如く、再び

他花に移り、一去一來甚だ忙はしき有様なり、

體形は、後脚脛節の形狀によりて、他の膜翅類と區別することを得べし、此脛は脹大、扁平多毛にして花粉を採集携帯するに用ふべき装置を具ふ、而して蜜蜂の内にも自ら巢を作らずして、他の蜂が作りたる巢に産卵するものあり、或は脚の節片狭細にして、花粉の蜜を採集携帯するに適すべき器なきものあり、或は孤棲を營み、各雌蟲が幼蟲の爲めに一の巢を作るに過ぎざるものなきにあらず、養蜂家は蜂を飼養して、蜜を採るものあり、蜜蜂の蜜はその用最も多し、

みちぢしへ、斑蝥又路導蟲

斑蝥は節足動物中、昆蟲綱中の一なり、長脚を具へ、運動極めて輕捷なる甲蟲にして、夏季盛暑の候、塵埃の立つ道路又は、踏み

固めたる徑路及河岸に多し、此の蟲の幼蟲は垂直の穴の内に住居す、其の住穴は砂地又は住來繁き道路、又は乾固したる島地に多く、成熟せる幼蟲は、體面滑かにして大きく、極めて清潔を好む、故に其住する近隣の地面に、汚物の散亂することなし、住穴は直徑殆んど六分の一位にして、稀には一呎以上のものもあり穴の深さは二三寸を常とす、

成蟲の性質は、却掠的にして、體色頗る美麗なり、この蟲は急速に飛走するとに長し、行路の人の近づかんとするときに殆んど體に接せんとするさままで靜止して動かすといへども、警戒なしつゝあるを以て、忽々接近すれば忽電光の如く、急に前方に飛び去り、その飛ぶこと數間にして停止す、其停止せんよするときは回轉して、面を接せんとする人に向け、

其人の舉動を注目す、其狀恰も行路の人に向つて、道を教ふるが如きを以てて、の名ある以所なり、

此の蟲は晴快のときに、出て暴風若くは寒冷のときは、地中に斜に穴を掘りて、其の住穴中に潜伏して出でず、

みづきはむし、水際蟲

此蟲は沙流及び湖水の近傍又は濕潤の地に多く生息す、長き觸角を具へ煤色にして、白色若くは黒色の線を有する小蟲なり、物に驚くときは、速に飛び去るも飛ぶこと少許りにして、再び止るの習慣あり、或種のものに穴を掘り、或時期には地下に生活す、水際蟲の効用は物色するに用ふ、

みづすまじ(鼓豆蟲)

節足動物中、昆蟲類の一なり、この蟲は春時に方りて甚だ少なし、其春期に發見せらるゝものは、越年したるものなり、初夏の候に至りて

新に發生し、八月の末若くは、九月の初めは最も多し、寒冷の候に至れば水草の根に宿りて、泥土中に潜み、冬眠をなすを以て、全く其の跡を絶へ、然れども暖室内に於て、水鉢中にて之を飼養せば、池沼及小川の水面には既に其影を見ざる後といへども長く之を生活せしむることを得、體の後部は角質をなせる一對の鞘翅ありて、全身を覆ふ、この鞘翅は昆蟲類の中甲虫目の動物たることを認識することを得、頭部の最末端より突出せる角質の唇を有す、觸角は短く太し、口は水屢と異なりて吸収用の吻にあらずして、咀嚼用のものなり、眼は四個の複眼を有する如きも、實は二個の複眼なることは他の昆蟲と異ならず、

みやこどり(都鳥)

有索動物中有脊動物に屬す、鳥類中の涉禽類の一種にして、嘴も

足も共に赤し、常に河海の邊に生息す、其形鷗に似たり昔業平卿東下りの際、隅田川にて（名にしおは、いざ言問はん都鳥）とよまれたるも此の鳥にて其名、詩歌にても有名な、常に魚介蟲類を食す、
みじまごせ(三島虎頭魚) 三島虎頭魚は、カサゴ族に屬する魚なり、頭部短闊方形なる堅疣あり、脊鰭は長太にして殆ど尾に接せり、其針は強大にして逆立す、胸部は潤長にして、斑紋を有す、體色淡赤にして且つ紫色の文彩あるも、三島陶器の彩紋に類す、故に此名あり、常に泥中或は海藻の間に潜伏し、肉は脆弱にして惡臭ありて味美ならず、
みなしがひ(鶏心螺) いもがひ(鶏心螺)は、軟體動物腹節類中、前鰓類に屬す殼形圓錐にして、殼口狹小なり、外唇極めて銳利にして頭上に鬚狀の肉管あるを

以て長大なる象鼻數の突起を藏す、腹足は細長にして末端には、角質の蹼を有せり、常時岩石の間に棲息し、暖海に多く住せり、
みみず(蚯蚓) 蚯蚓は蠕蟲類の一なり、常は濕土中に住し、圓筒形の蟲にして其體は數多の環節よりなりて、脚を有せざる如くなれども、顯微鏡を以て、之を見るときは、環節毎に數皮の粗毛ありて、匍行を緩く、粗毛は透明にして八行に列し、道中四行は側面に他の四行は腹部に存す此蟲は、皆雌雄の生殖器を具し、六七月の項夜中交尾し、各自に卵子を産す、其食物大概腐根朽葉の類にして、田圃に孔を穿ち空氣の流通を授くる、効少なからずと雖も、又夜に至り出で、野菜の幼根を喰ふを以て、害を被るとも少しとせず、

みみづく(角鷗)

角鷗は、梟鷗族の一種なり、頭部猫に似て、眼球は黃赤に耳に長羽を生し、其狀耳殼の如し、

みぞさとい(鷓鴣一名巧婦鳥)

鷓鴣は、鳴禽類の中、齒蹠類の一種なり、其形は鶯に似て小なり、全身黃褐色にして其脚は黒し、

みりやにだ

みりやにだは、蠕形動物門中環中綱中の一なり、其の狀恰も、蚯蚓に細毛を生したる如く、蕃殖法は卵生の外に、分體法によりて蕃殖す、前體部と後體部と各獨立の生活を成し、後體は分體後、新たに頭を生し、終に完全なる「みりやにだ」となる、かかる生殖法、構造複雑なる體の前後に、著しき相違ある、高等動物には、見ざる所なり、

むの部

むろあぢ(室鱈)

青花魚族の一種にしてあぢの一種なり、形小さく縞くは鱈の條に説明す、

むごくるね(無毒類)

蛇類の一種なり、頭長く、口巨大なり、口に堅實なる細齒を具ふ、昆蟲類を食す、殊に蛙類を嗜み食ふ、黃領蛇、やまか、し等之れに屬す、

むささび(鼯鼠)

鼯鼠は齧齒類中、栗鼠族の一なり、兩脇の皮膚、延長して、四肢に連綴す、形體稍栗鼠に似て樹木の間を飛翔すること巧なり、本邦にては日光山に多く生息す、

むごり(棕鳥)

棕鳥は、棕は禽類一目、齒類に屬す、全身は黒灰色にして眼邊に白色あり、形大鳩の如し、其聲は白頭翁に似て喧噪なり、好んで棕の實を喰ふ

故にこの名あり、

むかで(蜈蚣) 蜈蚣は、連環動物中多足類の一なり、體軀の各環節に一對の脚を具へ、蛻皮毎に一節を増す、口部には脚頭と稱する鈎状のものあり、其尖端に小孔ありて、是より毒汁を出す、體色脊面は深藍色にて、腹面は黄色なり、

むかいる(無核類) 無核類は、原生動物中、根足の一目なり、この類に屬するものは甚だ少し、Protozoa の如き是なり、

むたいたんぼにうる(無胎盤哺乳類) 無胎盤哺乳類は、有索動物中、有脊動物網中、哺乳類中の一目なり、この内別に**有袋類**、及び**一穴類**の二種あり、
一、有袋類、此類の特性は其の腹部に育兒袋を有すること是なり、母體內に體胎盤を排除するが故に、その胎兒は出

生まるには、充分の發育をすることを
得ず、

又骨盤の前面に附着せる、二個の長き骨ありて、前の育兒袋を支持するものあり、之れを袋骨といふ、此の類は排泄類を具ふ、

産地は、南洋若くは米國に限られ一も舊世界に存せしものにあらざるなり、例へば濠洲新ギニアに産する「かんがるう」の如き、亞米利加に産する「ふくらねづみ」の如き是なり、

二、一穴類、一穴類は有袋頭とともに袋骨を具へ、哺乳動物中、最下等のものなり、其體形は却つて鳥數爬蟲類に近似し、齒なくして嘴あり、又その尿生殖門は肛門とともに合一し、且其の子は卵生なりとす、此の類は只二種ありて共に濠洲并に其の附近の地に産し、

穴居をなす、例へば、「かものほし」又は「はりもくら」の如き是なり、

むしかひ、むしかひは、軟體動物門中、腹足綱の一なり、形狀圓筒状にして、不規則に曲り、岩石の表面に固着す、運動せざるを以て足脚發達せず、少さし蓋を以て殻口を閉づ、幼時は他の貝類の如く、殻は螺旋状なり、

むびる(無尾類) 兩棲類に屬し、其幼時は尾を有するありと雖ども、成長すれば遂に尾を失ひ、四肢大に發達し、陸上に棲息す、其運動遲緩にして、性鈍なり、

めの部

めじろ(繡眼兒) 繡眼兒は鳴禽類中めじろ族の一なり、山中に産し巢を作る巧なり、性群を好み、全身綠黄色にて腹は灰

白色なり、世人之を愛玩す、

めくはじや(海豆芽、女冠者) 一名しやみせんかい、海豆芽は、腕足類の一種なり、體色は綠色にして、介形扁平長橢圓なり、本邦にては筑後の海に産す、土人^①之を捕獲して肥料とす、

めだか(丁斑魚) 丁斑魚は、丁斑魚族の一種なり、全身淡褐色にして、下顎は上顎より長し、齒を有す、大き一寸に満たず、性活潑にて常に池溝に群居す、

めいきんる(鳴禽類) 嘴には質にして大概短小なり、鳴管を具へ、脚は短く樹上に往む、其類族極めて多し、鳥類に屬す、

めくらへび(盲蛇) 盲蛇は有索動物門中、有脊動物門中、兩棲目中、無足類の一種に屬す、普通の蛇と同じからず、

もの部

もま(伯勞)

伯勞は、鳴禽類の中齒齧類の一なり、頭背黄褐色にして、胸は白く、腹は黄赤色にして黒横斑あり、眼邊には黒色を有す、上嘴鈎曲して物を啄に便なり、世人之を家養して捕禽に用ふ、

もうきんるぬ(猛禽類)

温血動物を常食とし、嘴は鈎状をなし銳利にして又鋭き爪を具ひ、性極めて獷悍、翼は大にして飛翔すること速なり、視覺又鋭く雌雄雙棲し、たが、わし、ふくろ類なり、鳥類に屬す、

もうそくるぬ(毛足類)

皮は一定の位置に刺或は剛毛を生じ、環節肉毎に隔膜ありて體腔を數房に區分せり、口は前端にあり、肛門は尾端にあり、血管系はあれども體腔と通ぜず、小形、分體して蕃殖

する者あり、卵より發生する者あり、變體の者は卵より發生するものなり、

もんしろてふ(紋白蝶)

紋白蝶は、節足動物門中、昆蟲類中、鱗翅目の一なり、白色蝶にして幼蟲は野菜類を食し之に害をなす、羽毛に白紋あるを以て此名あり

もんきてふ(紋黄蝶)

紋黄蝶は、節足動物門中、昆蟲類中、鱗翅目の一なり、羽毛に黄色の紋形あるを以て、此名を附する所以なり、全身黄色を帯び、幼蟲は野菜類を食して之れに害を與ふる事あり、全體の部分は、頭、胸、脚、の三ツより成る、

もくら(暗鼠)

もくらは、有索動物門中、綱のに有脊動物中の一員、哺乳目中、有胎盤哺乳類の科、食蟲族の一なり、短脚の小獸にして、口吻は前方に尖り、眼は通例小なり、各肢五趾を具へ、其尖端には鋭き爪ありて土を掘るに適す、此の

類は常に土中に穴居し、昆蟲、蟻形類を食す、

やの部

やまかり(寄居蟲)

寄居蟲は硬殼類内別十脚類の一にして、一見蜘蛛に類似す、全身に微毛を生す、頭部に細長き角あり、腹部は圓筒形にして、長く其質柔軟にして、硬固となることなし、故に常に螺類の空殼中に入りて、寄居し以て其身を保護す、其移動するには必ず殼内より、頭胸部及び脚を現出す、漸々成長するに及んで他の大殼に入る故に此名あり、

やまゆのてふ(天蠶蛾)

天蠶蛾は、節足動物門中、昆蟲綱中、食葉昆蟲目中、養蠶科の科なり、多くは、穀斗科植物より成れる、森林中に棲息す、幼蟲は、蛾類中最も大なるものなるが故

に、人の注意を引くこと甚し、卵も亦形大にして、幼蟲の食せし樹葉の、近傍の木葉に、附着す、此科の雌蛾は、其觸角、雄蛾に比して、大形なるを以て、容易に之れを判別し得へし、繭より、雌蛾を養成せしむる、爲めには、雄蛾と交尾せしむる必要あり、

若し蟲籠中に孵化せしもの、盡く雌蛾のみにして、雄蛾なき時は、蟲籠を開放せる窓に近く、一兩日間、放置して雄蛾を誘ふを可さす、斯くせば、雄蛾多く來りて交尾し、卵を得、而して

卵は、春季に至るまで、之れを冷所に貯へ、其卵より、孵化せし幼蟲が、食葉を發見し得る時期に先ちて、孵化することなきやう、手當をなすへし、作蠶として頗る天蠶に似たるものあり、色は淡綠色にして、天蠶と同じからず同一のものに誤る

勿れ、野蠶は白色にして、是又、天蠶と同じか
らす、其繭は、籠状をなして、膠質に近
く、孔竅多し、「てんぐす」さて、釣魚用と
して宜し、野蠶のこさを或は、白髪太夫
又は白髪太郎などいふ、
やすで 多足類にして、體は圓柱形をな
し、環節より成り、環節毎に二對を生じ、
日光を恐れ濕土に住し之れに觸るれば、
環形となる、

やらじうを やらじうをば 有索動物
門中、有脊動物綱中、魚目中、硬骨綱中、
總鰓科の一種なり、全身角柱形にして、
極めて長し、雄の腹面に、囊ありて、其
の内に卵を養ふこと、毫も「たつのをさし
こ」と異なることなし、

やから、火筒魚) 一名鮭魚、火筒魚は、
管口魚類の一種にして、全身淡赤色なり、

體細長く五六尺に至る、嘴も亦細長くし
て目は小なり、尾鰭の間より、一赤線を
出す肉白色美味ならず、本邦にては、駿
河、伊豆、に多し、

やぎ(山羊) 山羊は、偶蹄類中洞角族の
一にして、其角強大鎌状をなす、性放恣
にして怒り易く、且つ法懦なり、牡は約
ね鬚を有す、其乳及び肉は世人の爲めに
賞味せられ、毛皮は毛工に最良とす、

やつかしら(戴勝) 戴勝は、鳴禽類の内
別細葉類の一なり、頭部は赭赤色にして、
羽冠を載き起伏意の如くす、嘴は細長に
して稍々勾曲す、我國にては加賀邊に多
しと云ふ、

やまどり(山鶏) 一名鷄雉、山鶏は、鷄
類の一種にて雉子に似て稍大なり、雌
雄毛色を異にせり、即ち雄は全身赤黄色
にして、赤黒の斑を具へ、尾は長くして

二尺許あり、雌は黒色にして稍赤色を帯
び短毛にして光澤なし、常に山野に飛翔
し、能く闘ふと云ふ、

やまがら(山雀) 山雀は、鳴禽類の内別
齒葉類の一種にして、常に山林を飛翔し
て、昆蟲を捕食し、有益鳥なり、頭部は
黄色にして、赤色を帯び眼額の兩邊に黒
條あり、嘴は短直圓錐形をなす、背部は
灰赤なり、腹部は淡赤にして、腹、胸、
翼、尾、共に黒し、

やもり(行宮) 一名壁虎、行宮は、蜥蜴類に
屬する動物にして、灰黒色を帯ぶ、全身
細鱗を被り、眼は眼瞼を有せず瞳子細長
にして、縦直なり、舌は短くして、口外
に伸出すること能はず、鱗間に大小の瘡
あり、其狀厭忌すべしと雖も、毒なし、
趾端は平潤にして、下面に細微なる横皺
を具へ、之れより粘液を分泌して、能く

他物に附着す蝨「とかげ」に似たれども、
幾分か「とかげ」より扁平にして、色鮮明
ならず、人家の壁に乘じ、昆蟲を捕へ食
ふ、

やまがし(山斑蛇) 山斑蛇は、有索動
物門中、有脊動物綱中、爬蟲目中、蛇類
の一なり、山林又は深谿の間に生息し、
性質甚だ猛惡にして、口中毒を含む、人
若し、之れに噛まるゝときは、生命を失
ふに至ることあり、全身甚だ美麗にして、
赤色の斑点あり、「あなたいしやう」より
形小にして、舉動總て急速なり、好んで
昆蟲類を食ふ、

やつめうなぎ(八ツ目鰻) 八目鰻は、有
索動物門、有脊動物綱中、魚目中、圓口
類なり、「うなぎ」の部と大差なし、就き
て見るへし、

やまあらし(山豕鼠) やまあらしは、有

索動物門中、有脊動物綱中、哺乳目中、有胎盤哺乳類中、齧齒科の一なり、深山幽谷に生棲し、性質強健なり、時として、村里に出つることもあり、
やこうちう(夜光蟲) 夜光蟲は、原生動物門中、滴蟲綱中、鞭毛目の一なり、光澤甚だ強きを以てこの名あり、

ゆ の 部

ゆうふんるゐ(有吻類) 口は長くして、汁液を吸ふに適す、二雙の翅は薄くして、其形等しく、變態完全なり、卵は冬を経過して、春に至り孵化す、せみは此類なり、

ゆうがほべうたん 一名おほみづあをてふ(月蛾) 月蛾は、節足動物門の中、昆蟲綱中、蠶類類の一科天蠶蛾科の一なり、天蠶蛾科中、最も美なるものにして

兩翅淺綠色を帯び、前翅の前縁には、紫褐色を具ふ

全體白青綠色にして、眞珠色の頭部を有し、兩側に添ふて、一個の白黄色の線あり、腹部の各環帯の中間の背面には、透明の黄線あり、繭は其形狀、天蠶の繭に相似たるも、極めて薄く、少許の絹絲を有するに過ぎず、幼蟲の食する、樹下の地面に發見し得べし、

ゆうびるゐ(有尾類) 兩棲類に屬し、尾は充分成長したる後と雖も存在し、四肢短く水中に棲息し、體稍扁平にして其運動緩漫なり、

伊賀、伊勢及び中國邊の溪間に産するもの如きは、即是なり、

ゆふはいるゐ(有肺類) 螺線狀の殻を有し陸に棲むものと、淡水に産するものもあり、皆肺を有し空氣を呼吸す、雌雄同

體なり、なめくじ、かたつむり、等此類に屬し、軟體動物にして、腹足類なり、

ゆふたいるゐ(有袋類) 重も南洋諸島に産し、又南米に産す、無胎盤哺乳類にして、胎盤を有することなし、此類の最も特別なる點は、牝獸の腹部に一種の嚢を有し、幼兒は極めて弱く且つ小さくして生るるを以て、此の嚢中にて若干期間哺育せられ漸々發育するなり、かんがるう、うなむばづこ、等この種に屬す、

ゆうこうるゐ(有孔類) 有孔類は、原生動物門中の一體、根足類の中の一目なり、體面に孔穴あるを以て、この名あり、

ゆうたいさんほにうるゐ(有胎盤哺乳類) 有胎盤哺乳類は、有索動物門中、有脊動物門中、哺乳類の内別なり、無胎盤哺乳類とは、胎盤の有無によりて區別せらる、例へば「うま」「うし」「やぎ」等は

なり、人類も有胎盤哺乳類としては、牛馬と同一の綱目中にあり、大別して左の十三種となす、

- 一、食齒類 例 せんざんこう、
- 二、游泳類 例 くじら、
- 三、奇蹄類 例 うま、
- 四、偶蹄類 例 うし、
- 五、長鼻類 例 ぞう、
- 六、齧齒類 例 ねずみ、
- 七、食蟲類 例 はりねずみ、
- 八、鱗脚類 例 おつとせい、
- 九、食肉類 例 ねこ、
- 十、翅手類 例 かわほり、
- 十一、擬猴類 例 ねこさる、
- 十二、猿猴類 例 さる、猩々、
- 十三、人類 例 人、

ゆうびかいじようるゐ(有尾海鞘類) 有尾海鞘類は、有索動物門中、尾索動物

綱中、海鞘目中の一に屬す、此の類の動物は、一見動物なるや、否や疑はし、海底の砂中、或は、木石等に附着して、生息す、例へば「ほや」の如きなり、

ゆうばんるゐ(有板類) 有板類は、軟體動物門中、腹足綱中の一目に屬す、「ひさらがひ」の如き是なり、

ゆうそりい(有爪類) 有爪類は節足動物門中の一なり、著しき爪を有するを以て、この名あり、例へば、「かきむし」の如き是なり、

ゆうそくそらぶつ(有索動物) 有索動物とは、總て動物界を八門に分類したる、その一にして、脊椎は、發育の初期に於ては、之なく、其代りに脊索と稱するものあり、是等の動物を唱して、有索動物といふ、

この脊索は、細胞より、成れる索狀體にして、殆んど、體の一端より、他端に、全通し、其位置は、恰も生長後、脊索の在る處にあり、脊索は、總ての脊推動物に存し、發育の進歩に従ひて、漸次脊椎の爲めに、周圍より、除去さるゝを常とすれども、終生是れを有する動物の種類もあり、凡て此等のものを、總稱して、有索動物といふ、

動物界の分類につきては、或は七門に分ち、或は八門となし、或は九門、或は十門、或は十三門等に區別する學者ありといへども、その異なる所は、重に有索動物門の範圍の異なるによりてなり、最も廣く行はるゝ、學者の區別は八門にして、その區別に従へば、有索動物門には、三種の内別あり、曰、尾索動物、曰、頭索動物、曰、有椎動物、是なり、

一、尾索動物には、海鞘類、サルパ類の二目あり、

二、頭索動物には、その種類甚だ少く例へば、「なめくじうを」の如き是なり、

三、有椎動物には、五種の別あり、例へば「たひ」「へる」「へび」「はと」「さる」の如き是なり、詳しくは、その部につきて、知るべし、

ゆうせきぶつ(有脊動物) 有脊動物とは、無脊動物に對する名稱なり、この二種は、脊椎の有無によりて、異名を附したるものなり、

此の門に屬する、動物には、必ず、體の中央に、脊骨と稱する、骨柱あり、頸部に初まり、體の後端に終り、全身の中軸を造る、脊骨は、一本の骨にあらず、前後相連れる、數多の骨片の連続して、成れるものなるが各脊骨は、互に僅少の運

動をなす故、全脊骨は、彈力ある、竹等の如く、前後左右に、屈曲することを得筋肉は主として、脊骨に附着す、皮膚は筋肉の外面を含めり、

體には、頭部、胴部、尾部の三あり頭には、腦髓、主なる感覺器官及び口あり、胴の中には、消化器、呼吸器、排泄器等あり、尾部には、骨格、筋肉等の外には、特別に、著明なる、器官あることなし、體の中央を、横斷して、之れを、觀察するに、稍背面に近き所に、脊骨あり、然して、其前後に、各一個の腔あるを見る、脊骨より、背面に、當れる腔は、大にして、消化器及び、其他の器官は、其の内に位す、換言すれば、有脊動物の體は、大小二個の管を束れ、小管に、神経中樞を盛り、大管には、他の臟腑を入れ、肉を以て、蔽ひ、皮膚を以て、其の外を

包みたるが如し、然して、體の中軸なる脊骨の位置は、大小二管の間にあるなり、脊椎の形態は、通常臼形にして、背側面より、左右一個つゝの突起を生ぜり、此突起は、更に背の中央線に於て、相合し、以て、體の背面にある小腔を包めり、此の小腔の内部にある、脊髄は生活上最も、大切な器官にして、然かも、最も柔軟にして、損し易きものなるが故に、之れを保護する必要あるに因るなり、呼吸器は、陸上に生活するものと、水中に生活するものにより、目、器官異なる、陸上に生活するものは、肺を以てし、水中に生活するものは、鰓を以てす、此の器官は共に、消化管の、前端に近き所に位し、之れも多少の、關係を有す、鰓を通る水は、必ず口より入りて、肺に入る、空氣は口或は鼻より、入りて、咽

喉を通る、稀には腹によりて、呼吸するものあり、發音器は、必ず肺に空氣の出入する、通路にありて、空氣の出入を以て、發音作用をなす、消化器は、必ず體前端に近き、口に始まり、肛門に終る、口には、上顎と下顎とあり、食物を咀嚼す、上下に口を開閉する顎骨を有するものは、有脊動物の外には、決して、他の動物に見る、へからざるなり、四肢は、陸上にありて、運動する動物は、發達甚だ盛にして、體の全形殆んど是れによりて、定まる、水中にある動物は、四肢の運動少なきが故に、従つて、發達すること少なく、その大きさも全身に比較して、甚少なり、有脊動物諸器官中、最も發達したるものは、神経系なり、其の主なる分部は、腦

及脊髄より成る、腦は頭部の内樞にありて、大脳、小脳、延髄等の諸部に分つことを得べし、之れより、十對程の心經出て、頭部に播り、諸種の感覺及び顔の運動を司る、脊髄は、脊骨の脊面に沿ひ、體の全長に通じ、左右對生せる、多數の神經を出す、此等の神經は、胴及び四肢に、廣がり、其運動及び感覺を司る、「すゞめ」の如きは神經最も多く體重の十二分の一に超過するなり、有脊動物中にて、温血動物と、冷血動物との區別をなすことを得、是れ血液の温冷によるの區別なり、一、温血動物は、運物活潑に、感覺鋭敏にして従つて、食物を要すること多く且熟生をすること他の動物の比にあらず、特に陸上に生息する有脊動物に

ありては、空氣は、熱の不傳導體なるがために、體肉中に生したる、消化熱、直ちに發散せず、身體、常に温暖を保つが故なり、二、冷血動物は、全く熱を生ぜざるにあらずるも、温血動物に比して、その發熱の量少なく、且身體に熱の發散を防ぐの裝置なきが爲めに、體温常に發散して、殆んど、外界に均し、例へば「かへる」かめ、「魚類」の如きはなり、有脊動物には總て、雌雄各異別なり、此の動物の内別には、五種あり曰、哺乳類、鳥類、兩棲類、魚類、是なり、一、哺乳生、温血にして、胎生す且つ毛髪を有する動物をいふ、例へば、うし、おね、れこ、さる、の如きはなり、二、鳥類、温血にして、卵生且つ羽毛を以て、蔽はる動物をいふ、例へば、か

らす、ほと、の如きはなり、

三、魚類、冷血にして、卵生、鱗を以て、蔽はれ、鰭を以て、水中を遊泳する動物をいふ、例へば、こひ、ふな、たひ、の如きはなり、

四、爬蟲類、空氣を呼吸し、冷血卵生にして、鱗を以て、蔽はる動物なり、例へば、へび、とがけ、かめ、わに、まむし、やもり、等はなり、

五、兩棲類、前項に同じく、空氣を呼吸し、冷血にして、卵生なり、皮膚に鱗なく、幼時は必ず腮を生し、水中に生活し、水を呼吸する動物なり、例へば、おもり、かへる、さんしゅううを、の如きはなり、

元來分類なることは、天然に決して、存するものにあらず、研究の便宜の爲めに學者之れを設けたるものなることを忘る

べからず、

ゆうていある(有蹄類) 有蹄類は、有索動物門中、有脊動物網中、哺乳目中、有胎哺乳盤類中の一科なり、或は、是れを、備蹄ともいふ類ふ、

此の目に屬する獸類は、脚部の指端に恰も履を穿ちたるが如くに、爪質のものを以て、包まる、之れを蹄といふ、例へば、半馬羊系の如し、この種の獸類は、四肢長くして、皆歩行に適せり、而して歩行の際には、足の頂端のみ地に接し、他の部分は、地に接せずして、只脚の長さを増すのみ、母指は何れの脚に於てもなし、有蹄の動物は皆この類に屬するものにして、他の部分に決してあることなし、而してこの蹄數によりて、各その名目を異にす、奇數の蹄を具ふるものを奇蹄類といひ、二個以上の蹄を備ふるものを、偶

蹄類といふ、

一、奇蹄類、奇蹄類は、「たびーる」を除くの外は皆奇數の蹄を有し、第一趾は欠、缺し、第五趾は、上記「たびーる」に於て之あるのみ、第三趾は、常に、他趾より、大にして、脚の中央線に位置す、

奇蹄類の最も、普通なる例は、「うま」「さい」「そう」等なり、此種の動物は、熱帯地方多く、温帯地方之れに次ぎ、寒帯地方には、産せず、

二、偶蹄類、偶蹄類は、皆偶數の蹄を有し、第三類及、第四類は、脚の中央線の左右にありて、其形狀、是れに對して、彼は同じ、例へば、脚の中央線に沿ひて、割き、其割きたる面を鏡に對せしむるときは、其映像他の半分に同じ、

此の類には、反芻類、及び、不反芻類の二種あり、

以上二種とも詳しくは、其内別を掲げたる部につきて、知らるべし、

よの部

よつさいるる葉鰓類) 辨認類のことにて、或る學者は此の名を附す、辨認の部を見るべし、

よたか(怪鷓) 怪鷓は、鳴禽類の内別鵒口類の一種にして、嘴形、短形、扁平、燕嘴に類似し聳を生ずる夜禽にして、全身灰色を帯び眼目圓大なり、常に黄昏より出でて昆蟲類を捕へ食す、

よめがさら(絨) 一名石陰子又じんがさかひ、絨は、軟體動物腹歩類の一種にして、血状の一小貝なり、晝は海岸の岩窟に附着し、夜間出で食を求む、其形ち種

々ありと雖ども橢圓形なるもの多し、肉は美味ならざれども食するに足る、

よくそくるぬ(翼足類) 殻介無きあり有るあり、左右一對の翼狀の鱗ありて、頭部は明瞭ならず、口の周圍に觸手狀の突起あり、口は顎板及び舌齒を有し、雌雄同體なり、軟體動物にして、學者之れを頭足類中に入るものあり、又腹足類中に加ふるものありて其説一定せず、

よたかるぬ(怪鳥類) 嘴は、扁平にして長く翼強く、足は少し且つ微弱なり、昆虫を食す、鳥類に屬す、

よここるぬ(横口類) 魚類に屬し、粒狀鱗に覆はれ、口は、頭の下面にありて横に裂け、腮嚢は夫れく、頸孔を有し、脊梁は明瞭に脊椎より成る、

よくそるぬ(翼手類) 有胎盤の椎脊動物にして空中を飛翔するの特性ありて、體

形大に他の哺乳類と異なり、其前肢は細長して指間より體側、後肢、尾端に至る迄皆皮膜を以て連接され鳥類に於ける翼の如くなり、而して前肢拇指と後肢の五指は其の端末に鈎狀の爪を有し、飛翔せずして休息する間は之れを他物に懸くるなり、多く好みて夕刻又は夜間飛翔し昆虫を捕捉して、常食とす、かうもりの類これなり、

よきり(葦切) 有脊動物の有脊類中、鳥類の内、渉水類に屬す、常に河湖邊の葦中に棲息して夏時喧敷聲を發して鳴く、秋に至れば聲を發せず大さひなに比すべし

ようすいそくるぬ(陽遂足類) 陽遂足類は、芒刺動物門中、海蕪綱の一目にして、

「くもひで」「つるもづる」の如きはなり、詳細は「くもそさで」の部を参照せらるべし、

らの部

らつこ(海獺)一名臘虎、海獺は、哺乳動物鼬鼠族に屬する動物なり、體の長さ五六尺を下らず、常に洋中に位し、時々岩礁に攀つ常に魚介を食とす、四五日攀交尾し翌年三月の頃分娩す、皮毛は八九月の頃脱換して、其柔毛稠密にして光澤あり、黒剪絨の如し、母人の最も貴重する所にして高價なり、北海岸に産し本邦にては千島に多く産す、

らくだ(駱駝) 駱駝は、反芻類の一にして二種あり、一は亞弗利加及び亞刺亞比に産し、肉上一個の肉峯あり之を獨峯駝と云ひ、一は中央亞細亞に産して、二

個の肉峯あり、之を兩峯駝と云ふ、其に性溫和にして能く事に食へ、肉少なしと雖も力強く、又一飲にして數日の渴を忍ぶ、故に沙漠の旅行者は之を用ひ呼んで沙漠の船と云ふ、肉を食するを得、乳汁は飲料となる、又皮は良革を製するを得

りの部

りんごむ(華果蠅) 華果蠅は、節足動物中、昆蟲綱の中、二翅目家蠅科の一なり、形は普通の蠅よりも、小にして、この蠅は、華果酒製造所の、華果を、貯ふる近傍に數々群集するを以て、「りんごむ」の名あり、幼蟲は秋季を通して、何れの果園の腐敗果實中にも、發見し得へし、其成長速なるを以て、甚だ研究に便利なり、宜しく、絶へず、注意して、其生涯の有様を研究すへし、この中の集程

の如きは、完全の生活を終るまで、僅かに唯十一日乃至十七日の期會を費やすのみのもあり、

りやうせいゐるゐる(兩棲類)

兩棲類は、有脊動物門の、一にして、動物中と共に冷血動物にして、繁殖は卵生なり、幼時は必ず、鰓を以て水を呼吸し、長するに及び、體狀變して、肺を生じ、穴氣を呼吸するに至る、之の故に兩棲類といふ以所なり、「かへる」「いもり」の如きはなり、兩棲類に三種あり、無尾類、有尾類、無足類是なり「かへる」の如きは、無尾類に屬し、「さんしようを」「いもり」の如きは有尾類に屬し、「めくらへひ」の如きは、無足類に屬す、

成長せる兩棲類の形類は、住所に従ひて相違あり、水中に棲息するものは、形狀魚に似て、長く、尾は、縦扁にして、四

肢小なれとも、地上に生活する類は、體軀甚だ短く、四肢比較的大にして、尾を有することなし、皮膚の表面は、陸上に生活するものといへども、必ず常に滑濕なり、これ此類の動物は、爬蟲動物と異なり、皮膚中の無數の小線を有し、液體を分泌するに因れるなり、柔き皮の運物は如何なるものにて、多少呼吸の働きをなすものなり

骨格は、硬骨片より、成りて、爬蟲類の骨格に似たり、頭骨腔の小なることも亦同し、上下顎兩及ひ口蓋には、數多の小齒あれども、唯餌を捉へ挾むのみにして唯嚼の用をなすことなし、肋骨は極めて短かく、不完全なり

りんしるゐる(鱗翅類) 鱗翅類は、節足動物中、昆中綱中の一科なり、蝶又は蛾の類是なり、

りよこぼるゐる(縁歩類) 縁歩類は、節足動物門中、蜘蛛綱の一目なり、例へば「くまむし」の如きはなり、

りんちうるゐる(輪蟲類) 輪蟲類は、蠕形綱中動物の類なり、例へば「くるまむし」等之れに屬す、

りよこまききらら(緑膜水母) 原生動物門中の一綱、水母綱の中、海蛇目の一なり、大體に以て、「はいさら」異なることなし、

りんちうるゐる(輪蟲類) 體の形狀延長又は橢圓に近し、細微の動物なるを以て顯微鏡あらざれば審査すべからず、前端に纖毛を簇生する所の伸縮自在なる盤狀部分あり、之を動搖して渦流を起し、動物を口に收入す、後端は細く尖りて尾を成し、稀に環節構成を爲すものあり、口に接近して食道腔あり、其裡面に咀嚼齒を

生ず、而して食道腔より胃又胃は腸に通じて、本體と尾の間に於て、部背に肛つを開く生殖器肛門内に開口す、血管なし腦は食道の上部に占む雄雌異體なり雌は雄なり形體大なり、消化器は極めて不完全なり、多く淡水に生ず、自在に水中を游泳するものあり、

りんしるゐる(鱗翅類) 仔蟲は嚼むに適す俗に蝶蛾と云ふ、四翅大にして細かき鱗を被り其色美なり、仔蟲植物を食とし絲を口より出す、あけはてふ、ほなせせり等此類なり、變態は完全なり、昆蟲の類なり、

りんたごんけい(淋巴管系) 淋巴管系の起因する所は、身體全部にある組織内の隙間にして、即ち淋巴液を充滿せしむる所以なり、含液腔より起りて毛細淋巴管を形成し、而して、是れ等の細管は、

漸次に相集まりて、大管となるなり、其大管胸間に來りて二筋の大なる管に相合同し茲に至りて鎖骨下の靜脈管に開孔せり、今其開孔の概要を述べれば左方にあるものを胸管と云ひ、右方にあるものを右淋巴管と云ふものなり、この淋巴管系は組織の浸潤液を集合して再び之れを血液の中に返還するものなれば組織内に淋巴液の餘りある時は絶えず液汁は此淋巴管系統中の管内を運行するものなり、此の運行の始めは、重みに組織内管の靜脈開口部とに於ける液壓の不同なるによるものなれども、筋の收縮、呼吸、及び運動なり、其他は亦此の運行を催進する補助となるものにして靜脈管と同じく大淋巴管には一の瓣なるもの、備ありて液の末の方に流れ返る事を防げるものなり、之を淋巴管系と云ふ。

りす(栗鼠)一名きねづみ 栗鼠は、齒類中栗鼠族の一にして、其形鼠に似たりと雖、尾及び足は長し、毛色一ならず、赤褐色にして、腹部向きものあり、或は黒色にして腹部白きものあり、或は全身純白なるものあり、夏冬多くは其性を異にす、其性體快輕快、にして其快輕捷巧に樹木を攀す、亞細亞、歐羅巴及び北亞米利加に産し、常に小鳥の卵雛及び嫩芽を食す。

ろの部

ろくしやるぬ(六射類) 六射類は腔腸動物門中、珊瑚綱の一目にして、「いそぎんちやく」「きくめいし」の如き是なり、「いそぎんちやく」の部を参照せらるべし。

じの部

じに(鱈)

有索動物門中、有脊動物網中爬蟲目、鱈類の一なり、爬蟲類中、最も大形なるものにして、總て、亞弗利加及印度等の熱帶地方に産し、大河の草蔭に棲息す、皮膚は、中に骨質の甲を生ぜるを以て、甚だ硬く、容易に傷くることなし、上下の顎は頗る大にして、多くの圓錐狀の齒を有す、心臟に二心耳二心室あること鳥類の如し、趾間に蹼を有し、尾は、長大にして、縱横なるを以て水中に於ては、游泳自在なれども、歩行するに於ては、稍拙なり、凶暴貪食にして、往々人を害す、大なるものは、長二丈に達するものあり、本邦沿海にも産すれども、形體は熱帯に産するものよりも小なり。

じたりどり(候鳥)

候鳥とは、雁、鴨、燕の如く寒暖の平均を得んが爲めに、冬は

暖北に移り、夏は寒地に轉じ、其移轉の土地及び時節を畧々一定するものなり、故に此蓮名ある所以なり。

じたむし(綿蟲)

綿蟲は節足動物門中、昆蟲綱の中、半翅目の中、蛾蟲科中の一にして、赤楊又は林檎の幹又は枝に、雪白色の大塊をなし、毛狀の分泌物を以て被はれしものにして、是れ所謂綿蟲なり綿蟲に數種あり、赤楊に生活せるものを掬赤楊綿蟲といひ、掬に生活せるものを掬綿蟲といひ、林檎に生活せるものを林檎綿蟲といふ。

じにるぬ(鱈魚類)

この類は熱帯の河流に棲息し、皮膚は石灰質の甲を生じ、尾部は稍扁平にして、兩顎には圓錐形の齒を有す、心臟は鳥類の如く二心耳、二心室より成る、頗る大形の爬蟲類にして其性猛惡なり、爬蟲類に屬す。

とんそくるお(腕足類) 軟體動物にして通常淺き海の泥砂中に潜居し二枚の殻介を具へ、其形あさりの如くなれども、其の殻介は相別ることなく、足なく左右に螺旋形なりたるものあり、ほ、へきかひ、しやみせんかひ等之なり、

とじ(鷲) 鷲は、有索動物門中、有索動物綱中鳥目中、猛禽類に屬し、體形大にして、其の翼を張るときは、一丈餘に至るものあり、體色淡黒色にして、頭翼部は稍黒色なり、爪鋭く、嘴は強く、能く他の禽鳥を捕して之れを食ふ、其の性質強健猛惡なり、本邦にも産すれども、多くは亞細亞大陸に産す、

うの部

うんごつき(運動器) 筋肉は運物を主るものなり、又皮膚其他の諸體部に屬して

局部の運動又は全體の移動を司るものなり通常移動する爲めに、特別の運動あるは陸上歩行する爲めに脚あり、空中を爲飛行するに翅中あり、水に游泳する爲に、鰭あり、

うすむかけろう、脈翅類の一種にして翅は膜質にして薄く網狀の脈を有し變態は完全なり、而して翅は大なり、

うなむつと、有袋類にて雌は腹部に袋を有し未だ弱くして歩行し難き子を其袋の中に養ふ、無胎盤哺乳類なり、

植物學

あの部

あすなろ(羅漢柏) 一名ひば、松柏科、あすなる屬

日光秩父、其の他多く深山に産する木本なり、葉は鱗狀をなし對生す、花は單性にして雌雄同株にあり、六乃至八個の果鱗よりなり毬果を結ぶ、果鱗の内に四五個の胚珠を包む、木材を種々の用に供し、又觀賞植物として栽培す、信州木曾より産するものは木質最も佳良なり、

あさくさ(紫菜) 紅藻類、あさくさのり屬

隱花植物の一種にして海藻なり、諸國近海の岩石に生ず、莖葉ともに紙の如く薄

弱なり、其生時は紫色を帯ぶ故に紫菜の名あり、平面狀をなし一層の細胞より成る、食用に供せらる、東京の品川及び大森の近海より産するものは香氣に富み最も佳良なり、

ありのたふぐ 蟻塔科、ありのたふぐさ屬

陸生の草本にして莖は枝を有し、葉は小卵形なり葉の縁邊には齒牙を有し、花は小さく長き總狀花序に排列し、花瓣四個あるもの多く萼は四裂す、子房は四室にして各室に一胚珠を含む、

あなき(桃葉珊瑚) 一名あなきば、山茶黃科、あなき屬

木本にして雌花と雄花とを異株に生し、

葉は對生にして常緑なり、花は單性にして瓣片四箇あり、觀賞用として栽培し、木材を種々の用に供す、

あかうきくさ(滿江紅) 槐葉蘋科、あかうきくさ屬

隱花植物の一種にして池沼等の水面に自生す、葉は扁平にてヒバの葉に似たり、葉の形は皆同形にて密生す、繁殖すれば全水面紅色となりて美觀なり、胞子は大小二様ありて各別囊に包まる、有害植物の一なり、

アカシヤ(金合歡) 荳科、ねむのき屬

喬木或は灌木にして種類多し、濠洲東印度に多く産す、近年わが國にも移植す、樹膠を採り、薬用をなし、又庭に植ゑて賞觀す、

あかまつ(赤松) 一名めまつ、松柏科、

まつ屬、

山野に自生しまつ屬中最も多き木本なり、芽と樹皮とは赤色を帯ぶ、葉は常緑にして針狀をなし一所より二個を出だし葉脚に鞘あり、花は單性にして雄花は葇荑狀をなし雌花は球狀をなす、ともに同株にあり、胚珠は裸出す、木材は種々の用に供し、莖より樹脂を取り、又觀賞植物として庭園に植ゑ、

あきののげし(山苦蕒) 菊科、にがな屬

山野に自生す、草本なり、葉は細長き楕圓形にして下向羽狀に分裂す、夏秋の頃黄色の頭狀花を開く、瘦果を結び短嘴を有し冠毛を着く、莖と葉とは食用となる、
あかがし(血楮) 一名かし又おぼがし、殼斗科、かしは屬、葉は長き楕圓形にて葉柄長く常に綠色なり

り、雄花は葇荑狀をなして長く垂る、五乃至十の雄蕊あり、楕圓狀又は盃狀の堅果を結ぶ、木材を種々の用に供し、又觀賞用として栽培す、

あらめ(黒菜) 褐色藻類、あらめ屬、

隱花植物の一種にして海中に産す、莖葉の區別なく皆柔組織よりなり、褐色有柄の葉狀體にして中助なく分裂す、食用肥料並に沃度製造の原料に供す、

あは(粟) 一名こあは、禾本科、あは屬、長さ五六尺に達する直立草本なり、葉は大にして披針形の直脈を有す、小穗狀花序は穗狀の圓錐花序に排列し、果實を生ずべき花は光澤あり、完全花にして雄蕊は三個を有し二柱頭あり、種子を食用に供す、

あやめ(溪蓀) 一名はなあやめ、鳶尾科、いちばつ屬、

原野の濕潤なる處に自生す、劍狀をなせる葉を生し其中央に高く花を着く、花は内外二層の花蓋を有し六片よりなる、其外層の三片は大にして紫色を呈し、内層の三片は小なり、雌蕊は三個に分れ花瓣様にして色は紫なり、其頂端に近く柱頭あり、子房は深く苞に包まる、雄蕊は三個ありて雌蕊の下に隠る、觀賞用に供せらる、

あざみ(薊) 菊科、あざみ屬、

原野に生ずる草本なり、莖は欠刻多き網脈葉を互生し、葉縁に多くの針を有す、頭狀花序の各花は五瓣より成れる筒狀花冠を有し、雄蕊は集葯にして子房は下位なり、

あかね(茜草) 茜草科、あかね屬、

上昇草本にして刺を有し、葉は長卵形又は長心形にして葉柄は長く四個つ、輪生

し、花は淡黄色にして花序複性なり、根より染料を製す、

あかほな(柳葉菜) 柳葉菜科、あかばな屬

葉は長卵形にして脚部を以て少しく莖を抱き、花は帯紫紅色なり、種子は一端に長毛を具し、萼の筒部は子房より上に延長せず、蓋は八個あり、

あかねかづら(昆明山海棠) 一名くろつる、衛矛科、あかねかづら屬

纏繞木本にして花序は枝の頂上に生し、花は白色にして三室の子房を有し、葉は年内に脱落し、果實は三個の縱走翅を有す、
あなかつら(清風藤) 清風藤科、あなかつら屬

纏繞木本にして緑色の枝を有し、花瓣は黄色にして五個あり、雄蕊は皆完全にして五個あり、觀賞用として栽培す、

あぶき 清風藤科、あぶき屬

木本なり、葉は栗の葉に似て稍大なり、花瓣は不齊にして五個あり内三個は大にして稍三角形をなす、木材を種々の用に供す、

あなき あなきに同じ其項を見よ
あせび(椋木) 一名あせば、石南科、あせび屬

木本にして小鋸齒を帯びたる葉と新しき枝の頂上に生せる白花を有す、有毒植物なり、葉の煎汁を用ひて害虫を驅除す、

あせぼ あせびに同じ其項を見よ
あふらつつじ 石南科、あせび屬

花冠即ち瓣は白色を呈し、花絲の中部は長毛を密生す、

あかもの 石南科、あかもの屬
小木本にして葯は芒を有せず、果實を食ふべし、

あくしほ 石南科、こけもも屬

直立小木本にして葉腋に單生する花を有す、果實を食すべし、

あさから 齊墩果科、あさから屬

花序は多く複性にして雄蕊は通常十個あり、果實は四五の翼を有す、

あなのり(乾苔) 緑藻類、あなのり屬

隠花植物の一種にして海草なり、多細胞よりなり皆柔組織にして莖葉の區別なく囊狀の體を有し有性又は無性の生殖を營みて繁殖す、食用に供せらる、

あみも 緑藻類、あみも屬

隠花植物の一種にして多數の植物連合して網狀の群體をなす、

あなご(石専) 緑藻類、あなご屬

隠花植物の一種にして二層の細胞より成り、食用に供せらる、

あなみご(水綿) 接藻類、あなみご

る屬、

隠花植物の一種にして淡水に産す、纖維狀の一系列多細胞より成る、螺旋狀の葉綠體を有し接合生殖を營む、

あぢも あまもに同じ其項を見よ

あまな(山慈姑) 一名むぎぐわゐ、百合科、あまな屬

葉は細長く花は通常直立し、花蓋の片は白色にして外反せず、外面に暗紫色の纖維紋を具ふ、花莖は其下部に一個或は二個の尋常葉を有す、鱗莖を食用す、

あさ(大麻) 桑科、あさ屬

葉は掌狀複葉にして雌雄異株花を有す、皮より纖維を採り、種子を食用に供し、皮を去りたる莖をチガラと稱し種々の用に供す、

あかざ(藜) 藜科、あかざ屬
大草本なり、葉は廣くして長き葉柄を有

し、縁邊に缺刻及少數の鋸齒を有し稍卵形なり、葉は食用に供し、莖は干して杖となす、軽くして便なり、

あけび(通草)

木通科、あけび屬、葉は掌狀にして複葉は數箇の小葉よりなる、萼片は三個あり雄蕊は六個ありて離生し、果實は長橢圓形なり、果實を食用に供し又若き葉を食すへし、薬用植物なり、

あざみげし

罌粟科、あざみげし屬、花瓣は黄色にして柱頭は三乃至六個に分裂し殆んど柄を有せず、萼片及果實は刺を具し果實は先端より裂開す、觀賞用として栽培す、

あけぼのさつ(樟牙菜)

龍膽科、せんぶり屬、葉は長卵形にして尖り、花は複集繖花序に排列し、花冠は白綠色にして淡黄色を帯び暗色の點を有す、

帯び暗色の點を有す、
あざぎ(苔菜) 一名はなじゆんさい、龍膽科、あざぎ屬、

葉は圓狀心形にして花を水上に開く、花冠は糸狀に細裂せる縁邊を有し深黄色なり、嫩植物を食すべし、

あさかほ(牽牛子)

旋花科、あさかほ屬、

葉は心狀にして通常三裂し、花は美麗にして白紫青等種々の色を有す、觀賞用として栽培す、

あきのたむらさつ(鼠尾草)

一名こまごごめ、唇形科、あきのたむらさつ屬、葉は羽狀複葉にして花は通常淡紫色なり、

あなざり(梧桐)

梧桐科、あなざり屬、木本にして樹皮は綠色を呈し、葉は掌狀に分裂す、花は無瓣にして各室に二個以

上の胚球を含める子房を有し、果實は放線狀に裂開す、觀賞用として栽培し、又木材を種々の用に供し、種子を食用となす、

ありとほし(虎刺)

茜草科、ありとほし屬、細針を有する植物なり、葉は小形にして針は殆んど葉と同長なり、觀賞用として栽培す、

あらせいどう(紫羅欄花)

十字科、あらせいどう屬、草本にして莖の下部は往々木質をなす、葉は厚くして帯白色の軟毛を有し、花は紫色にして美麗なり、觀賞用として栽培す、

あんじやべる

一名おらんだせきちく、石竹科、なでしこ屬、美麗なる花を開く、花瓣は淺き齒牙を有す、

す、苞は短かく葉は白綠色にして莖は硬し舶來種なり、賞観用として栽培す、

あんず(杏)

薔薇科、さくら屬、木本なり、葉は廣楕圓形或は卵形にして單葉なり、花は淡紅にして五瓣を有し、果實は核果を生し内部に核を分離し易し、果實を食用に供し、種子を薬用となす、又木材は種々の用に供せらる、

あみたけ

菌類、あみたけ屬、隱花植物の一種にして陰濕の地に生ず、生殖體は肉質にして平滑なる笠を有し、其下面に管狀の小孔を密生す、胞子は殆んど白色なり、食用に供し得べし、

あみかさたけ

菌類、あみかさたけ屬、隱花植物の一種にして山野に自生す、地下に絲狀體を有し、生殖體は地上に出で頭部の表面に網の目の如き凹き所を有す、食用に供するこきを得、

あまごころ(萎薹)

リ屬

百合科、なるこゆ

變種多く山麓の陰地に自生する草本なり、根莖は無枝にして長く數多の葉を互生し、下面は白色なり、花蓋は筒状にして葉腋より出づ、根莖を食用せなし、又澱粉を製す、

あぶらぎ

菊科、きく屬

山野に自生する草本なり、夏秋頃黄色の小頭状花を開く邊花は舌状花冠にして中心花は管状なり、葉は卵形にして缺刻を有し微尖頭あり、作り菊の原種なるべしといふ、瘦果を結ぶ、

あはいちご

きいちごの項を見よ、

あづき(赤小豆)

屬

豇科、いんげんまめ

圓圃に栽培する草本にして夏時黄色の花を開く、兩體雄蕊を有す、種子は通常帶

赤色なれども稀に白色のものあり、種子を食用及洗粉せなし又あんを製す、

あまぢのき(土常山)

ちさの屬

虎耳草科、あ

小木本なり、花は二様あり、外國の花は大なる萼を有す、花は初め青く後紅に變す、葉を製して甘茶となす、

あぢさゐ(八仙花)

屬

虎耳草科、あぢさ

花は美麗にして其多數は大形花瓣様の萼を有し、葉は平滑卵形にして鋸齒を有す觀賞用として栽培し、又花を薬用となす、

あせだいこん

いぬがらしに同じ其項を見よ、

あらかぎ

いちぬに同じその項を見よ、

あかめがしほ(楸)

屬

大戟科、あかめがし

葉は多くは掌状に分裂し、花は雌雄異株

に生し、雄蕊は多數あり、花序は圓錐状なり、木材を種々の用に供す、

あぶらぎ(罌子桐)

ぎり屬

大戟科、あぶら

花は單性にして花瓣を有し、葉は往々掌状に分裂す、木材を種々の用に供し種子より油を採る、この油は大毒なり、又樹皮を染料に供す、

あぶらな(蕪薑)

屬

十字花科、あぶらな

廣く栽培する草本にして總状花序をなし黄色の花を開く、四瓣四萼ありて十字形をなし四強雄蕊ありて其莖脚には綠色の密腺あり、長角状の穎をなし後開裂して多數の種子を散布す、葉は根生葉と莖生葉との二種あり、根生葉は大にして缺刻あり、莖生葉は小にして全邊なり、一種の臭氣を有すれども食用に供せらる、

其種子は製油の原料となし、又鳥飼に用ふ、

あじむりさう

一名あわもりしやうま、

虎耳草科、あわもりしやうま屬

葉は數回複葉にして深綠色なり、光澤あり、小葉は狹長し花は通常白色にして花瓣は倒卵形或は筵形をなす、觀賞用として栽培す、

あじむりしやうま

其項を見よ、

あわもりさうに同じ

あかしやうま

一名きりあししやうま、虎

耳草科、あわもりしやうま屬

葉は潤き小葉を有し、花は白色にして花瓣は倒披針形なり、

あま(亞麻)

亞麻科、あま屬

栽培草本なり、葉は細く花は帯紫色なり、五個の花柱と五室の子房を有す、莖より纖維を採り種子より油を搾り之を薬用

其他の用に供す、

あまも(大葉藻) 一名あぢも、眼子菜科、あまも屬、

海生草本なり、花は葉鞘内に隠存し、雄蕊と雌蕊とは扁平なる軸の一面に着生す、葉は甚だ長くして五分内外の幅を有す、種子には縦溝あり、葉を肥料織席料或は倚子及蒲の心に用ふ、

あね(藍) 蓼科、たて屬、

草本にして廣き披針形の葉を有す、莖は一二尺に達し節毎に膜質の托葉あり、秋紅色の花を開く、花序は比較的短き總狀にして密生せる花よりなり、花は下垂せず單花被にして五裂し八雄蕊あり、三角形の瘦果を結ぶ、葉より葉青を製す、染料として最も要なり、

あきぐみ 胡頹子科、ぐみ屬、

木本なり、通常葉腋に數花を生じ、殆ど

球形にして赤色の果實を生ず、果實を食用に供す、

あじいちご きいちごに同じ其項を見よ、

いの部

いぬぐす 一名たまぐす、一名たぶのき、樟科、いぬぐす屬、

木本にして葉は草質をなし、花序は葉より短かく小枝は平滑なり、種子より油を搾り樹皮を染料に供し、木材を種々の用に供す、

いぬがらし(蕪菜) 一名あせだいでん、十字花科、いぬがらし屬、

自生草本にして花は黄色なり、下部の葉は羽狀に分裂し、果實は殆ど圓筒形にして狹長なり、

いぬなづな(葶藶) 十字花科、いぬなづな屬、

葉は有毛楕圓形にして粗鋸齒を有し、花は黄色にして總狀花序に排列す、

いしもちさう(茅膏菜) 茅膏菜科、まうせんこけ屬、

小草本の一種にして新月形の葉身を有し、葉の腺毛狀突起によりて小蟲を捕獲し、之を其養料となす、

いはべんけい 一名いはきりんさう、景天科、べんけいさう屬、

草本の一種にして花は雌雄異株に存し、其各部分は四の數より成り、葉は覆瓦體に排列す、觀賞植物なり、

いはきりんさう いはべんけいに同じ其項を見よ、

いす 一名ひよんのき(蚊母樹)金縷梅科、いす屬、

葉は常緑にして、花瓣は存在せず、木材を種々の用に供し、又觀賞用として栽培す、

す、

いぬぐくら 薔薇科、さくら屬、根皮を染料に供す、

いぬつけ 冬青科、もちのき屬、

葉は楕圓形或は倒卵形にして少數の鋸齒を具し、幹は一丈餘に至り、果實は紫黑色にして小形なり、觀賞用として栽培し又木材を印刷櫛等の料となす、

いちりんさう(雙瓶梅) 毛茛科、さりかぶさ屬、

草本にして陰濕の地に生ず、早春白き花を開く、其の高さは五六寸内外に達し萼片大にして五あり、小葉は深裂す、觀賞用植物なり、

いはひば(卷柏) 一名いはまつ、卷柏科、いはひば屬、

山中の巖石に附着す、莖は細長く四五寸に達するものあり、葉は小形にして多數

あり、通常大小二様の胞子を有し、大胞子嚢は四個の大胞子を包含す、觀賞用として栽培す、

いはまつ いはひげに同し其項を見よ、

いはたけ(石茸) 真菌類、いはたけ屬、深山の巖石に自生し、平面状にして表面は灰色表面は暗黒色なり、根毛を有す食用に供す、

いぬのふとり(婆々納) 支參科、くが

いさゝ屬、

草本にして所々に野生す、莖は平臥し、葉は小卵状心形にして葉柄あり、縁邊に鋸齒あり、早春小形の淡紅色の花を開く花は葉腋に單生して殆んど葉と同長なる柄を有す、

いさくら(軟條海棠) 一名しだれひ

がん、薔薇科、さくら屬、

木本なり、葉は長橢圓形或は披針形なり、

萼は圓筒形をなし、花柄は稍長し、花冠は五瓣を有し淡紅色なり、觀賞用として栽培し、木材を種々の用に供す、

いぬゑんじゆ(榎槐) 一名くろゑんじ

ゆ、荳科、いぬゑんじゆ屬、

莢は扁平にして線形なり、木材は種々の用に供す、

いんげんまめ(菜豆) 一名たうささげ、

いんげんまめ屬、

花序は總狀にして葉より短かく、花は白色或は帶紫色なり、種子及若莢を食用に供す、

いたちささげ(莊芒決明) 一名いんご

うさう、荳科、れんりさう屬、

葉は二對以上の卵形の小葉より成る、葉を殺蟲料に供すべし、

いはたぼこ(苦苣苔) 一名いはな又いはちしや、苦苣苔科、いはたぼこ屬、

葉は根生にして平滑なり、花莖は其上端に聚繖花序を生し、花莖は副狀に五裂し子房は上生にして一箇の花柱を具ふ、觀賞用として栽培し、葉は食用に供す、

いはうめ 岩梅科、いはうめ屬、

深山に自生する小植物なり、

いはうちば 岩梅科、いはうちば屬、

深山に生し、稍扇狀の葉を有す、

いはかみ 岩梅科、いはかみ屬、

深山に生す、葉は圓狀或は卵狀心形にして、鋸齒を帯ひ光澤あり、花莖は葉より長く、花序は總狀にして三個以上の花より成り、花冠は帶紫色なり、

いはつぎ 一名たてやまわつぎ、荳科、

いはわつき屬、

草本にして深山に生す、花は總狀花序に排列す、

いぎり椅 椅科、いぎり屬、

葉は心形をなし、花は雌雄異株にして花辦は存在せず、萼片は多くは五箇を有す、花序は圓錐狀なり、庭園に栽培し、又木材を種々の用に供す、

いはれんげ(石蓮華) 景天科、いはれんげ屬、

葉は橢圓形或は長橢圓形にして尖頭を有せず、下部の葉は覆瓦様に密生し、花は雌雄異株にして白色なり、觀賞用として栽培す、

いらもみ 松柏科、はりもみ屬、

深山に産する木本なり、木材を種々の用に供す、

いてふ(公孫樹)或は(銀杏) 一名ぎ

んなんのき、松柏科、いてふ屬、

扇形の葉を有する木本なり、花は單性にして雌雄異株なり、木材を種々の用に供し、種子を食用に供し、又觀賞植物とし

て栽培す、
いぬがや(粗榧) 一名へぼがや、松柏科、いぬがや屬、葉は對性して稍二縱列をなし、黃綠色を呈す、種子より油を製し、又觀賞用として栽培す、

いちね(紫杉) 一名あららぎ、松柏科、いちね屬、

高山に生ずる木本にして飛彈下野等に多し、葉は披針狀をなして互生す、花は單性にして雌雄は異株なり、果實は紅色盃狀の假種皮にて包まる、木材を種々の用に供す、

いはらも 茨藻科、いはらも屬、

淡水及び鹹水に生ずる草本なり、葉は廣線形にして殆ど羽狀裂様の齒牙を有し、花は單生し葯は四室を有す、

いね(稻) 一名こめ又うるしれ或はうる

ち、禾本科、いね屬、
 禾本科中最も要用のものにして水陸兩種あり、三四尺の高さに生長す、葉は細長く葉柄の下部は莖を包む、柄の上部に舌狀片あり穎果を結ぶ、種子を食用並に製酒の料となし、莖及葉を繩蓆其他種々の用に供す、

いぼくさ(水竹葉) 鴨跖草科、いぼくさ屬、

水田溝等に生ずる草本にして、細長き尖葉を帶紫白色の花冠を有す、

いはしやうぶ 一名おほぼはなせきしやう百合科、いはしやうぶ屬、

花莖は短毛を有して粘質を分泌し、花は白色なり、

いちねづ(鳶尾) 鳶尾科、いちねづ屬、

花柄は單一なるか或は岐をなし、花蓋の片は毛狀の鋸齒を有せず、觀賞用として栽培す、

栽培す、

いらくさ(蕁麻) 一名いたいたぐさ又まむしぐさ、蕁麻科、いらくさ屬、

葉は心形にして重鋸齒を有し、托葉は互に結合す、皮より纖維を採りて之を糸に製す、

いたどり(虎杖) 蓼科、たで屬、

山野に自生し、長き花梗上に花を開く、莖は直立し酸性液を含む、萼は花後著しく膨大して翼を生ず、單花被にして八雄蕊あり、疲果を粘ふ、若き枝を食用に供す、

いぬびゆ 一名のびゆ、莧科、ひゆ屬、

路傍園圃等に自生する草本なり、葉は長卵形にして食用に供す、

いとぎんぼうげ 毛茛科、むまのあしがた屬、

有毒草本にして高山に産す、葉は細長線

形にして全邊なり、

いかりさう(淫羊藿) 小蘗科、いかりさう屬、

花序は少數の花より成り、瓣片は長き距を有す、藥用植物なり、又觀賞用として栽培す、

いぼたのき(水蠟樹) 木犀科、いぼたのき屬、

小木本なり、葉は長橢圓形にして通常五分内外の幅を有し、花梗は多數の毛を具ふ、花冠の裂片は通常外反せず、此木にて蠟虫を養ひ其より蠟を採る、

いぬほづき(龍葵) 一名やまほづき、又たうしほづき、茄科、なすび屬、

有毒草本なり、花は白色にして繖形花序に排列し、果實は球形にして黒色を呈し、葉は卵形なり、

いせはなび 爵牀科、いせはなび屬、

小木本様の植物なり、莖は少しく脹れたる節を有し、花は淡紅紫色にして枝の頂端に於て穗状をなす、觀賞用として栽培す、

いちび 一名きりあや、又さるごま、又ございば、錦葵科、いちび屬、

葉は心形にして尖り、花は葉腋に單生し、花瓣は黄色を呈し、雄蕊は花瓣より短く、莖は草本なり、莖の皮より纖維を採り之を種々の用に供す、

いちやくさう(鹿蹄草) 鹿蹄草科、いちやくさう科、

葉は楕圓形にして深緑色をなし、脈は緑白色なり、花梗は長くして總状花序を生ず、觀賞植物なり、

いはなし 石南科、いはなし屬、

小木本にして葉は楕圓形をなし、花序は總状にして少數の花よりなり、花冠は萼

より長からず、果實は食すべし、

いうげんおとんそく(有限維官束)

維管束に形成層なく、從て莖幹を無限に増大することなし、

いうへいえう(有柄葉) 葉に柄を有するものを云ふ、櫻梅等の葉は其の適例なり、

いうげんくじよ(有限花序) 又下降

花序とも云ふ、なてして、はこべ等の如先くづ先端の花開き、順次下部に開花するを以て花軸は成長に限り有るものなり、岐繖花卷繖花密繖花團致花團繖花等の種類あり、

いくじゆせい(異花受精) 同一花の

花粉が其胚珠を受精せしめずして他花の胚珠を受精せしむるを云ふ、其受精の媒介方法により左の種類あり、風媒花風力によりて花粉を送るもの、はしほみ、ま

つ等の如し、蟲媒花蟲類に附着して花粉を送るもの美麗なる花冠を有するものは

皆然り其他水媒花鳥媒花等あり、

おとんそく(維官束) 植物纖維と稱する組織にして、空氣及び液汁を通ぜしめ、かれて其植物體を堅固ならしむるものなり、

うの部

うまのあしがた(毛茸) 一名きんぼう

げ、毛茸科、うまのあしがた屬、

山野濕地に自生する草本なり、初夏黄色の花を開く、五萼五瓣多雌蕊多雄蕊より成る、葉は掌狀に分裂す、全體粗毛を被り其汁液は無色にして之を味ふときは恰も舌を焼く之感あり、之れを皮膚に塗れば腫起す、果實は凸隆せる花托上に集合せる庾果にして一見金米糖に似たり、有

毒草本なり、

うまのすすくさ(馬兜鈴又土青木香)

一名うまのすすかけ、一名おはぐるばな馬兜鈴科、うまのすすくさ屬、

上昇木本にして鈍頭長心形の全邊葉と上部の黒紫色にして下部の綠色なる萼とを有す、藥用植物なり、

うまのすすかけ うまのすすくさに同じ

その項を見よ、

うしたきさう 一名おらんだごしつ、柳

葉菜科、たにたて屬、

莖は二尺許の高さに達し、頂上に總状花序を生じ、花瓣は白色にして二裂し、葉は心形にして長き柄を具ふ、

うめもどき(落霜紅) 冬青科、もちの

き屬、

木本なり、葉は一年生にして鋸齒を有し花は短き柄を具して帶赤色或は白色をな

し、雄蕊は花弁より短く果實は赤色或は帯白色にして小形なり、觀賞用として栽培す、

うまごやし(昔荷) 荳科、うまごやし屬、

所在に繁生する草本にして、托葉は細裂し、花梗は短くして少數の黄花を生じ、果實は螺旋狀にして毛狀の突起を具ふ、肥料及馬の食料となす、

うごぎ(五加) 五加科、うごぎ屬、

莖は刺を有し葉は掌狀複葉なり、通常五個の小葉より成り、小葉は小鋸齒を有して殆ど平滑なり、花瓣は綠黄色なり、藩籬となし又葉を食用に供す、

うご(常歸) 五加科、うご屬、

莖は草本なり、葉は通常二回羽狀複葉をなす、若き葉及莖を食用に供す、一種の香氣ありて味佳良なり、

うぬきやう(懷香) 繖形科、うぬきやう屬、

もと地中海近邊の産なれども今は遍れく各地に培養せらる、葉莖共に特異の香氣を有し、葉は細裂して絲の如し、花は黄色にして小形なり、果實は小楕圓形をなす、果實を藥用及食用に供す、

うりのき(八角楓) 山茱萸科、うりのき屬、

木本にして葉は稍あをぎりの葉に類し、花瓣は細長くして白色なり、

うめがよみづ 鹿蹄草科、うめがよみづ屬、

小草本にして葉は卵狀披針形をなし、花は白色にして花梗の頂上に單生す、觀賞植物なり、

うつぼぐさ(除州夏枯草) 唇形科、うつぼぐさ屬、

草本にして路傍に多く自生す、花は深紫色にして稀に白色のものあり、藥用植物なり、

うるし(漆) 漆樹科、うるし屬、

本木にして小葉は中助の側兩に十五個内外の脈を有す、莖より汁液を出して之を漆に製し、果實よりは臘を製し、又木材を種々の用に供す、

うきくさ(水萍) 浮萍科、うきくさ屬、

水面に浮生する扁平の小植物にして各地に産す、扁平體の下面は通常紫色を帯ぶ、

うむゆり(蕎麥葉貝母) 一名がはゆり、一名ねずみゆり、百合科、ゆり屬、

葉は心形にして長き葉柄を有し、花序は總狀にして少數の花より成り、花蓋は淡黄緑白色なり、鱗莖を食用に供す、

うらじろもみ 一名みつみれもみ。松柏科、もみ屬、

木本にして武州三峯山に産す、木材を種々の用に供す、

うきごけ 地錢類、うきごけ屬、

隱花植物の一種にして陰地の水中に自生す、莖葉の別なし、水上の浮ぶ兩性器共に體內にあり、子嚢は不規則に破裂し胞子を出す、

うらじろ 蕨類、うらじろ屬、

隱花植物の一種にして山野に自生し葉はゼンマイに似て其裏白し、環帯は横にありて全周す、子嚢は縦裂して胞子を出す、觀賞用として栽培し、又其葉柄を種々の用に供し、其葉を正月の飾りに用ふ、

うめ(梅) 薔薇科、さくら屬、

葉は楕圓形或は卵形にして尖り、花は五瓣よりなりて紅白等種々あり、且一種の芳香を有す、果實の内部は核に密着す、果實を食用に供し、木材を種々の用に供す、

し、又觀賞用として栽培す、
うしほほづき いぬほほづきに同じその
項を見よ。

ゑの部

ゑぞまつ(蝦夷松) 松柏科、まつ屬、
常緑の喬木にして、幹は高さ數丈に達し、
夏月雌雄花を開き後球果を結ぶ、その形
樅に似たり、材は輕軟白色なるを以て曲
物箱類及び種々の器物を造るに適す、主
として北海道に産するを以て蝦夷松の名
あり、

ゑぞぎく(翠菊) 菊科、ぎく屬、
越年生の草本にして、莖 高さ一二尺に
達す、夏月花を開く、下種の季節により
て或は一年草となる、一年草のものは秋
月花を開き、花に白色紅色紫碧色等種々
あり、多く園藝してその花を賞観す、

ゑんどう(豌豆) 荳科、ゑんどう屬、
越年生の攀登植物にして、莖の長さ三四
尺に達し花梗は二箇或は數箇の大形の花
を生し、主として園圃に栽培す、其の子
實及び嫩莢を煮て食し、又炒りて食し、
或は糕菓の料に供す、

ゑのき(榎) 蕁麻科、ゑのき屬、
落葉の喬木にして、諸國に自生多し、幹
の高さ數丈に達し、雄木と雌木とあり、
又一株に雌雄兩花を開くものあり、花は
淡黄色にして春月新葉の出つると共に開
く、後小圓子を結ぶ、熟して赤色となり
味甘くして食ふべし、材は黄白色にして
緻密なり鑢作に用ふ、
えごま (荏) 唇形科、
一年生にして園圃の耕作物なり、春の末
に下種し、莖は高さ二尺餘に達し、枝梢
に長き穗を出し唇形の小白花を開く秋に

至りて種子成熟す、收めて油を搾るこの
油は食料となし、又雨衣紙傘に塗りに良
し、或は菜子油に和して凍沍を防ぐの効
あり、又種子は炒りて胡麻に代用し或は
小鳥の飼料となす、

ゑんじゆ(槐) 荳科、ゑんじゆ屬、
落葉の喬木にして幹は高さ二三丈に達
し、葉は一回羽狀複葉を有し、小葉は帯
白色の下面を有してその形大ならず、初
夏梢頭に穗をなして黄白色の蛾形花を開
く、後連球狀の莢を結ぶ、材は堅くして
かつ密なり器具を作るに適し、又花芽を
染料に供す、

えびづる(蓼蕒) 葡萄科、ぶどう屬、
山野に多き植物にして葉は掌狀に分裂
し、下面に淡赤白色の毛を密生す、果實
は紫黑色にして食用に供すべく又酒を醸
すべし、

ゑにしだ(金雀花) 荳科、ゑにしだ屬、
小木本にして葉は一個或は三個の小葉よ
り成り、綠色の枝は時に無葉なることあ
り、花は黄色にして美麗なり、觀賞用に
して栽培す、

ゑびね 菊科、ゑびね屬、
草本にして樹下竹林等に自生す、葉は潤
くして長く、花は總狀の穗狀花序に排列
し、春時開花す、花瓣の中央裂片は二深
裂し、距を有す、萼片及び花瓣は褐紫色
唇瓣は淡紫或は白色を呈す、觀賞植物な
り、

えうへい(葉柄) 葉の基脚の柄狀をな
せる所を云ふ、即ち葉脈の派出部なり、
えうみやく(葉脈) 葉面の筋を云ふ、
滋養分を輸送するの用をなすものにし
て、維管束より成る、
えうじよ(葉序) 互生葉の第一葉より

直上の葉に至るまで莖を一周して何枚かの葉を有す、其葉の葉により二枚なるときは第二列の葉序三枚なるときは第三列の葉序と云ふ、

えいこじ(穎果) 複子房單胞より成る、稍々瘦果に類す、但し其果皮は種子に密着するを以て異れり、いれ、むぎ等の果の如し、

えうしん(葉身) 葉の扁平なる部を云ふ、

えうが(幼芽) 種子の胚中に存する芽にして、胚軸の上端にあり、生長して莖となるものなり、

えうりよくしつ(葉綠質) 葉黃質及葉青質の二色素よりなり、植物細胞中に含有して植物固有の色を呈す、アルコールエーテル、ベンジン揮發油等に溶解するものなり、

えうこん(幼根) 種子の中に存する胚の根に相當する部分にして、胚軸の下端にあり、生長して根となるものなり、

を の 部

をみなへし(女郎花) 一名をみなめし又あはばな、敗醬科、をみなへし屬、越年生の草本にして山野に自生す、莖は高さ三四尺に至り、夏秋の間莖頭に繖状をなして細小花を開く色は群黄色なり、嫩植物を食用さなし又花を賞観す、
をまつ くるまつに同じその項を見るべし、

をだまき(櫻斗菜) 毛茛科、をだまき屬、宿根草にして、春末莖梢に花を開く、單瓣紫碧色又は複瓣或は白色あり、別に山生のものあり「ヤマナゲマキ」と云ふ觀賞用として栽培し又藥用に供す、

おほせり どんぐせりに同じその項を見るべし、

おほやまれんげ 天女花、木蘭科、もくれん屬、

園養の喬木にして幹は高さ一丈餘に達し、その形木蘭に似たれこもや、小さく、花は白色にして紅紫を吐きて芳香美觀なり、

おむな(芭) 一名す、き、禾本科、

宿根草にして山野に自生す、秋月叢葉間より葉を抽く、高さ五六尺頂に多岐の花穂を出す、實は熟して絮となり飛散す葉を以て繩に纏ひて用ふ、この草は秋の七草の一に數へられ園圃に栽培す、

おほす(茨) 一名いばらばす、一名みつぶき、睡蓮科、おにげす屬、

葉は圓形をなし、萼片は厚くして内面は帶紫色を呈し外面は帶綠色をなし花瓣は

帶紫色なり、地下莖種子並に若き葉柄を食用に供す、

おしろいほな(紫菜莉) 紫菜莉科、おしろいばな屬、

葉は有柄卵形にして往々心形の基脚を有し、花は赤色黄色或は白色等の合片萼を有す、觀賞用として培養す、

おもと(萬年青) 百合科、おもと屬、

葉は草質にして根莖より生し、花は穗状花序に排列し、短き綠黄色の花蓋を有する花を開く、秋季赤色の漿果を結ぶ、觀賞植物中の著名なるものなり、

おほむぎ(大麥) 禾本科、おほむぎ屬、重要なる農作物の一にして一年生或は二年生の直立草本なり、莖は圓筒をなし、葉は細長直脈葉なり、葉柄は筒状をなし莖を包圍し頂端に小舌片あり、雄蕊は三個雌蕊は一個にして羽状の二柱頭を有

す、穎果を結び芒あり、種子を食用に供し、麥稈を帽子眞田其他の小細工に用ふ、
ねらんだせきちく あんじやべるの項を見よ、

ねほほがし あかがしの項を見よ、
ねにゆり(卷丹) 百合科、ゆり屬、

寒地の山中に自生す、葉は披針形にして直脈なり、葉腋に珠芽を有す、花蓋は赤黄色にして暗紫色の斑點あり美麗なり、無被鱗莖を有す、觀賞用として培養し、又莖を食用となす、

ねほほご(車前) 車前科、おほぼご屬、葉は卵形又は楕圓形にして通常五個の肋を有し、花は小形にして長さ穗状花序に配列す、葉を食用に供し、種子を藥用に供す、

ねになべな 山蘿蔔科、なべな屬、大草本なり、花は卵形又は楕圓形の花序

を成し花冠は白色を帯ぶ、果實は多花果にして頂端の鈎状をなせる硬き苞を有す、之を以て毛織物を梳き毛を起さしむ、

ねほいぬふり 玄參科、くがいさう屬、莖は平臥し葉は小楕圓形又は卵形にして

葉柄あり、花は葉腋に單生して葉より長き柄を有し、花冠は紫碧色なり、
ねれいふ 一名ほろさのき、木犀科、おれいふ屬、

葉は披針形或披針状長楕圓形にして常緑なり、核果を結ぶ、果實より油を搾り之を食用及藥用に供し、又樹皮を藥用に供す、

ねらんだごしつ うしたきさうに同じ其項を見よ、

ねにぐるみ 胡桃科、くるみ屬、山野に生する木本にして、葉は漆樹の如く、細き缺刻ありて對生す、夏淡黄色の

花を開き、花梗長く穂をなして、垂る、さまざまに似たり、實は桃に似て青く、熟すれば黒變す、核は堅けれども、實は食ふべし、材は銃砲の臺、箱類、盆等に用ひ、樹皮は染料となすべし、

ねにしむり 瑞香科、ちんちやうけ屬、一名はなてうじこ云ふ、葉は夏落ち、冬に生す、依て一名なつぼうすとも云ふ、天城山邊にては一名をくらがんびと稱し、がんび紙の原料となす、

ねきなぐさ(白頭翁) 菊科、おきなぐさ屬、原野に自由する一小草本にして、春夏の交、尺許の小莖を出し、頂上に小葉を簇生す、菊の葉に似て白毛あり、頂に六瓣紫赤の小花、倒まに垂れて開く、中に一群の紫絲あり、暫くして花瓣落ち、白色に變す、小兒の髪を被るに似たり、依て

うなぬこ、うねご等の名あり、
ねもたか(野茨菰) 一名すぬたくわぬ、澤瀉科、おもたか屬、

球根草にして池沼又は水田中に自生すれども、又これを栽培してその球根を收む、大き四五分煮て食す味くわぬに似たり、
ねぐるま(旋覆花) 菊科、ごぼろ屬、宿根草にして、山野に自生するもの多し、莖は高さ二三尺に及び、黄色なる單瓣の花を開く、又複瓣のものあり、觀賞用として栽培し、又藥用に供す、

なうようしよくぶつかく(應用植物學) 農業植物中醫藥等直接に人世に關係あるものにつき論ずる、植物學の一派なり、

かの部

かや(榧) 松柏科、かや屬、木本なり、葉は披針状にして互生し兩面

共に綠色なり、花は單性にして雌雄異株に存す、雄蕊は四個の葯胞を有し雌花は裸出せる胚珠を有す、種子は核果狀なり、木材を種々の用に供し、種子を食用に供す、

がま(香蒲) 香蒲科、がま屬、

水生草本なり、葉は甚だ長くして五分前後の幅を有し、雄花より成れる部と雌花より成れる部とは接近す、葉を以て席を織り、雌花の熟せる穂に油を灌ぎ之を蠟燭の代りに用ひ、又雌花の熟せるものをホクチさなし、又觀賞用として栽培す、

からすむぎ(雀麥) 一名ちやひき一名すすめむぎ、禾本科、からすむぎ屬、

一年生の平滑なる草本にして田野に自生す、葉は細長直線様にして葉柄は下部笏狀をなして莖を圍む、小舌片あり、小穂は通常二三個の蓋花よりなり長さ甚を有す、有用なる牧草なり、

す、有用なる牧草なり、
からすびしやく(半夏) 天南星科、からすびしやく屬、

葉は三個の小葉より成り、有毒なる草本なれども其球狀の地下莖を藥用に供す、

かしは(檜) 一名ははそ一名もちがしは一名こがしは、殼斗科、かしは屬、

木本にして葉は長倒形卵にして、四五寸長く縁邊に波狀の鈍齒を有し下面に褐色の毛を有す、莖を薪炭料に供し、樹皮を染料及柔皮用に供し、又觀賞用として栽培す、

かのとゆり 百合科、ゆり屬、

葉は披針形にして葉腋に珠芽を有せず、花蓋は脚部より大に外方に反捲し、花は白色又は紅色にして暗紫色の斑點あり、白色の花を生するものをしろかのとゆり又はしらたまゆりと稱し、紅色の花を生

するものをかのこゆりと稱す、觀賞用として栽培す、

かぢのき(構) 一名かみのき、桑科、かぢのき屬、

直立木本にして枝は密毛を有し、葉は粗糙にして少しく楕形をなす、樹皮の纖維を製紙の原料に供す、

かみのき かのきの項を見よ、

かうぞ(楮) 桑科、かうぞ屬、

直立木本にして雌花は頭狀花序に排列し、雄花は穗狀花序に排列す、花絲は芽中に於て内曲す、樹皮の纖維を製紙の原料に供す、

かうやまき(金松) 松柏科、かうやまき屬、

木本にして紀伊の國高野山其他宮寺等に多し、木材を種々の用に供し、皮をマキハダと稱し水樽風呂桶等の空隙を塞ぐに

用ひ、又觀賞用として栽培す、
からだいじょう(大黃) 一名おほし、蓼科、からだいじょう屬、

葉は波狀を呈し葉柄の上面は平坦なり、藥用植物中の著名なるものなり、

かはほね(萍蓬草) 睡蓮科、かはほね屬、

水生草本にして水上に露出せる葉は箭狀心形をなし、萼片は黄色にして花瓣様をなし、柱頭は數裂して放線狀を呈す、觀賞用として栽培す、

かつら 雲葉科、かつら屬、

木本なり、葉は心狀圓形或は楕圓形にして鈍鋸齒を有し、下面は帶白色なり、木材を種々の用に供す、

からしな(芥) 十字花科、あぶらな屬、

草本なり、辛味を有する種子を辛料並に藥用に供し、又葉を食用に供す、

かたむみ(酢漿草) 一名すいものぐさ、

一名すゞめのはかま、酢漿草科、かたばみ屬、草本なり、各地に自生し酸味を有す、莖は傾臥し葉は通常三個の小葉より成り花は黄色なり、葉を食ふべく又之れを以て鏡を磨ぐべし、

がんび雁皮 瑞香科、がんび屬、

小木本にして絹絲狀の毛を有し、花序は頭狀に排列し、花蓋の裂片は筒部より四倍短く葉は卵形或は卵狀披針形なり、樹皮の纖維を製紙の料に供す、

かき柿 柿樹科、かき屬、

木本にして種々の變種あり、葉は淡綠色の外面に通常毛を帯びたる三分内外の葉柄を有し、果實は著名なるものにして之を食用に供し、シブ柿より柿シブを搾り、又木材を種々の用に供す、

からすうり(王瓜) 一名たまづさ 葫蘆科、からすうり屬、

科、からすうり屬、葉は淺く三乃至五裂して毛茸を具し、果實は紅色なり、根より澱粉を採り、果實を洗滌に用ふ、

かのこさう(纈草) 一名はるをみなへし 敗醬科、かのこさう屬、

葉は掌狀複葉にして小葉は鋸齒を有し、花は淡紅色なり、根莖を藥用に供す、

かりがねさう(蕪) 一名やまごりさう、一名むらちごり、一名ももちごり、馬鞭草科、だんぎく屬、

葉は卵形にして尖り、青色の花を開く、莖葉等諸部は強き臭氣を有す、

かばぢさ(水苦費) 玄參科、くがいさう屬、

淺水に自生する草本にして葉は披針形をなし、總狀花序は葉腋に生し、花は白色にして淡紅紫色の線を具ふ、莖葉を食用

かはらなでしこ(瞿麥) 一名なでしこ、

一名のなでしこ 石竹科、なでしこ屬、山野に自生す夏秋の頃淡紅色の大きな花を開く、花瓣の頭は深く細裂し、葉は狹披針形にして節部膨起す、觀賞用として栽培す、

からなでしこ せきちくに同じ、

かむらさう きつねのまごに同じ其項を見よ、

かたぎ くぬぎに同じ其項を見よ、

からなし くわりんに同じ其項を見よ、

かたくり(車前葉山慈姑) 一名かたくり、百合科、かたくり屬、

山地に自生する草本にして地下莖より二葉を出す、花は下向し鐘狀をなし、其片端外反す、地下莖を食用に供し、又之れより澱粉を製す、所謂かたくり粉これなり、

科、からすうり屬、

葉は淺く三乃至五裂して毛茸を具し、果實は紅色なり、根より澱粉を採り、果實を洗滌に用ふ、

かのこさう(纈草) 一名はるをみなへし 敗醬科、かのこさう屬、

葉は掌狀複葉にして小葉は鋸齒を有し、花は淡紅色なり、根莖を藥用に供す、

かりがねさう(蕪) 一名やまごりさう、一名むらちごり、一名ももちごり、馬鞭草科、だんぎく屬、

葉は卵形にして尖り、青色の花を開く、莖葉等諸部は強き臭氣を有す、

かばぢさ(水苦費) 玄參科、くがいさう屬、

淺水に自生する草本にして葉は披針形をなし、總狀花序は葉腋に生し、花は白色にして淡紅紫色の線を具ふ、莖葉を食用

かし あかがしの項を見よ、

かめんじょうくまかかん(假面狀花冠)

きんぎょさうの花の如く合併不齊整にして、恰も假面の如き狀をなす、

かけいこくごん(蛾形花冠) 又は蝶形

豆科植物の花に見る所にして離瓣不齊の五瓣よりなる、旗瓣翼瓣龍骨瓣などの名稱を有す、

かうぼんじょうくごん(高盆狀花冠) 合瓣整齊にしてわうばいの花の如し、

かく(萼) 花の最外部にあり、多くは綠色を呈す、花の内部の機關を保護するの用をなす、もさ葉の變形したるものなり、

梅桃の花の下部にある綠色の部分即ち之れなり、

かじょうたい(假晶體) 細胞中に含有する有機物の結晶形の休をなして存在する

ものを云ふ、

かひそう(假皮形)

單子葉植物の皮層は維管束の末端よりなる、之れを双子葉植物の皮層に對して假皮層と云ふ、

かはめ(皮目)

植物の硬皮層の細胞表皮外に露れて大氣を内部へ導く作用をなす部を云ふ、

かんせんえう(貫穿葉)

對生葉の葉の下部廣大となりて莖が其中央を貫きたる如く見ゆるものなり、つきぬきりんどうの葉の如し、

かこくじ(核果)

單子房より成れる果實にして閉果なり、果皮は三層よりなり、内皮は所謂核をなす、梅桃等の果實はこれに屬す、

きの部

きり白桐(玄參科、きり屬、

落葉木本なり、幹は高さ二三丈餘に達し、

葉は卵圓心臟形をなし、對生す、四五月

の頃紫色或は白色の花を開く、萼は五裂

し、花冠は鐘狀をなし、二強雄蕊と一雌

蕊とを有し、花後鳩卵の如き子實を結び、

熟して兩裂し、夥多の小扁子を散す、此

の木成長速かなり故にキリと名く、材は

白色輕鬆にして中心に髄孔あり、老樹の

の木理緻密なるを縞桐と云ふ、琴瑟机案

箆筒函箱木屬等の製作に用ふ、

きりあさ いちびに同じ其項を見よ、

きなのき規那 茜草科、あかね屬、

木本にして南アメリカのアンドレス山に産

す、樹皮を藥用に供す、藥用植物中最も

重要なるものなり、

きはだ(黄蘗又蘗木又黄柏) 芸香科、

きはだ屬、木本なり、内皮は黄色を有す、内皮を藥

用及染料に供し、又木材を種々の用に供す、

きんかん(金橘)

芸香科、みかん屬、木本にしてみかんの變種なり、葉は一個の小葉より成り、花は白色にして黄色の小果實を生す、觀賞用として栽培し、又果實を食用に供す、

きりしまつじ

きりしまに同じ其項を見よ、

きりしま石巖

一名きりしまつじ、石南科、つつじ屬、木本にして花は紅色なり、觀賞用として栽培す、

きつねのまご爵牀

一名かぐらきり、爵牀科、きつねのまご屬、葉は楕圓形にして殆ど全邊を有し、花は穗狀に排列し、花冠は白質にして紅紫色を帯び莖は草本なり、

きうり(胡瓜)

蒟蒻科、きうり屬、草本なり、葉莖ともに短くして刺を有し、花は黄色にして雄雌花を分つ、果實は細長くして刺を有し、食用に供せらる、

ききやう(桔梗)

桔梗科、ききやう屬、草本なり、花冠は廣鐘狀を呈し紫藍色又は白色なり、觀賞用として栽培し又藥用に供す、

きんぼつけ

うまのあしかたに同じ其項を見よ、

きつねのぼたん(回回蒜)

毛茛科、うまのあしかた屬、草本なり、葉は複葉にして三個の小葉より成り、小葉は有柄卵形にして缺刻及粗鋸齒を有し、雌蕊は多數ありて頭狀に排列す、有毒植物なり、

きび(稷)

禾本科、きび屬、草本なり、高さ二三尺に成長し小穗狀花

序は開出して下垂せる圓錐花序に排列す、種子を食用に供す、

きづた(常春藤) 一名ふゆづた、五加科、きづた屬

莖は上昇し、花瓣即ち瓣片は芽に於ては鑷合様に排列し、子房は五室を有す、觀賞用として栽培す、

きいちご 一名あはいちご、薔薇科、いちご屬

葉は三乃至五裂して缺刻狀鋸齒を有し、果實は黄色なり、果實を食用となす、

きくらげ(木耳) 真菌類、きくらげ屬、隱花植物の一種なり、生殖器は膠質にして杯狀をなし、外面に剪絨様の毛を有す、食用に供すべし、

きんみづひき(龍芽草) 薔薇科、きんみづひき屬、葉は不齊羽狀複葉にして花は總狀花序

に排列し、花瓣は五個ありて黄色を呈す、藥用食物なり、

きりんさう(費菜) 景天科、きりんさう屬

草本なり、花は長橢圓形或は長倒卵形なり、觀賞用として栽培す、

きく(菊) 一名しゆんぎく、菊科、きく屬

一回花を生ずれば枯死する草本にして、葉は二回羽狀に深裂し舌狀花は黄色或は白色なり、嫩植物を食用となし、又觀賞用として栽培す、

きく(菊) 菊科、きく屬、種類多し、莖は拇指大に長して灌木に似たり、葉は單葉にして羽狀に缺刻し其裂片に鋸齒あり、葉柄を有す、葉は許多集まりて頭狀をなし其外圍に數重の鱗片より成れる總苞あり、花に縁心の別あり縁

花は舌狀を呈し單に一雄蕊のみを具ふ心花は筒狀をなし五個の雄蕊と一個の雌蕊とを具ふ、雄蕊は集葯なり閉果を結ぶ觀賞用として栽培す、

きんなんのき いてふに同じ其項を見よ、**きんし(菌糸)** きこの類の莖に相當する部分にして、絲狀体なり、地中に埋存して錯綜す、

きこう(氣孔) 同化作用を營む際必要な孔にして、主に葉の裏面に多し、但しかはほれの如き植物は表面にのみ存す、中には表裏共に同數を有するものあり、濕氣多きときは開き少きときは閉つる働

をなす特別の細胞を有す、**きうみんし(休眠子)** 菌藻類の有性生殖より生ずる胞子にして、直に發生せずして多少の日時を経て發生するを以てこの名あり、

きやうぼく(喬木) 松杉の如き長く高さ

樹木の惣稱なり躑躅南天の如き矮小なる植物に對して云へる名なり、

きほんそしきけい(基本組織系) 植物体の表皮及緯管束系を除くの外植物体の組織の總稱なり、

きせいこん(氣生根) 大氣中にありて莖より生じたる根を總て氣生根と云ふ、たこのき、せきこく、ふうらんの根の如きものを云ふ、

きせいこん(氣生支根) 大氣中にありて莖より生じたる小根を云ふ、つたうるしの根の如きものこれなり、

きふし(吸枝) 植物の莖より發したる枝條の下部地に偃伏し處々より根を發し葉を出して新株を繁殖するものにて、ばら めぐさ等は其の通例なり、

きせいこん(寄生根) 自ら養分を吸收せ

す、他の植物に寄生してこれより養分を攝取するの用をなす、やどりきの如きものこれなり、

きうくじ(毬果) 多数の花より成る乾燥せる果實の衆合してなれる復果なり、故に一の果實なる如く見ゆるも其實然らず、もみ まつ等に見るべし、

きうけい(球莖) 地下莖の一種にして鱗莖に似て鱗片少なし、すねせんの球莖はその適例なり、

この部

くさのこ(白屈菜) 罂粟科、くさのわら

草本なり、葉は羽状複葉にして小葉は缺刻を具ふ、花は黄色にして繖状に排列し各長き柄を有し、花柱は短く果實は下部より上部に向ひて裂開す、有毒植物なれ

さも薬用に供するこさあり、

くらら(苦参) 一名くさふんじゆ、豆科、ふんじゆ屬

草本にして郊野に自生し、一回羽状複葉を有し、花は白黄綠色にして單總状花序に排列す、根を薬用に供し、莖葉の煎汁を菜蔬の驅蟲劑に用ひ、又莖の皮より纖維を採る、

くりんさう 櫻草科、さくらさう屬

草本なり、葉は長橢圓形にして大く上面は深綠色にして下面は淡綠色なり、花梗は長くして數層の花を輪生す、觀賞用として栽培す、

くろもじ(鉤樟) 樟科、くろもじ屬

木本なり葉は深く三裂し裂片は鋭頭なり、木材をコヤウジとなす、

くすのき(樟) 樟科、くすのき屬

熱帯地方に最も多き木本なり、葉は革質

にして羽状脈を有し、花は小形白黄色にして此植物は一種の香氣を具ふ、木材を種々の用に供し、又此植物より樟腦を製し之を薬用其他の用に供す、

くろまつ(黒松) 一名をまつ、松柏科、まつ屬

木本なり、葉は針状にして二個束生し常緑なり、花は雌雄同株にして雄花は穗状をなして新芽の下邊に簇生し、雌花は許多の鱗片よりなりて小毬状をなし、新芽の頂に生じ各鱗の内面に二個の胚珠を裸出す、木材を種々の用に供し莖より樹脂を取り又觀賞植物として栽培す、

くちなし(梔子) 茜草科、くちなし屬

木本なり、葉は橢圓形にして莖は直立し、花は大形にして香氣あり、果實を染料及薬用に供し、花を食用となし、又觀賞用として栽培す、

くは(桑) 桑科、くは屬

木本にして變種多し、葉の形状も亦種々あり、其邊縁に鋸齒を有す、花被は黄綠色にして萼と花冠との區別なし、又雌花雄花は異株に存し、共に穗状花序に排列す、葉を養蠶の料に供し、木材を種々の用に供し、樹皮の纖維を製紙の料に供し、果實を薬用及食用に供す、

くづ(葛) 豆科、くづ屬

草本なり、山野に自生し葉は三出し甚だ大なり、夏時紅花を開く、根より澱粉を採り莖より纖維を採り又莖葉を家畜の食用に供す、

くこ(枸杞) 茄科、くこ屬

花冠は淡紫色にして其裂片は繖瓦様に排列し莖は小木本なり、果實は赤色にして尖卵形をなす、葉を食用に供し、又茶の代用となす、

くさね(慈姑)

澤瀉科、くわね屬、水田沼池に生ずる草本にして葉は戟形或は箭形にして地下莖は球状の塊を生ず、花は單性にして雄花は多數の雌蕊を有し、花托は球形或は橢圓形にして果實は瘦果なり、地下莖の塊部を食用に供す、

くり(栗)

殼斗科、くり屬、木本にして葉は長橢圓狀披針形にして鋸齒を有す、初夏花を開き特異の臭氣を放つ、雌雄其花を異にし所謂單性花にして雌雄同株なり、雄花は數多集りて長き花軸上に着き十個よりなる、雌花は雄花の基脚に着生し三個相集りて綠色の小球をなし鱗狀の總苞を具ふ、果實は堅果にして其外面に總苞より變成せる栗毬を被る、果を食用に供し、木材を種々の用に供す、樹皮及果實の總苞を染料に供す、

くるみ

てうちぐるみ おにぐるみ ひ

めぐるみ さはぐるみ のぐるみ等の種類あり、

くさいちご(蓬蘽)

一名やぶいちご、薔薇科、さいちご屬、草本にして長軟毛を有す、花を生せる枝に於ける葉は三個の小葉よりなる、

くさぼけ(檀子)

一名のぼけ、一名ちなし、薔薇科、ぼけ屬、

山野に自生する小木本なり、葉は倒卵形にして小く、花は黄赤色或は白色を呈し、幹の高さは一二尺なり、觀賞用として栽培し、又果實を食すべし、

くとりん(木瓜)

一名からなし、薔薇科、ぼけ屬、

木本なり、樹皮の外層は次第に剝離し花は淡紅色にして枝の頂端に生し、萼の外面は平滑なり、觀賞用として栽培し、又果實を食用並に藥用に供す、

くろつる

あかりか、らに同し其項を見よ、

くぬぎ(櫟)

は屬、

一名かたぎ、殼斗科、かし木本なり、葉は長橢圓狀披針形にして鋸齒を有す、莖を薪炭料に供し、若き葉を染料に供し、葉を野蠶の食料に供し、樹皮を染料及柔皮用に供す、

くまさ(山白竹)

一名やきはざさ、一名ちまささ、禾本科、くまさ屬、

竹類中普通のものにして細き莖と廣き葉とを有す、莖及葉を種々の用に供す、
くみ あきぐみ、なつぐみ、まるはぐみ等種類多し、

くさいさう(草本威靈仙)

かいさう屬、

支參科、く草本にして葉は輪生なり、紫若色の花を穗状花序に排列す、萼は四裂或は五裂し

花冠も四裂又は五裂のものあり、二雄蕊を有す、觀賞用として栽培す、

くろぼ(麥奴)

菌類、くるぼ屬、

麥及其他の穀類の種子に生ずるものにして、胞子を生し、萌芽して菌絲と稱する少數の細胞より成る、纖維を害す有害菌なり、

くせんじょうくせん(管状花冠)

菊

くせんぜんくせん(完全花)

きうり、かき

くびく(具備花)

萼、花冠、雄蕊、雌

くせん(花盤)

花托の一部にして、萼と雌蕊との中間にあり、みかんの花盤の如きは其著しきものなり、

くせんたい(環帶)

羊齒植物の子嚢を圍繞するものにして、子嚢熟すれば環体の

一部破裂して、子囊の膜壁を横裂せしめ、以て胞子を飛散せしむ。

くむくむん(花冠) 花の外部の美麗なる部にして俗に花べらとも云ふ、其一片を

花弁と名く、内部機關を被護し生殖作用をなす爲め蟲類を誘致するの用をなす、

くむちゆう(花柱) 雌蕊中子房の突出したる如き部分にして、受精作用を補助するの用をなすものなり、

くむたく(花托) 花梗の最上部にして花の各機關を着生する所なり、いちごの如きは凸出しばらの如きは凹入す、其他種々の變化あり、

くむこう(花梗) 花軸より小柄を出して花を着くるときは、其小柄を花梗と名く、

くむちく(花軸) 枝又は莖の花を附くる部分を云ふ、

くむまゐ(花莖) 雄蕊雌蕊を併稱したる

名にして花の緊要機關なり、各其の項を見るべし、

くむひ(花被) 萼及び花冠を並稱したる名にして、其の用は内部機關を保護するにあり、

くむがい(花蓋) 萼及花蓋が同様にして分別すること能はざるときは之れを花蓋と云ふ、多くは單子葉植物に多し、ゆり、かきつばた等の如し、

くむよ(花序) 花の花軸の上に排置する状態を云ふ、無限花序、有限花序等あり、其部を見るべし、

くむんも(冠毛) 花の變形したるものにて種子散布の用をなす、三種あり、一を有柄絲狀冠毛と云ひあさの如きもの一を無柄絲狀冠毛と云ひ、ふきの如きもの一を無柄羽狀冠毛と云ひ、はらもんじんの如きもの、これなり、

ふ、木材の良質なるものを種々の用に供す、

くむし(花絲) 雄蕊の柄にして通常繊細なる絲狀をなすを常とせ、或は幅廣く平たきものもありその用は生殖作用を容易ならしむるにあり、

くむんぼく(灌木) やまぶき、つじ、なんてん等の如き矮小なる樹木の惣稱なり、松杉の如き高く大なる木に對して云へる名なり、

くむいけい(塊莖) 地下莖又は地下枝の多量に養分を蓄積して、甚だしく膨脹せるものにて、じゃがたらいは其の適例なり、

けの部

けやし(櫻) 榆科、けやし屬、

木本なり、諸國に自生し、又栽植す、幹高さ數丈に達す、春新葉と共に雄花雌花を開く、細小淡黄色なり、後小扁子を結

げんげ(紫雲英) 一名れんげさう、豆科、げん屬、

草本なり、原野に自生す、長き花梗の上部に繖狀の短き總狀花序を生じ、花は帶紫色又は白色なり、花の形蓮花に似たり故に名く、空田に播種し翌年土中へ埋め肥料となす、

けし(罌子粟) 罌粟科、けし屬、

草本なり、園圃に栽う、莖高さ四五尺白綠色の抱を莖葉有し、花芽は下垂す、初夏花を開く、紅白粉紅或は白質紅邊等あり、藥用觀賞用並に食用植物なり、其乳液より阿片を製し、種子及若き葉を食用に供す、

けんぼなし(枳椇) 鼠李科、けんぼなし屬、